

仙台市文化財調査報告書第64集

宮城県仙台市

郡山遺跡 IV

—昭和58年度発掘調査概報—

1984・3

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第64集

宮城県仙台市

郡山遺跡IV

—昭和58年度発掘調査概報—

1984・3

仙台市教育委員会



S E 429 井戸跡出土遺物

序

郡山遺跡の発掘調査は、[国の補助対象事業として本遺跡のもつ歴史的性格や範囲等を確認するべく5ヶ年計画をもって、昭和55年から実施してまいったものであります。今年度でその4年目が経過しようとしております。

方四町の官衙城が確認されて以来、発掘調査のたびに、新しい事実が相次いでおりまして、郡山遺跡がもっております歴史的性格付けや、その範囲等につきましても、学問的には、まだまだ解決しなければならない問題があります。しかし、東北の古代史を解き明かす上では、まさに重要な遺跡であると受けとめております。

この報告書は昭和58年度の発掘調査の内容をまとめるとともに事業実績の報告といたしまして、ここに公開するものであります。

この事業が比較的スムーズに運営されて来ましたかげには、ひとえに土地の所有者の皆さんはもとより、地域住民の方々のご理解ある御支援があつてのことと深く感謝を申し上げるものであります。

なお、本書が学兄諸氏の研究活動に資することはもとより、市民各位の文化財に対する愛護精神の向上に役立つのでありますれば額外のよろこびとするものであります。

昭和59年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

例　　言

1. 本書は郡山遺跡の昭和58年度範囲確認調査の概報である。

2. 本調査は国庫補助事業である。

3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆　木村浩二……Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ2・4、Ⅹ

長島栄……Ⅲ1・3・4、Ⅴ、Ⅸ

菅原和夫……Ⅵ2・3

金森安孝……Ⅳ、Ⅴ、Ⅶ、Ⅷ

神成浩志……Ⅸ2

遺構トレース　木村、菅原、斎藤誠司、谷津妙子、安喰真由美

遺物実測　長島、菅原、神成浩志、三浦秀樹、佐藤　淳、鈴木勝彦、菊地宣之、
谷津、安喰、高橋りえ、鈴木和子、高橋綾子、田村ゆかり、茂泉　満、
横川麻子

遺物トレース　金森、菅原、三浦、谷津、安喰、赤井沢まり子

遺構写真撮影　木村、長島、金森、菅原、神成

遺物写真撮影　木村、金森

遺物拓影　菊池、鈴木(勝)、鈴木(和)

遺物補修復元　赤井沢進、赤井沢千代子、石川勝子、谷津、安喰、高橋(り)、小林　光、
横川

編集は調査全員がこれにあたった。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo.1原点 ($X=0$ 、 $Y=0$)
とし、高さは標高値で記した。

5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。

6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

S A 柱列跡・柵木列・杭列 S I 竪穴住居跡・竪穴造構

S B 建物跡 S K 土 壤

S D 溝 路 S X その他の遺構

S E 井 口 路

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

C 土師器 (ロクロ不使用) G 平瓦・軒平瓦

E 須恵器 (ロクロ使用) L 木器・木製品

F 丸瓦・軒丸瓦 N 金属製品

8. 本概報中の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐原:1970)を使用した。

目 次

序 文	
例 言	
I はじめに	1
II 調査計画と実績	3
III 第35次発掘調査	7
IV 第36・39次発掘調査	57
V 第37次発掘調査	58
VI 第38次発掘調査	59
VII 第40次発掘調査	66
VIII 第41次発掘調査	67
IX 第42次発掘調査	70
X 総 括	72
調査成果の普及と関連活動	

I はじめに

1. 調査体制

昭和58年度は郡山遺跡範囲確認調査5ヶ年計画の4年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課

課長 永野昌一

主幹 早坂春一

文化財調査係 係長 佐藤 隆

教諭 背原和夫

主事 木村浩二、金森安孝、長島栄一

文化財管理係 係長 大沢隆夫

主事 岩沢克輔、山口 宏

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 伊東信雄（東北学院大学文学部教授 考古学）

副委員長 佐藤 巧（東北大学工学部教授 建築史）

委員 佐々木光雄（宮城県多賀城跡調査研究所所長兼東北歴史資料館副館長 考古学）

工藤種樹（宮城学院女子大学助教授 考古学）

須藤 隆（東北大学文学部助教授 考古学）

発掘調査に際して、下記の方々諸機関から適切な御教示をいただいた。記して感謝したい。

宮城県教育庁文化財保護課 藤沼邦彦、加藤道男

宮城県多賀城跡調査研究所 進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、後藤秀一、

佐藤則之

文化庁記念物課 主任調査官 河原純之

調査官 桑原滋郎

国立歴史民俗博物館 助教授 平川 南

助教授 阿部義平

東京大学文学部 教授 笹山晴生

国学院大学文学部 教授 林 陸郎

東北大学文学部 助教授 今泉隆雄

東北学院大学文学部 講師 熊谷公男

(財)千葉県文化財センター 石山広美、鶴岡英司

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 高橋一大、立石盛訓

埼玉県県民部県史編さん室 中村倉司

日本考古学研究所 柿沼脩平

発掘調査および遺物整理にあたり次の方々の御協力をいただいた。

地権者

赤井沢久治、島田元松、佐々木功、斎藤助治、安斎善右エ門

調査参加者

木皿与市、今野當美子、小島美和子、小林てる、赤井沢きすい、赤井沢千代子、工藤ゑなよ、板橋やす、寺田ユウ子、斎藤誠司、茂泉 満、三浦秀樹、菅野政彦、神成浩志、藤本智彦、長谷部祐二、遠山克喜、菊地宣之、小林 充、谷津妙子、安喰真由美、石川勝子、高橋りえ、横川麻子、赤井沢進

整理参加者

赤井沢進、神成浩志、斎藤誠司、茂泉満、三浦秀樹、長谷部祐二、菊地宣之、小林 充、赤井沢千代子、谷津妙子、安喰真由美、石川勝子、高橋りえ、横川麻子、佐藤 淳、鈴木勝彦、錦木和子、高橋綾子、田村ゆかり

II 調査計画と実績

昭和58年度の発掘調査は55年度から開始された「都山遺跡範囲確認調査」の5ヶ年計画案にもとづく第4年次にあたる。発掘調査費については国庫補助金額の内示（総経費1000万円、国庫補助金額500万円、県費補助金額250万円）を得たことから、次のような実施計画（案）を立案した。

表1 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定期間
第35次	推定方四町中央北地区	1,500m ² 4月～9月
第36次	推定方二町寺城外南地区	20m ² 6月
第37次	。	20m ² 7月
第38次	推定方二町寺城南東地区	150m ² 8月～9月
第39次	推定方二町寺城南外地区	10m ² 9月
第40次	推定方二町寺城外東地区	500m ² 10月～11月
計	5地区	2,170m ² 4月～11月

第35次調査区は推定方四町の官衙域内中央よりやや北寄りの地区で、外郭南辺から北にほぼ3町の位置にあたり、昭和57年度に実施した第24次調査区の北に隣接した地区である。この地区は当初、地形の状況や外郭の範囲などからみて、官衙の中心施設が想定されていたが、第24次調査の結果、推定方四町と考えられるⅡ期官衙の造構が極めて少なく、これより先行するⅠ期官衙あるいはそれ以前の造構群が数多く発見された。今回の調査ではⅡ期官衙中心施設とⅠ期官衙造構群の広がりを確認する目的で調査を実施し、Ⅱ期官衙の建物跡、一本柱列、井戸跡などの造構やⅠ期官衙の建物跡、材木列、堅穴住居跡など多数の造構を発見した。

第36次調査区は推定方二町寺城の南外側にあたり、推定寺城南北中軸線の延長部に位置する。この地区で、住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。調査面積が狭かったこともあり、造構検出面を確認したが、造構・遺物は発見されなかった。

第37次調査区は推定方四町の官衙域内北西地区にあたり、南辺より北に3町、推定西辺より約半町東に位置し、掘立柱建物跡等の官衙造構の存在が想定された。この地区で、住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。過去に大規模な土取りが行なわれた形跡がみられ、造構・遺物は全く発見されなかった。

第38次調査区は推定方二町寺城内南東地区にあたり、昭和56年度に実施した第15次調査区の南40m程に位置する。寺院に隣接する建物跡等の造構の存在が濃厚に想定される地区である。この地区で倉庫建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。調査の結果、

寺院に直接関連する遺構は検出されなかったが、瓦を施設した竪穴住居跡や、それより先行すると考えられる竪穴住居跡や掘立柱建物跡が発見され、Ⅰ期官衙遺構群がこの地区でも存在していることが確認され、Ⅰ期官衙の広がりを示す貴重な資料を得ることができた。

第39次調査区は推定方二町寺域の南外側にあたり、先に実施した第36次調査区の東に隣接する地区である。この地区で住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。地山上面で溝跡・ピットを発見したが、古代の遺構と断定するに至らなかった。

第40次調査区は推定方四町の官衙域内中央地区にあたり、中心よりやや西寄りに位置している。この地区で住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。遺構検出面が削平のため検出されず、第37次調査区と同様、後世に土取りが行なわれたものとみられ、遺構・遺物は全く発見されなかった。

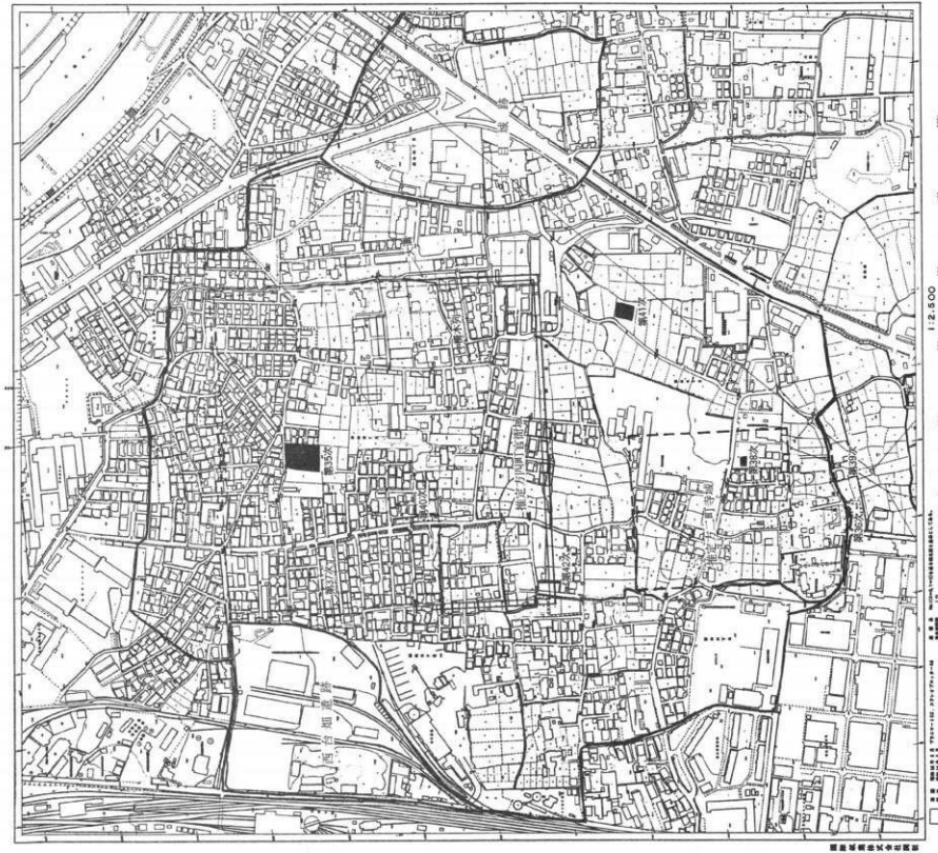
第41次調査区は推定方四町官衙の外南東地区にあたり、57年度に実施した第34次調査区に隣接する。官衙・寺域外の遺構の確認の目的で調査を実施したが、溝跡を1条発見したのみで、この地区では遺構の存在が極めて希薄であることが判明した。

第42次調査区は推定方四町外郭南辺にかかる地区で、南辺材木列、大溝の存在が判明していたが、この地区で盛土據築工事に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施し、推定位置で材木列、大溝を発見、外郭に隣接して官衙域内に掘立柱建物跡等の遺構が確認された。

尚、第35次・41次調査以外は住宅建築等に伴う発掘届が提出されたことから、各々敷地内において遺構確認のための事前調査を実施し、昭和58年度は本件に係るものが6件であった。住宅等の基礎掘削深度は遺構検出面まで及ばぬ様、表土・擾乱土の中で行なう旨、盛土等の指導を行ない、遺構・遺物への破壊を避けた。調査にあたっては本調査と同じ国庫補助事業として実施している「仙台平野の遺跡群発掘調査」の中で対処した。

表2 発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第35次	推定方四町中央北地区	1,400m ²	4月18日～11月7日
第36次	推定方二町寺域外南地区	9m ²	6月27日～6月28日
第37次	推定方四町北西地区	12m ²	7月6日～7月7日
第38次	推定方二町寺域南東地区	150m ²	8月29日～10月14日
第39次	推定方二町寺域外南地区	16m ²	9月5日～9月12日
第40次	推定方四町中央地区	20m ²	10月17日～10月18日
第41次	推定方四町外南東地区	520m ²	11月8日～11月18日
第42次	推定方四町南辺南西地区	37m ²	12月20日～12月23日
合計	8地区	2,164m ²	4月18日～12月23日



卷之三

III 第35次発掘調査

1. 調査経過

第35次調査は、郡山三丁目113, 114-1の約1590m²を対象として実施した。この地区は昨年度調査を実施した第24次調査A区の北に隣接しており、遺構のあり方などは第24次調査区と同様、掘立柱建物跡、材木列、竪穴住居跡などが検出されることが予想された。また調査区が官衙II期の推定方四町官衙域内に位置することから、第24次調査区で稀薄であった官衙II期に属する遺構の有無が注目された。調査区の現状は畠地で、標高が11.3m～11.6mと北へ向って高くなっている。

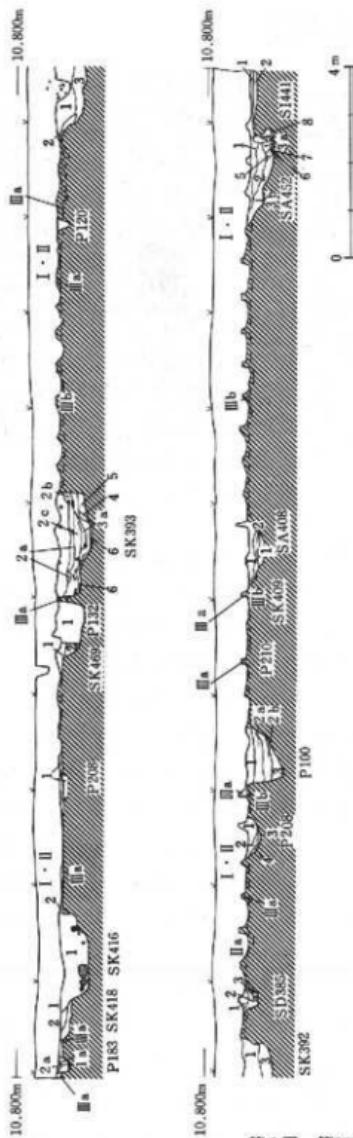


第2図 第35次調査区位置図

発掘調査に先立ち調査区の設定と土層観察のため、4月16日に1×1mの試掘ピットを10ヶ所あけ、調査を行った。その結果、現地表面より50～80cmまで耕作による擾乱を受けていることが判明し、4月18日から重機によって表土、耕作土の排除を行った。その際調査区西半中央において土地境界の確認のため、土地境界杭を動かさず台状に残した。耕土の後遺構検出作業を行ったが、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壙、溝跡などが存在することはわかるものの、耕作時の天地返しによる擾乱が調査区全面に及んでおり、遺構の規模や重複関係は判然としなかった。よって天地返しによる溝状の擾乱を掘り下げた後、再び遺構の検出作業を行ったため、本格的な遺構の調査に入ったのは5月中旬以降であった。調査区内からはN-30°-E前後の基準方向による掘立柱建物跡、材木列、門跡、堀跡、竪穴住居跡、竪穴遺構、土壙などの官衙I期の遺構群と、N-0°-E前後の真北基準方向による掘立柱建物跡、一本柱列、竪穴住居跡、井戸跡、溝跡などの官衙II期の遺構群が検出されている。また遺構数は少ないが、これらの官衙に先行する竪穴住居跡や溝跡、中世以降の井戸跡や溝跡も検出された。調査の成果が一応まとまった8月26日に記者発表を行い、28には現地説明会を開催した。調査が終了し、調査区の埋め戻しを完了したのは11月7日であった。

2. 発見遺構

今回の調査によって発見された遺構は掘立柱建物跡19棟、材木列、一本柱列6列、溝跡6条、井戸跡3基、土壙34基、小柱穴・ピット約210などである。これらは耕作土下層の地山面で発見されたものであるが、本來はこの上層で検出される遺構もあるが、耕作の為、地山上層は殆んど残っていない。遺構は大別すれば重複関係や基準方向の違いにより5つの段階にわけられ、

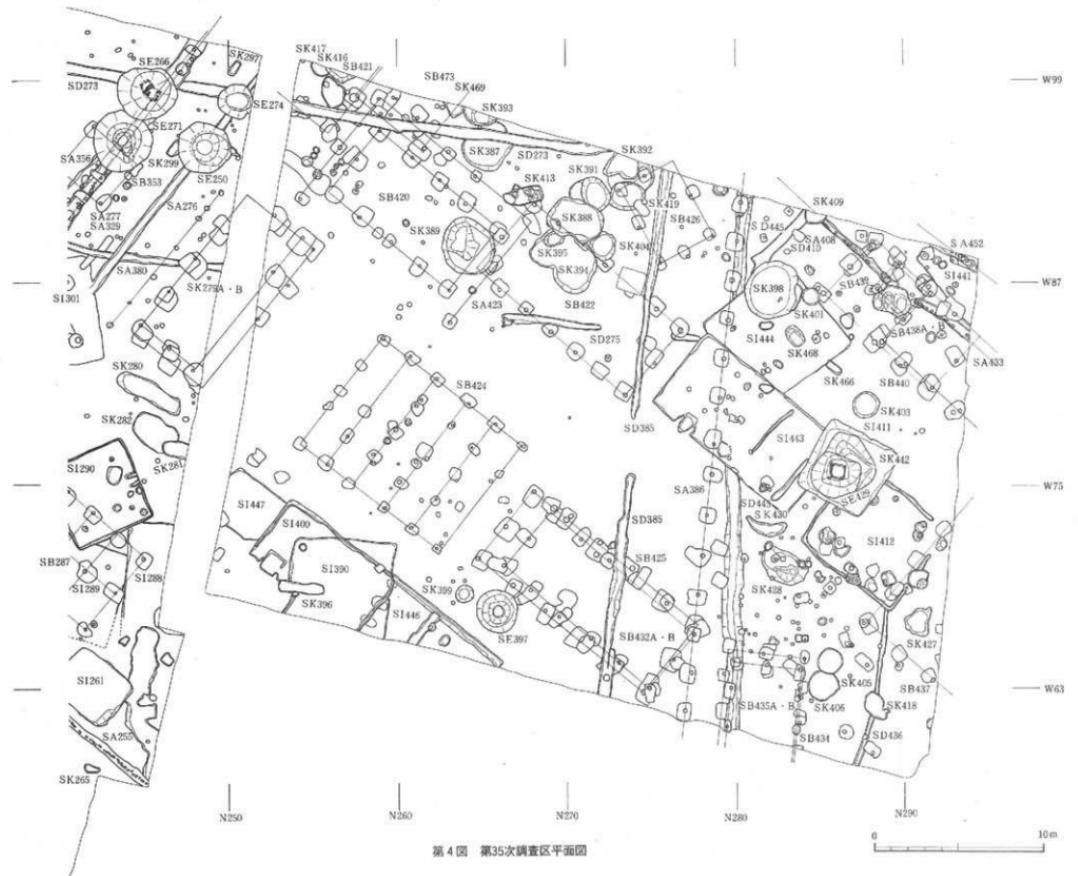


No.	土色	土性	その他の
基盤部			
I, II			耕作土, 大地返し
Ⅲ a	10YR 5/4 墓塚色	シルト	
Ⅲ b	10YR 5/4 墓塚色	粘土質シルト	
P103			
1	10YR 5/4 墓塚色	シルト	
2	10YR 5/4 に赤い黄褐色	シルト	
3	10YR 5/4 に赤い黄褐色	シルト	

No.	土色	土性	その他の
SK417			
1	10YR 5/4 墓塚色	シルト	小礫をやや多く含む
2	10YR 5/4 色	シルト	
SK416			
1	10YR 5/4 墓塚色	シルト	鐵, 腐化物を多く含む
2	10YR 5/4 色	シルト	腐化物をわずかに含む
P208			
1	10YR 5/4 黄褐色	シルト	
SK459			
1	10YR 5/4 色	シルト	
2	10YR 5/4 墓塚色	粘土質シルト	

No.	土色	土性	その他の
P132			
1	10YR 5/4 墓塚色	シルト	
SK393			
1	10YR 5/4 墓塚色	シルト	小礫を含む
2 a	10YR 5/4 墓塚色	シルト	小礫を含む
2 b	10YR 5/4 墓塚色	シルト	小礫を含む
2 c	10YR 5/4 墓塚色	シルト	マンゴン鉱, 腐化物を含む
3 a	10YR 5/4 墓塚色	シルト	
3 b	10YR 5/4 黄褐色	粘土質シルト	
4	10YR 5/4 墓塚色	粘土質シルト	
5	10YR 5/4 墓塚色	砂質シルト	腐化物をわずかに含む
6	10YR 5/4 墓塚色	砂質シルト	

第3図 第35次調査区土層断面図



第4図 第35次調査区平面図

特に第3段階の30°基準遺構が主体を占め、掘立柱建物跡・竪穴住居跡・材木列等の遺構の相互関係が明らかになりつつあるが、推定方四町官街を構成する第4段階の遺構が極めて少ないものの、官街の区画施設が官衙域内でも存在することが確認された。

S A 386 一本柱列 東西方向に延びる一本柱列で、調査区の東・西にさらに続き、方向はE-1°-Nである。柱間は13間以上で、検出分の総長は30.2mである。柱間寸法は221~249cm(平均232cm)。柱穴は一辺90~130cmの不整形方形で、深さ20~70cm、柱穴埋土は暗褐色粘土質シルトで、柱痕跡は直径20~24cmである。柱穴内から土師器・須恵器片の他、フイゴ羽口等が出土している。S D 445・S I 443・444、S B 425・432A・Bを切っている。

S D 385 溝跡 東西方向に延びる溝跡で、調査区の東・西にさらに続き、方向はE-0°である。長さ32m以上、上幅70cm、下幅25~30cmで横断面形は逆台形を呈し、深さは0~25cmで、上部削平のため一部消滅している。堆積土は暗褐色シルトで、土師器・須恵器片が出土地していいる。S A 386柱列とほぼ平行で4.7~5mの間隔をおいている。S B 422・425・426・432A・Bを切っている。

S B 434 建物跡 桁行2間以上(柱間寸法172~208cm)、梁行2間、総長4.65m(柱間寸法230~235cm)の東西棟建物跡で、桁柱列の方向はE-2°-Nである。柱穴は一辺50~90cmの不整形方形で、深さ20cm程度である。柱穴内より土師器杯・甕片・須恵器型・蓋片が出土地している。柱痕跡は直径16~18cmである。S A 386柱列の北側に2.1mの間隔をおいて平行している。S D 445、S B 435 A・Bを切っている。S B 435と同位置でわずかに拡張している。

S B 435 A・B 建物跡 桁行2間以上(柱間寸法155~230cm)、梁行2間、総長4.11m(200~211cm)の東西棟建物跡で、桁柱列の方向はE-2°-Nである。柱穴は一辺50~90cmの不整形方形で、深さ30~40cmである。柱痕跡は直径16~18cmである。S A 386柱列の北側に2.4mの間隔をおいて平行している。同位置・同規模の建て替えがある。柱穴内より須恵器蓋の他土師器甕・杯片・須恵器杯片が出土地している。S D 445を切っており、S B 434に切られている。

S I 444 竪穴住居跡 各辺長は6~6.4mであるが、南北に長くゆがんだひし形を呈している。北西辺の方向はN-43°-Eである。上部削平の為、一部床面が露出している。床面は貼床で周溝は検出されなかった。カマドの詳細は不明であるが、北東辺際に焼上がりがみられる。主柱穴は4つで、直径30~40cmの円形・不整形で、柱痕跡は16~18cm、深さは床面から50cm前後である。堆積土より土師器杯・甕片・須恵器片・小玉石が出土している。S D 445を切っており、S I 443、S A 386、S K 398・401・466・468に切られている。

S K 388 土壙 2.2×1.7m、深さ40cmの不整形方形で底面はやや凸のある土壙と2.3×1.7m~、深さ30cmの不整形円形で底面はほぼ平坦な土壙が重複している。堆積土は暗褐色シルトで地山土・ブロック・円礫を含み、上層から土師器片・須恵器片が出土している。S B 422、S K 391

394・395・404を切っている。

S K 391 土壌 2.45×1.8m～の不整円形で、深さ10～55cm、堆積土はにぶい黄褐色・灰褐色粘土質シルトである。底面よりや・上部に平瓦・丸瓦片が4枚重なって検出された。他に土師器壺・甕片・須恵器蓋・壺・甕片が出土している。S K 392 を切り、S K 388 に切られている。

S K 392 土壌 2.2×1.75m、深さ60cmの不整橢円形の土壌と直径2.8m程の不整円形、深さ50～60cmの土壌が重複している。壁は直立気味に立ちあがり、堆積土は暗褐色・黒褐色シルトで、土師器壺・甕片が出土している。S B 426・S K 391 に切られている。

S K 394 土壌 2.8×4m、深さ35～50cmの不整形で、底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、北側から底面尚に上器片を多量に含む炭化層があり、土師器壺・高壺・甕・須恵器壺・大甕の他破片多数あり、焼土・炭化材とともに投棄された状況を呈す。S B 422・S K 404 を切り、S K 388・395 に切られている。

S K 395 土壌 2×2m程、深さ30cmの不整方形で、底面はや・凹凸があり、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は暗褐色・黒褐色粘土質シルトで、土師器壺・高壺・甕片・須恵器壺・壺・甕・蓋片が多量に出土している。S K 394・S B 422 を切っている。

S K 398 土壌 3×3.5m、深さ55cmの橢円形で、底面は平坦、壁は斜めに立ちあがり、断面形は逆台形である。堆積土は暗褐色粘土質シルトで、土師器壺・高壺・甕・須恵器壺・壺・甕・蓋が出土している。S I 444・S D 445・410・S K 467 を切っている。

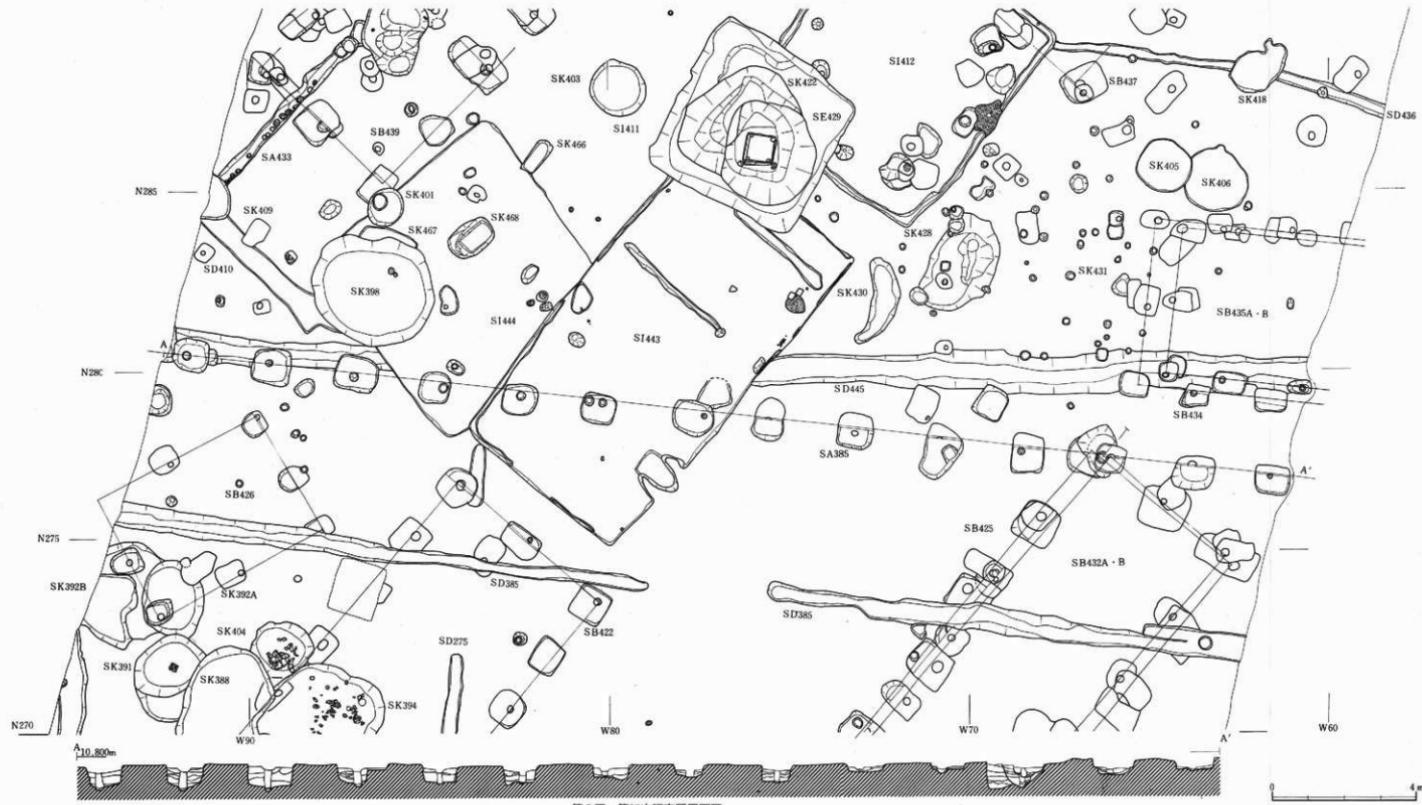
S K 401 土壌 1×1.1m、深さ15cmの円形で、底面は平坦、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は暗褐色シルトで、土師器・須恵器片が若干出土している。S I 444・S B 439 を切っている。

S K 403 土壌 1.45×1.6m の円形で、深さ50cm、底面は中央が凹み、壁はゆるやかに内窪堆積土は暗褐色シルトで、4.5～10cm大の円礫を多量に含み、土師器壺・高壺・甕・須恵器壺・甕・蓋が出土している。

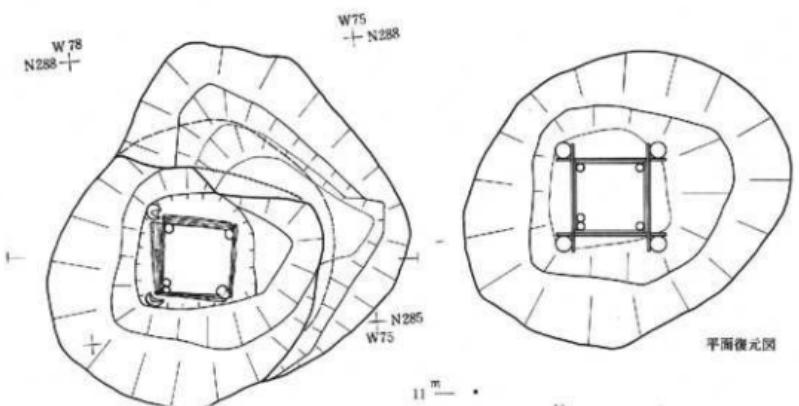
S K 404 土壌 1.5×1.6m～の不整橢円形で、深さ30cm、底面は中央がや・凹み、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は暗褐色・にぶい黄褐色粘土質シルトで、土師器壺・高壺・甕・須恵器甕・盤など多数出土している。S B 422 を切り、S K 388・394 に切られている。

S K 405 土壌 1.5×1.4m の円形で、深さ25cm、底面は中央がや・凹み、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は褐色砂質シルトで、土師器壺・甕片・須恵器壺・甕・蓋片が多数出土している。S K 406 を切っている。

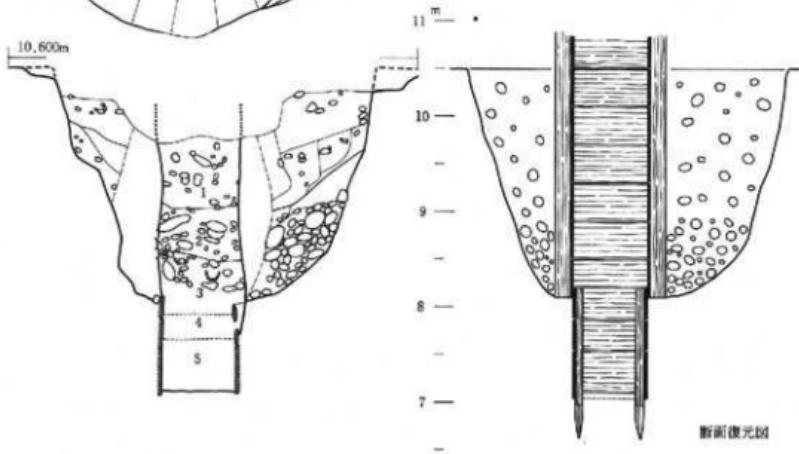
S K 406 土壌 1.85×1.7m の円形で、深さ20cm、底面は平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は褐色・にぶい黄褐色シルトで、土師器壺・甕片が出土している。S K 405 に切ら



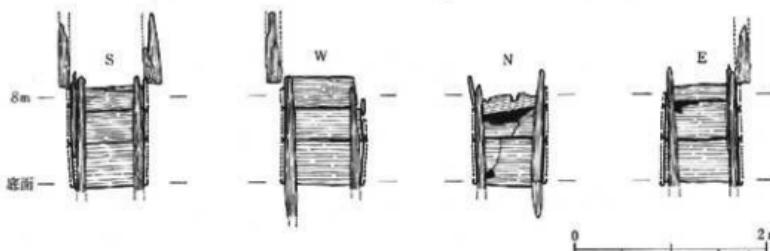
第5図 第35次調査区平面図



平面復元図



断面復元図



0 2 m

編号	土 名	土 性	特 徴	地 理
1	SDY R H26 色	シート	洞隙水を多量・活性物・センサリ性をわずかに含む土壤剖面が見られる	
2	SDY R H26+H 黄褐色	粘土質シート	洞隙水を多量・活性物を含む	
3	SDY R H26 黄褐色	粘土質シート	洞隙水を多量・活性物を少々含む・炭化物を含む・上部は木多く含む	
4	SDY V オーバー層	砂質粘土	2・5 SDY V 明顯黄褐色の粘土層が底部にあり・ついで白泥層・半分が多孔質層	
5	SDY V 深層オーバー	砂	SDY V 深層オーバー	

第6図 第35次調査区 S E 429井戸跡実測図・復元図

れている。

S K 409 土壌 1.3 × 0.6 m ~、深さ25cmで、東側のみ検出し、全形は不明である。堆積土は暗褐色・灰黃褐色シルトである。S A 408、S D 410を切っている。

S D 410 溝跡 長さ 5 m、上幅60cm、深さ 5 cm前後で底面は凹凸が激しい。方向はE-38°-Sで、堆積土は黄褐色シルトである。S K 398・408に切られている。

S K 418 土壌 1.2 × 1.8 m の不整形で、深さ10~15cm、底面はや・凹凸あり、堆積土は暗褐色シルトである。S D 436を切ってある。

S B 426 建物跡 柱行 2 間 (柱間寸法 256 ~ 274 cm)、縦長 524 cm、梁行 2 間 (約 150 ~ 189 cm)、総長 345 cm の東西棟建物跡で、柱柱列の方向はN-54°-Eである。柱穴は一边60~90cmの隅丸方形で、深さ 15~65cm、柱穴埋土は褐色・黒褐色シルトと黄褐色粘土質シルトが互層をなす。柱痕跡は直径 14~20cm である。柱穴内より土師器・須恵器壺片多数出土している。S K 392 を切り、S D 385 に切られている。

S K 428 土壌 2.8 × 1.8 m の不整形円形で、深さ20~30cm、底面は凹凸あり。堆積土は黄褐色・暗褐色シルトで、土師器壺・壺片が若干出土している。P 60~62・65・69に切られている。

S K 430 土壌 長さ 2.4 m、幅70cmで弧をえがく。西側は削平攪乱で全形は不明である。深さは15cm程度で、堆積土は暗褐色・黄褐色シルトの混合土である。

S K 431 土壌 0.6 × 0.4 m ~ の不整形で、深さ20cmで、堆積土は暗褐色・黄褐色シルトである。S B 434 に切られている。

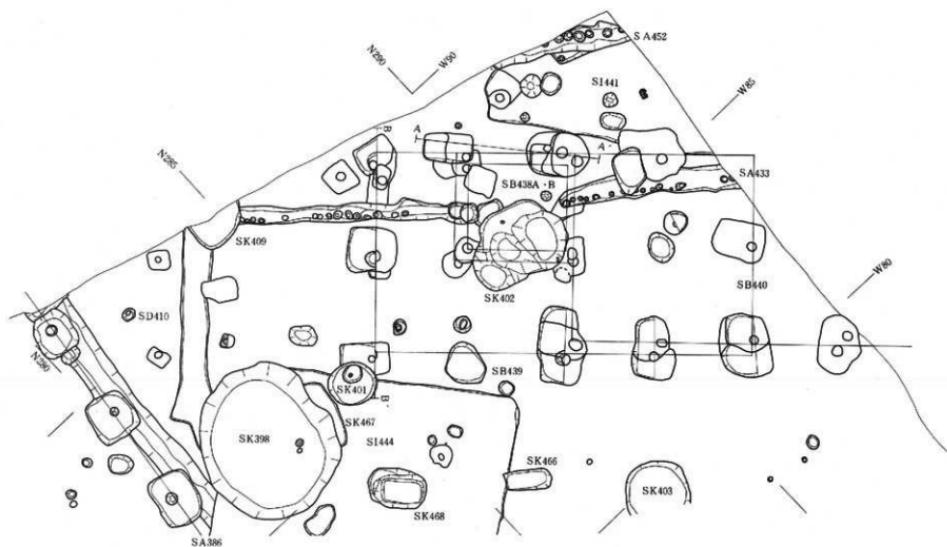
S D 436 溝跡 長さ 9.3 m 以上、上幅20~35cm、深さ 5 ~ 20cmで東西方向に延びている。横断面形は逆台形である。西側で S I 412 に切られている。

S D 445 溝跡 長さ 32m 以上、上幅80~100 cm、深さ 25~40cm、横断面形は逆台形で、底面は中央がや・凹んでいる。方向はE-5°-Nである。堆積土は暗褐色シルト・灰黃褐色粘土である。S A 386、S B 434・435 A・B、S I 413・444、S K 398 の全ての遺構に切られている。

S K 466 溝跡 1 × 0.45m の長方形で、深さ40cm、底面は平坦で、壁は直立する。堆積土は暗褐色・黒褐色粘土質シルトである。S I 444 を切っている。

S K 468 土壌 上端 1.3 × 0.9 m、底面 0.85 × 0.45m の長方形、深さ 90cm、壁は直立し、底面は平坦である。堆積土は上層に黒褐色粘土質シルト、中位に焼土・炭化物の多量に入ったにぶい赤褐色シルト、下層に黒褐色・にぶい黄褐色粘土が互層をなす。2 層から土師器壺、4 層から土師器壺・壺、須恵器鉢の他、土師器壺片・須恵器壺片が出土している。S I 444 を切っている。

S K 419 土壠 1.1 × 0.6 m の不整形長方形、深さ15cmで、堆積土は暗褐色シルト・黄褐色シ



第7図 第35次調査区平面図



ルト質粘土である。SK 392 を切っており、P 103 に切られている。

S I 411 住居跡 東西 4.5 m、南北 4.5 m のや・互んだ隅丸方形を呈し、壁高は 45~90 cm でや・斜めに落ち込んでいるが、直立気味の部分もある。ほぼ中央を大きく SK 442、S E 429 に切られて詳細は不明であるが、底面は平坦でなく、凹凸があり、中央になるにしたがって深くなる。堆積土は上層にはよい黄褐色粘土質シルトで、下層は灰白色、によい黄橙色シルト質粘土である。S I 412・443 を切っており、SK 442、S E 429 に切られている。

S E 429 井戸跡 掘り方は長軸 3.6 m、短軸 2.8 m の不整橿円形を呈するが、造構検出面では SK 442 との重複関係から上端を明確にすることはできなかった。深さは上段枠組下部までの 2.5 m で、深い播鉢状を呈している。井戸最深部までは 3.5 m ある。井戸持方向は E-0° で真北基準線である。掘り方下部には厚さ 1 m 程で、直径 5~20 cm の河原石を裏ごめとして入れ込んでおり、中層にはよい黄褐色粘土質シルト、上層は暗褐色粘土質シルトで、直径 5~10 cm の河原石が多く入っている。

井戸の構造は上部劣化の枠材は腐朽しており、詳細は不明であるが、壁面に付着する様に残存している本質の痕跡や木材の遺存良好は下段の状況から、四隅に丸材を立てた横板組で、上段枠組と下段枠組にわけられる。下段枠組は播鉢状掘り方の底面からさらにはほぼ枠組の大きさの方形掘り方を掘って、3 段の横板を組んで、四隅の内側に直径 10~14 cm の丸太杭を打ち込んでおさえている。板材の幅は 20~50 cm で、下 1 段目は四面とも 40~50 cm と幅広の材を使用し、3 段の高さが、最も良好な西側で 113 cm、板組内法は一辺 69~73 cm のほぼ正方形である。上段枠組は始んど腐朽して遺存していないが、南東と南西の隅木が 2 本、高さ 70~80 cm まで残っている。四隅木は下端が平坦で打ち込み杭ではなく、板組の外側に据えられていることが考えられる。検出面までの高さは 240 cm、内法は約 74 cm とみられる。

井戸枠内の堆積土は小層にわけられるが、3 層までは堆積土中に河原石が多量に入っている。3・4・5 層には土師器窯が特に集中して出土し、土師器窯は総計 100 個程ある他、須恵器長頸壺 2 個、鉢 2 個が出土している。6 層は小石まじりの砂層で底面に 4~5 cm の厚さで堆積しており、人為堆積とも考えられる。

S I 411・SK 442 を切っていることから、S I 412・443 よりも新しい井戸跡と考えられる。

S K 442 土壙 西辺 2.5 m、北辺 2.2 m 程の不整形で、深さ 2.1~2.3 m、壁は直立気味に立ちあがり、底面は中央部が凹んでいる。堆積土の下層は 1 m 以上にわたって多量の河原石が入っており、須恵器蓋の他、土師器窯・窯片、須恵器壺・甕・瓶片が出土している。東側半分以上が S E 429 に切られていることから詳細は不明であるが、井戸跡とも考えられる。S I 411・412・443 を切っており、S E 429 に切られている。

S A 408 材木列 長さ 6m 以上、上幅 30~40cm、深さ 25cm 程の布掘りに、直径 10~18cm の材木痕跡が一列にみられる。北端は S B 438 A・B 門跡と接続しており、南はさらに続く。方向は N-32°-E である。布掘り横断面形は U 字形を呈するが、底面は凹凸がみられる。埋土は褐色シルト・黄褐色粘土質シルトである。材木痕跡は密接している部分もあるが、50~60cm の区間をおいて検出されない部分もある。根跡が布掘り検出面で観察されないことから、抜き取られたことが考えられる。S B 438 A・B 門跡の北側には S A 408 の延長上に同様の S A 433 がさらに続く。S K 409 に切られている。

S A 433 材木列 長さ 4m 以上、上幅 40~55cm の布掘りで、方向はやや屈曲しているが N-32°-E で、詳細は S A 408 と同様である。南端は S B 438 A・B 門跡と接続し、北はさらに続く。S B 440 に切られている。

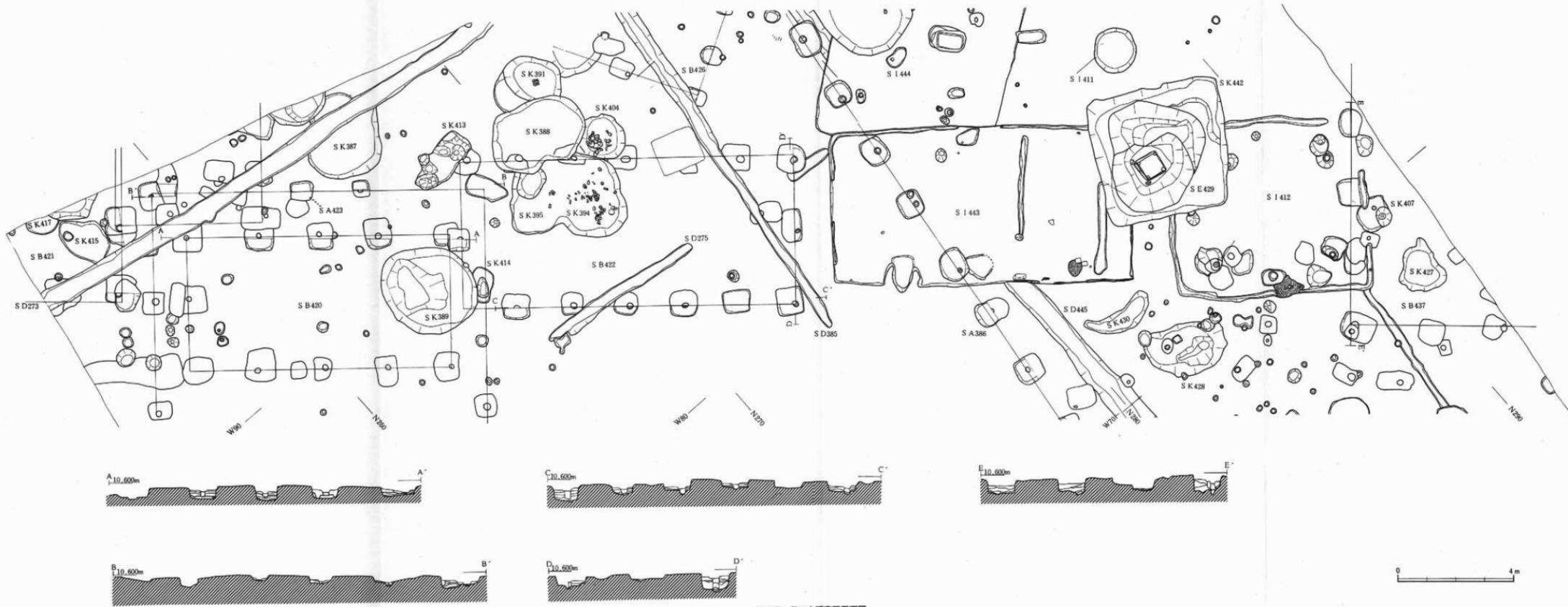
S A 452 材木列 調査区北西隅で一部検出したのみで詳細は不明であるが、長さ 3.2m 以上 上幅 50cm 程、深さ 50cm 程の布掘りで、方向は N-30°-E 前後である。布掘り断面形は U 字形を呈するが、底面には凹凸がある。埋土は暗褐色シルト・黄褐色粘土質シルトが瓦層を成す。材木痕跡は直径 15~23cm で、ほぼ密接している。S I 441 を切っている。

S B 438 A・B 門跡 桁行 1 間 (柱間寸法 260cm)、梁行 2 間 (約 120cm) で方向は N-32°-E の四脚門である。棟通り北側に S A 433、南側に S A 408 が接続する。柱穴は一辺 60cm、ないしは直径 50~60cm の不整形形、不整円形を呈す。柱痕跡は 20cm 程である。建て替え後、やや規模が縮少し、桁行柱間寸法が 240cm、梁行柱間寸法が 80~110cm となる。S B 439・440 S K 402 に切られている。

S B 439 建物跡 桁行 4 間 (柱間寸法 196~245cm)、総長 8.6m、梁行 2 間 (約 205~220cm)、総長 4.25m の南北棟建物跡で、桁柱列方向は N-34°-E である。桁行がさらに北に伸び 5 間以上になることも考えられる。柱穴は一辺 70~100cm の不整形形、深さ 40~60cm で、柱穴内より土師器環・甕片が若干出土している。柱痕跡は直径 30cm 前後である。S I 441、S A 433 を切っており、S B 438 A・B より新しく、S B 440 に切られている。

S B 440 建物跡 桁行 3 間以上 (柱間寸法 190~210cm)、梁行 2 間 (約 204~206cm)、総長 4.1m の南北棟建物跡で桁柱列方向は N-34°-E である。桁行が 2 間で、2 間 × 2 間の方形建物跡となることも考えられる。S B 439 より南寄りが北へ 2 間分ずれ、同方向で柱位置は同位置である。柱穴は一辺 60~110cm の不整形形ないし不整円形で、深さ 30~40cm、柱穴内より土師器・須恵器片が若干出土している。柱痕跡は直径 20~25cm である。S I 441、S A 433 S B 439 を切っており、S B 438 A・B より新しい。

S I 441 穫穴住居跡 調査区の北東隅で住居跡の一剖面を検出したのみで詳細は不明である。東辺長 5.2m 以上、南辺長 1.2m 以上で東辺方向は N-43°-E である。上部削平が著しく、



第8図 第35次調査区平面図

堆積土は2~5cmしか残存していない。床面は貼床であり、カマドは不明、周溝は検出されない。柱穴は1つ検出され、直径50cm、深さ25cm、柱痕跡は直径18cm程度である。床面上から土師器甕、須恵器蓋が出土している。SA 452、SB 439・440に切られている。

S K 402 土壌 長軸2.3m、短軸1.6mの不整形を呈する。2~3の土壤が重複した様相を呈するが、堆積土のちがいが認められず、重複状況は不明である。底面には4つの段差があり、深さ10~40cmである。堆積土は褐色・暗褐色・灰褐色シルトで、堆積土中より土師器甕・高杯・甕片が出土している。SB 438 A・B、SA 433を切っている。

S B 421 建物跡 東西1間以上(柱間寸法211cm)、南北1間以上(約227cm)で南北柱列方向はN-32°-Eである。柱穴は一辺90~110cmの不整形で、深さ60~80cmである。柱痕跡は直径23~26cmで、北1束1柱穴では柱抜き取り穴が認められる。SD 273に切られている。

S B 473 建物跡 東西2間以上(柱間寸法111~180cm)、南北2間以上(約140~190cm)で南北柱列方向はN-32°-Eである。柱穴は一辺80~140cmの不整形で、深さ30cm程度である。柱痕跡は直径20~22cmである。SB 420、SK 393、SD 273に切られている。

S B 420 建物跡 術行4間(柱間寸法204~248cm)、総長9m、梁行2間(約207~246cm)、総長4.5mの南北棟建物跡で、桁柱列の方向はN-32°-Eである。柱穴は一辺60~110cmの不整形で、深さ32~50cm、柱穴は一辺60~110cmの不整形で、深さ32~50cm、柱穴埋土は黒褐色シルトと黄褐色粘土質シルトが互層をなす。柱痕跡は直径16~22cmである。SA 423が北・南・西の三面を廻る。SB 473を切っており、SB 422、SK 389、SD 273を切っている。

S A 423 柱列跡 南北5間(柱間寸法190~270cm)、総長11.4m、東西4間(約175~246cm)、総長7.5~7.7mで、東側が開くコの字形に廻る柱列跡で、SB 420を囲んでいる。南北柱列方向はN-32°-Eである。柱穴は60~140cm×35~80cmの不整橢円形ないしは一辺60~80cmの不整形を呈し、深さ20~40cmである。柱痕跡は直径16~22cmである。SD 273、SB 473、SK 389に切られている。

S B 422 建物跡 術行6間(柱間寸法179~210cm)、総長9.7m、梁行2間(約245~274cm)、総長5mの南北棟建物跡で、桁柱列の方向はN-33°-Eである。柱穴は一辺75~105cmのほぼ方形で、深さ27~57cm、柱穴埋土は暗褐色・褐色シルトが互層をなす。柱痕跡は直径19~28cmである。柱穴内より土師器甕片・須恵器甕片が若干出土している。SB 420を切っており、SD 275・385、SK 388・394・404・413に切られている。

S I 443 積穴住居跡 東西長5.6m、南北長10.5mの長方形で、長辺方向はN-33°-Eである。壁は5~15cm残存しており、直立気味に立ちあがる。周溝は南壁の一部を除いてほぼ全周するが、幅3~10cm、深さ15cm程度で、非常に幅が狭い。床面は貼床で、東壁側にカマドが施設

されている。カマドは造り替えが認められ、旧カマドは東壁北寄りにあり、焼土・炭化物が50cm四方程の範囲にみられ、カマド構築材とみられる凝灰岩切石もみられる。新カマドは東壁南寄りにあり、幅75cm、奥行100cmで両軸が良好に遺存しているが、煙道は上部削半のため不明である。主柱穴は検出されなかった。堆積土は暗褐色・黄褐色・黒褐色シルトで、土師器壺の他、甕片・須恵器甕・瓶片が若干出土している。S I 444、S D 445を切っており、S I 411、S K 442、S E 429、S A 386に切られている。

S I 412 穫穴住居跡 東西長6.3m、南北長7mのほぼ方形で、南北中軸方向はN-33°-Eである。全体の西側2分程が削平のため、掘り方まで消滅し、周溝のみわずかに遺存している。東壁際には貼床がみられ、東壁ほぼ中央にカマドが施設されているが、焼面がみられる程度である。周溝は幅15~28cm、深さ2~14cmで全周する。主柱穴は7つ検出され、各々2つずつの重複がみられるが、南西部はS I 411に切られている為、1つは不明である。ほぼ同位置で柱の建て替えが行なわれている。柱間寸法は340~420cmとやや不揃いである。カマド・柱穴・周溝等から土師器壺、須恵器壺・蓋の他、土師器・須恵器片が出土している。S B 437、S D 436を切っており、S I 411に切られている。

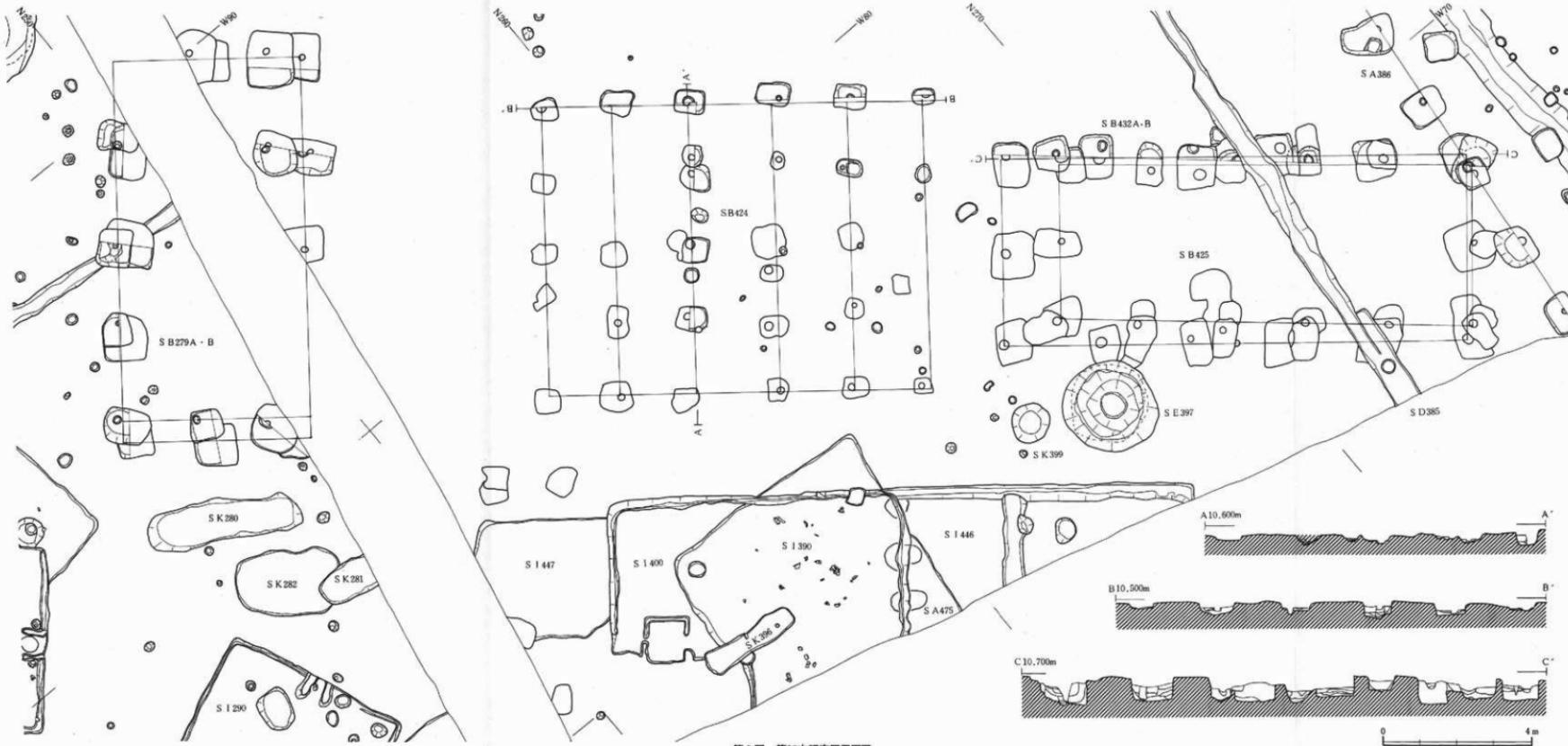
S B 437 建物跡 南北2間以上(柱間寸法216~274cm)、東西3間以上(±220~245cm)南北柱列方向はN-32°-Eである。柱穴は一辺80~100cmの不整方式で、深さは40~60cm、柱穴埋土は黄褐色粘土質シルト、褐色シルトが互層をなす。柱痕跡が不明な柱穴もあるが、南1東1柱穴では直径28cmである。S I 412、S K 407に切られている。

S D 273 溝跡 長さ19.6m以上(第24次調査での検出分を含めると44.2m以上)、上幅55~75cm、深さ15cm程で、横断面形は扁平U字形を呈す。方向はN-3°-Eである。堆積土は黒褐色粘土質シルトで、土師器壺・甕片・須恵器壺片が若干出土している。S B 420・421・473、S A 423、S K 387を切っている。

S D 275 溝跡 長さ12m以上(削平の為、消滅部分もあるが、第24次調査での検出分を含めると41.4m以上)、上幅40cm前後、深さ0~8cmで、横断面形はU字形を呈す。方向はN-0°-Sである。S B 422を切っている。

S K 387 土壙 3×2.5m程の不整梢円形、深さ9~19cm、底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は褐色・にぶい黄褐色・黒褐色シルトで、土師器壺・高壺・甕片・須恵器壺・蓋・甕・壺・平瓶片が出土している。S D 273、S K 393に切られている。

S K 389 土壙 直径3.2m程の不整円形で、深さ75~85cm、底面はゆるく凹んでおり、壁はゆるく立ちあがり、上部ではほぼ直立する。堆積土は上層が暗褐色・黒褐色シルト、中層はにぶい黄褐色シルト、黒褐色シルトで炭化物を多量に含み、下層はにぶい黄褐色・黒褐色・黄褐色シルトで、土師器壺・甕・壺・須恵器壺・平瓶の他、土師器・須恵器・平瓦片が出土してい



第9図 第35次調査区平面図

る。S B 420、S K 414 を切っている。

S K 393 土壙 南北 2.1 m、東西 0.8 m 以上の円形とみられ、深さ 50~80 cm で、底面はゆるく凹み、壁は直立気味に立ちあがる。堆積土は黒褐色・黄褐色・暗褐色のシルト・粘土質シルトで、土師器壺・甕片・須恵器壺・壺片が出土している。S K 387 を切っている。

S K 407 土壙 一辺 60 cm 程の不整方形で、深さ 20~30 cm、底面は凹凸がある。壁は直立気味に立ちあがる。堆積土は暗褐色シルト、明黄褐色粘土質シルトで、土師器壺の他、土師器甕片・須恵器甕・蓋片が出土している。S I 412、S B 437 を切っている。

S K 413 土壙 東西 0.9 m、南北 2.4 m の不整長方形で、深さ 3~30 cm、底面は凹凸があり壁は直立気味に立ちあがる。堆積土は暗褐色・にほい黄褐色シルトで礫を含み、土師器壺・甕高環片・須恵器甕・蓋片が出土している。S B 422、S A 423 を切っている。

S K 415 土壙 長径 2 m、短径 1.4 m の不整梢円形で、深さ 15 cm、底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は暗褐色・黒褐色・褐色シルトで炭化物・焼土を含み、土師器須恵器細片が若干出土している。S D 273 に切られている。

S K 416 土壙 南北 1.4 m、東西 0.9 m 以上で全形は不明で、深さ 60 cm、底面は平坦、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土はにほい黄褐色シルトで礫・炭化物を含む。S K 417 を切っている。

S K 417 土壙 南北 径 1.2 m 程で、全形は不明、深さ 26 cm 程で、底面は凹凸があり、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は暗褐色・褐色シルトで、土師器壺・甕片・小玉石が出土している。S K 416 に切られている。

S K 427 土壙 東西 1.9 m、南北 1.6 m の不整円形で、深さ 20 cm、底面は凹凸あり、壁はゆるやかに立ちあがる。堆積土は黄褐色・褐色粘土質シルトである。

S B 279 A・B 建物跡 第24次調査で建物の南側を検出しておらず、今回検出した分と合わせ、全容が明らかになった。桁行 4 間（柱間寸法 244~270 cm）、総長 10.8 m、梁行 2 間（約 210 cm）、総長 4.2 m の東西棟建物跡で、桁柱列方向は E-32°-S である。柱穴は一辺 80~155 cm の不整方形で、深さ 54~80 cm、堆積土は暗褐色・褐色・黄褐色粘土質シルト・シルト質粘土である。同位置で建て替えが行なわれており、A 建物（古）は B 建物（新）より、北側・東側で規模を広げており、桁行総数 11.3（柱間寸法平均 280 cm）、梁行総長 5.8 m（平均 290 cm）となる。

S B 424 建物跡 桁行 5 間（柱間寸法 189~237 cm）、総長 10.5 m、梁行 4 間（約 120~220 cm）、総長 8 m の南北棟建物跡で、桁柱列の方向は N-32°-E である。総柱風の建物であるが内部の柱穴は梁列では揃っているものの、桁列で不揃いであることなどから、床東柱とも考えられる。柱穴は一辺 35~70 cm の方形ないしは不整方形、深さ 15~45 cm で、堆積土は褐色・暗褐色・黒褐色・黄褐色の粘土質シルト・シルト・シルト質粘土・砂質シルトで、土師器壺細片が

少量出土している。柱痕跡は直径16~24cmである。柱位置が不明な部分が4ヶ所ある。殆ど柱は単期であるが、建物内部の南3列は一部柱穴に重複がみられ、柱の取り替えが行なわれた形跡がみられる。

S B 425 建物跡 柱行5間（柱間寸法237~273cm）、総長12.9m、梁行2間（約216~270cm）、総長5.1mの南北棟建物跡で、桁柱列の方向はN-32°-Eである。柱穴は一辺95~150cmの不整方形ないしは方形で、深さ60~76cm、堆積土は上層が褐色・暗褐色・黒褐色シルトで下層は黄褐色の粘土質シルトで、土師器壺片が数点出土している。柱痕跡は直径24~36cmである。この建物跡を切るS B 432 A・Bは柱間数は同一であるが、柱間寸法が桁・梁とも約1尺短く、西桁列と北梁列は同列に揃えているが、東側と南側で規模が小さくなっている。S B 432 A・B、S A 386、S D 385、S E 347に切られている。

S B 432 A・B 建物跡 柱行5間（柱間寸法210~240cm）、総長11.3m、梁行2間（約213~232cm）、総長4.4mの南北棟建物跡で、桁柱列の方向はN-33°-Eである。同規模・同位置での建て替えがみられる。柱穴は一辺60~140cmの方形ないしは不整方形・長方形・深さ50~70cmで、堆積土は上層が暗褐色・褐色シルト、下層が黄褐色粘土質シルトで、柱穴内より土師器壺・壺片が出土している。S B 425と西桁・北梁は揃っているが、桁総長で約1.5m、梁総長で約0.7m短い。S B 425を切っており、S A 386、S D 385に切られている。

S I 390 整穴住居跡 東辺部は調査区外で全容は不明であるが、南北長6.1m、東西長5.7m以上の方形で、西辺方向はN-2°-Wである。上部削平の為、壁は遺存していない。カマド周溝は検出されなかった。床上面には多量に炭化物・焼土がみられるが、貼床は明瞭ではなく、上柱穴も検出されなかった。堆積土は部分的にみられるのみで、におい黄褐色・暗褐色・褐色の粘土質シルトで、床直上面は厚い炭化物堆積層がみられ、これらの堆積上層中より多量の土師器・須恵器片が出土している。土師器は壺・壺・須恵器は壺・壺・蓋が多い。S A 475、S I 438、440を切っており、S K 396に切られている。

S I 400 整穴住居跡 東側が調査区外で全容が不明であるが、南北長8.2m、東西長5.8m以上のL字形を呈し、西辺の方向はN-30°-Eである。壁は直立気味に立ちあがり、深さ20~28cm、床面は貼床である。周溝は上幅12~28cm、下幅10~12cm、深さ13~20cmで、カマド部分を除いて全周する。カマドは東壁の南東隅寄りに施設されており、幅1m、奥行1mで、煙道は不明である。焚口の周りには幅8~10cm、深さ5~8cmの横断面形がL形の溝がコの字形に廻っている。主柱穴は不明である。堆積土は褐色・暗褐色・黒褐色の粘土質シルト・シルトで、堆積土中より土師器壺・高壺・壺片・須恵器片が出土している。S I 446・447・475を切りS I 390、S K 396に切られている。

S I 446 整穴住居跡 南側でS I 390・400と重複し、東半部は調査区外の為、全容は不明

である。南北長7.6m以上、東西長4m以上の方形と考えられる。削平の為、床も遺存しておらず、掘り方のみ検出した。西辺方向はN-30°-Eである。掘り方は深さ6~15cmでほぼ平坦であるが、壁際に上幅20~40cm、深さ25cm前後の溝がある。柱穴は検出されなかった。掘り方埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、土師器壺、甕片、須恵器片、小玉石が出土している。S A 475 を切っており、S I 390・400 に切られている。

S I 447 整穴住居跡 北側でS I 440と重複し、南側は調査区外の為、全容は不明である。東西長3.2m以上、南北長3.6m以上の不整方形とみられる。削平の為、床も遺存しておらず、掘り方のみ検出した。西辺方向はN-30°-Eである。掘り方は深さ8~17cmで、底面は凹凸が著しい。カマドは東壁中央よりや、南寄りの位置に焼上・炭化物が多量にみられるが、袖・煙道等は不明である。S I 400 に切られている。

S A 475 一本柱列 3間以上（柱痕跡が不明であるが、平均130cm程とみられる）で、さらに東に延びるものとみられる。柱列方向はE-30°-S前後である。柱穴は60~100cm×50~75cm程の不整円形である。S I 390・400・446 に切られている。

S E 397 井戸跡 直径2.4~2.5mの円形素掘りの井戸跡で、深さ3.5mである。除々にすばまり、検出面より2.1m程の深さで直径50cmの円形になる。底面は直径25cmの円形を呈し、平坦である。堆積土は上層が褐色・暗褐色・黒褐色・黄褐色の粘土質シルト、シルト質粘土、中層が黄褐色・にぶい黄褐色、灰黄褐色等の粘土質シルト・シルト質粘土・砂質シルト、下層は黒褐色・にぶい黄褐色の粘土質シルト・砂質シルトに綠灰色粘土、酸化鉄を多く含む。土師器壺・甕・高壺片、須恵器壺・蓋片が数点の他、陶器片、磁器片が出土している。S B 425 を切っている。

S E 399 井戸跡 直径1mの円形素掘りの井戸跡で、深さ1.45mである。壁は直立気味に立ちあがり、底面は直径60cmの円形を呈し、ほぼ平坦である。堆積土はにぶい黄褐色・灰黄褐色・褐灰色の粘土質シルト、下層は黒色・暗褐色の粘土質シルト、シルト質粘土である。土師器・須恵器片が数点出土している。

S K 396 土壙 2.7×0.6m程の不整長方形で南北に長い。深さ10cm程で、壁はゆるやかに立ちあがり、底面はほぼ平坦である。堆積土はにぶい黄褐色シルトで、土師器壺・甕片・平瓦片が出土している。S I 390・400 を切っている。

3. 出土遺物

第35次調査による出土遺物は、土師器、須恵器、瓦、石製品、木製品、金屬製品、自然遺物などである。S E 429 井戸跡、S I 390、412 住居跡、S K 389、394、395 土壙などからは、多くの遺物を出土した。以下、遺構ごとに出土遺物を略述する。

S E 397 井戸跡 J - 3 磁器片、中世陶器 1 - 9 鞘片、土師器・須恵器片が出土している。

S E 399 井戸跡 土師器杯、須恵器鏡片を少量出土している。

S E 429 井戸跡 井戸枠内と掘り方堆土中から遺物を出土している。とりわけ井戸枠内からは多量の土師器鏡と土師器高环、須恵器長頸壺・鉢、種子などが出土している。(第10図～第13図)。

井戸枠内第3層出土遺物

C - 316、320、327、328、334、342、349、354、355、390 (土師器鏡)

E - 178、182 (須恵器鉢)

井戸枠内第4層出土遺物

1 C - 318、321、323、331、337、340、341、366、393 (土師器鏡)

2 C - 322、370、375、383、385、387、(363) (土師器鏡)

井戸枠内第5層出土遺物

3 { C - 317、338、339、343、372、376、377、389、393 (土師器鏡)
E - 180 (須恵器長頸壺)

4 C - 319、325、361、388、392 (320) (土師器鏡)

5 { C - 325、330、353、369、381、382、394、395 (土師器鏡)
E - 181 (須恵器長頸壺)

6 C - 326、352、357、362、378、384 (333) (土師器鏡)

7 C - 380、(365)、(369) (土師器鏡)

8 C - (334)、(371) (土師器鏡) E - (182) (須恵器鉢)

9 C - 336、346、351、356、364、(371)、(389) (土師器鏡)

10 C - 336、373、391 (土師器鏡)

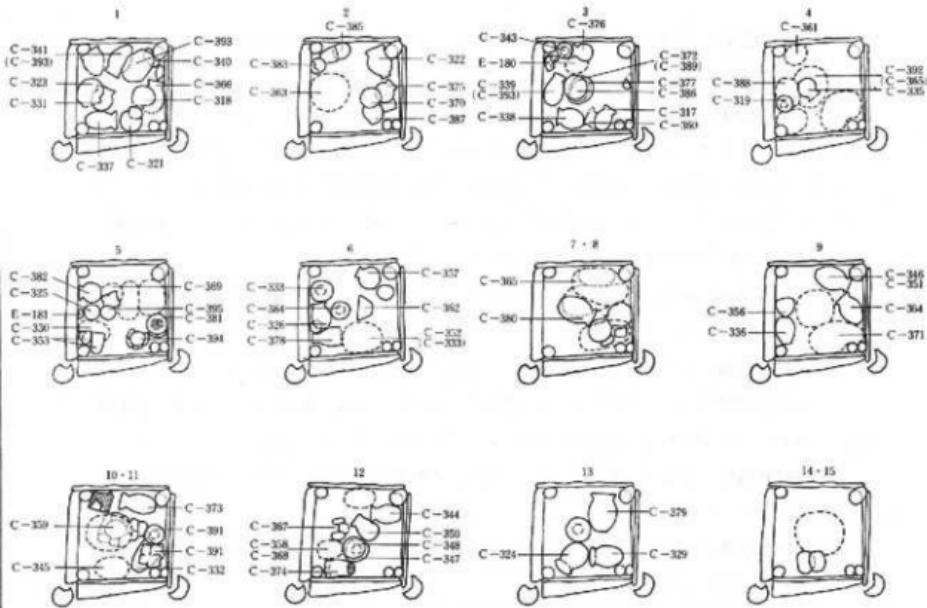
11 C - 332、345、359 (土師器鏡)

12 C - 344、347、348、350、367、368、374 (土師器鏡)

13 C - 324、329、379 (土師器鏡)

* 1 ~ 13 は上層からの堆積順位

以上であるが出土した土師器鏡は、復元困難なものを含めると合計で 100 個体程になる。これらの鏡は、長胴、球形、やや胴張りになるものや下膨みになるものなど多様である。また底部形態にも、平底で木葉痕あるいはハラケズリの施されるものの他に、平底でリング状を呈し中央のへこむものの (C - 319、341、358、361、362、365) や丸底のもの (C - 325、336、343)



第10図 S E 429 井戸跡遺物出土状況略図

などがある。掘り方中からは、土師器壺、甕片、須恵器壺、蓋、甕片が出土している。

S I 390 住居跡 検出面、床面などから多量の遺物を出土している。検出面上からは、土師器C-431・443(第15図2)・448・468壺と須恵器E-201・204蓋(第19図10・18)、E-212壺(第21図5)が出土し、床面上からは土師器C-442・438壺(第15図5)、C-440蓋(第18図1)、須恵器E-187・200・202・203・205・206・207・208・218蓋(第19図6・16・11・12・14・15・20・13・17)、E-210壺(第20図11)、E-211蓋(第21図1)などが出土している。このうちE-187蓋はカエリの部分が外に張り出し、口縁端部が上方にめくり上っているものである。E-212壺には、2対以上の把手が付いていたと考えられる。土師器の壺では、C-431・443は内外面黒色処理されている。C-438・448壺は黒色処理された内面が再酸化を受けている。またC-468壺は、内面が黒色処理されずナデが施されるものである。この他に堆積土掘り方、中からは内面の黒色処理されたC-304壺、441壺、E-191・192蓋、さらに内面に黒色処理が施されず、暗文の観察されるC-289壺(小破片)、N-7刀子などが出土している。

S I 400 住居跡 堆積土、床面上から土師器坏、高坏、甕片、須恵器坏片を出土している。床面上から出土した土師器坏片の中で再酸化を受けたものがある。

S I 412 住居跡 検出面とカマド、周溝、ピット1などから土師器C-285・286坏(第15図6)、C-287高坏(第15図9)、C-288甕(第18図2)、須恵器E-217・219蓋(第19図2・1)、E-179坏(第20図3)が出土している。C-285坏は内面が黒色処理されず、ナデ、ヘラケズリが施されている。C-287高坏も同様である。この他にもピット3aから土師器甕片、掘り方中から内面黒色処理されたC-460坏が出土している。

S I 441 住居跡 床面上から土師器C-473甕(第18図3)、カエリのある須恵器E-215蓋(第19図4)が出土している。

S I 443 住居跡 堆積土中から土師器甕片、須恵器高坏脚部片、瓶、平瓶片、カマド・床面上からは土師器甕片、ピット2からは土師器坏片が出土している。堆積土中から出土した土師器C-465坏(第15図1)は内面黒色処理され、放射状のヘラミガキが施されている。

S I 444 住居跡 堆積土、床面上、ピット中から土師器坏、甕片と小玉石(黒色23点、白色5点)が出土している。

S I 446 住居跡 堆積土中から土師器坏、甕片、須恵器片と小玉石(黒色2点、白色34点)、多量の甕母片が出土している。

S I 411 穫穴遺構 土師器坏、甕片、須恵器甕片が出土している。

S A 386 一本柱列 各柱穴掘り方から土師器坏、高坏、甕片、須恵器坏、高坏、甕片が出土している。この他に東側の3柱穴掘り方からP-9 フイゴ羽口片が出土している。東側の13柱穴掘り方からは、土師器坏片と須恵器E-199鉢片が出土し、土師器坏片はS I 443 住居跡出土の土師器C-465坏(第15図1)と同一個体のものである。

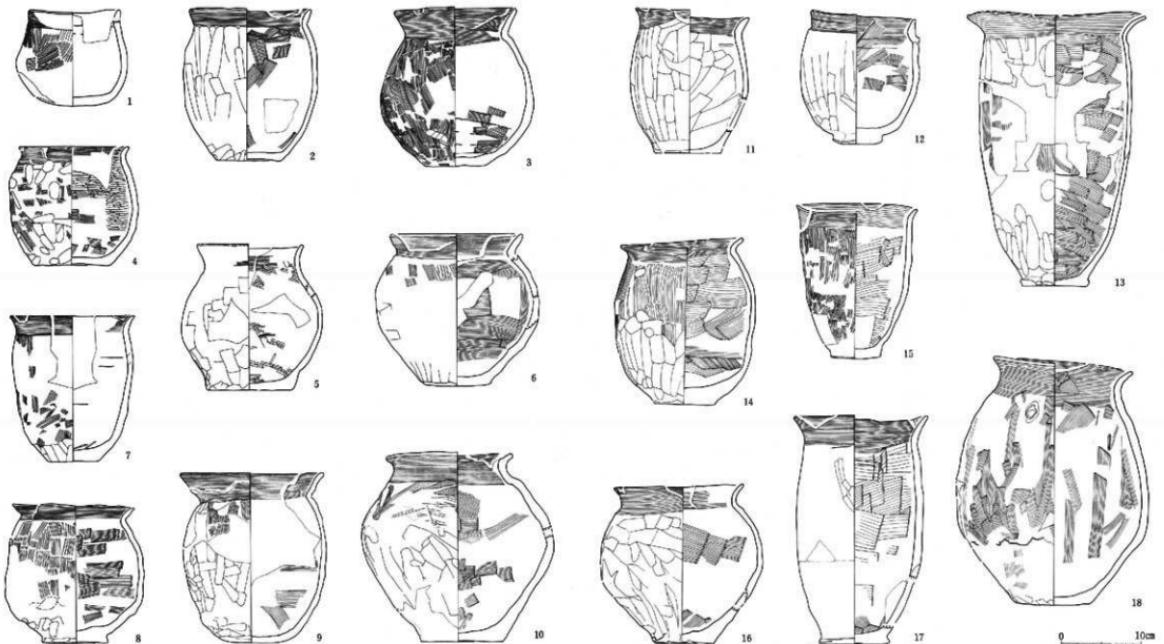
S A 452 材木列 土師器甕片を少量出土している。

S B 432 A・B 建物跡 南4東1柱穴掘り方から内面が黒色処理されずナデの施される土師器C-466坏片が出土している。また南4東3柱穴掘り方からは、内面が黒色処理されヘラナデのちヘラキガキが施される土師器C-467坏片が出土している。

S B 434 建物跡 各柱穴掘り方から土師器坏、高坏、甕片、須恵器蓋、甕片が出土している。

この他にS B 422、425、425、426、437、428、439、440、473 建物跡の柱穴掘り方から土師器、須恵器の坏、甕片が少量出土している。

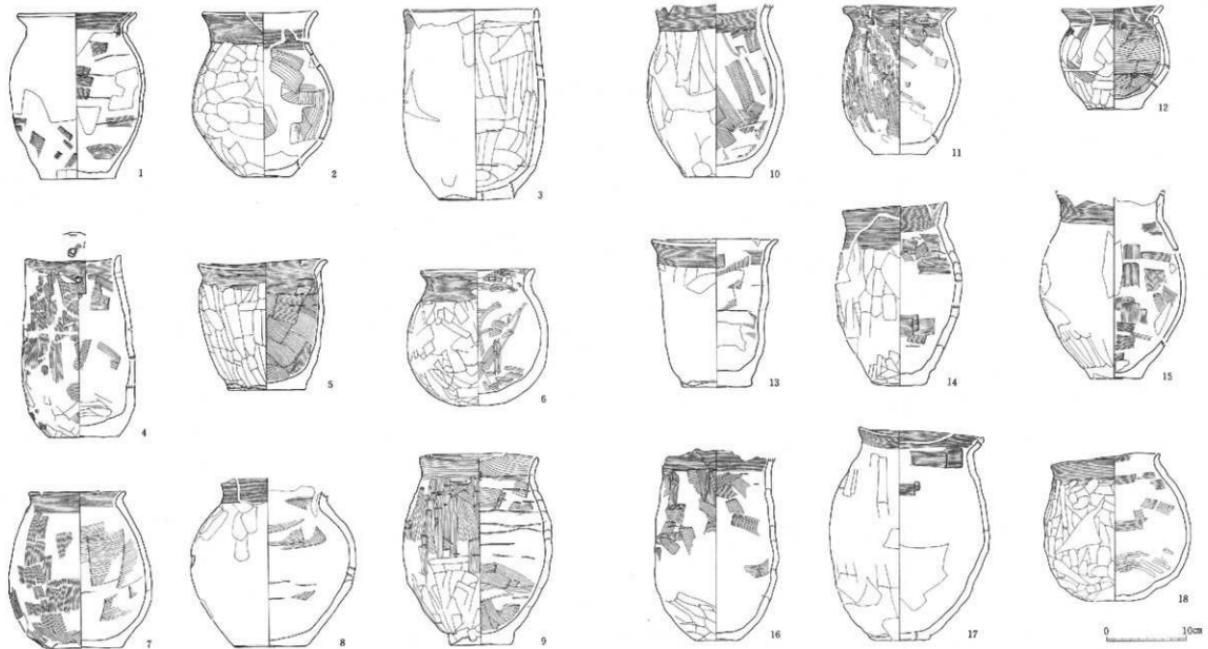
S B 435 建物跡 南3西1柱穴掘り方から内面が黒色処理されずナデの施される土師器C-463坏片、ヘラミガキの施された土師器C-476坏片が出土している。また、南3西1柱穴掘り方から須恵器E-220坏(第20図1)が出土している。この他にも各柱穴掘り方から土師器坏・甕片、須恵器坏片が出土している。



番号	材質	形	寸法	出土場所	層位	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面
1	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
2	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
3	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
4	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
5	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
6	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
7	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
8	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
9	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
10	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
11	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
12	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
13	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
14	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
15	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
16	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
17	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
18	土器	壺	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											

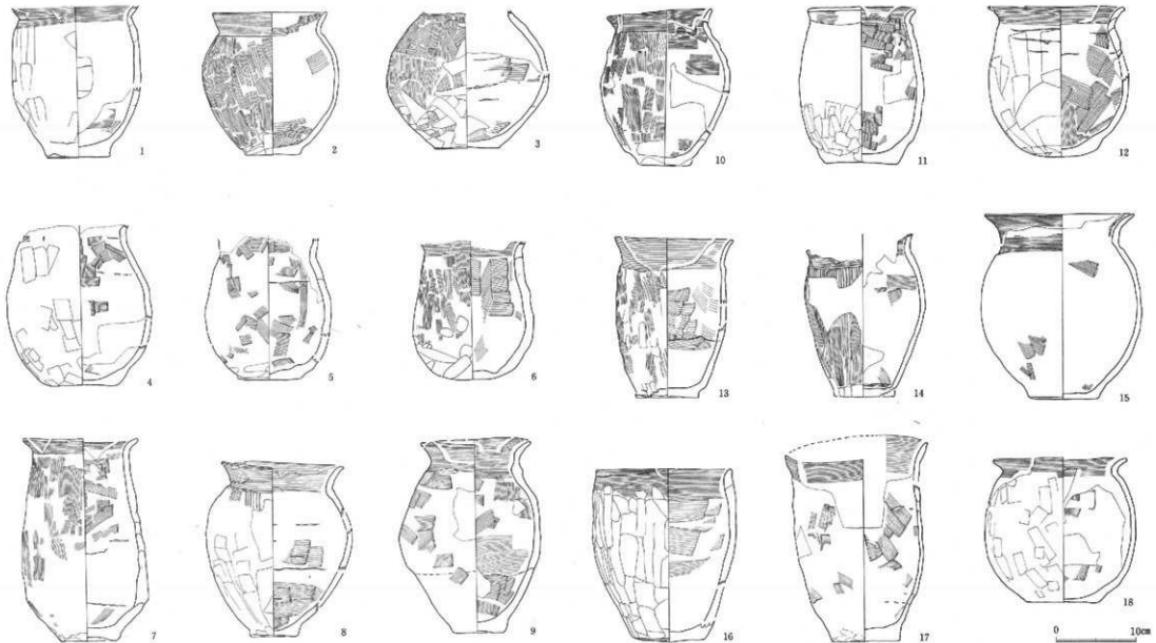
番号	材質	形	寸法	出土場所	層位	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面	断面
11	C-311	土器	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
12	C-312	土器	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
13	C-313	土器	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
14	C-311	土器	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
15	C-310	土器	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
16	C-311	土器	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
17	C-317	土器	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											
18	C-311	土器	5.5×5.3	3M	ヨコナラ	ハラナ											

第11図 S E429井戸跡第3・4層 出土遺物



番号	品目	規格	単位	原価		販売額		販売率		販売率	販売額	税込額	税込率
				購入	貯蔵	販売	貯蔵	販売	貯蔵				
1	C-021	モルタル 壁材	箱	1,420	1,400	1,420	1,400	1,420	1,400	98.6%	1,420	1,420	98.6%
2	C-025	モルタル 壁材	箱	1,420	1,400	1,420	1,400	1,420	1,400	98.6%	1,420	1,420	98.6%
3	C-027	モルタル 壁材	箱	1,420	1,400	1,420	1,400	1,420	1,400	98.6%	1,420	1,420	98.6%
4	C-027	モルタル 壁材	箱	1,420	1,400	1,420	1,400	1,420	1,400	98.6%	1,420	1,420	98.6%
5	C-027	モルタル 壁材	箱	1,420	1,400	1,420	1,400	1,420	1,400	98.6%	1,420	1,420	98.6%
6	C-030	モルタル 壁材	箱	1,420	1,400	1,420	1,400	1,420	1,400	98.6%	1,420	1,420	98.6%
7	C-022	モルタル 壁材	箱	1,420	1,400	1,420	1,400	1,420	1,400	98.6%	1,420	1,420	98.6%
8	C-030	モルタル 壁材	箱	1,420	1,400	1,420	1,400	1,420	1,400	98.6%	1,420	1,420	98.6%
9	C-028	モルタル 壁材	箱	1,420	1,400	1,420	1,400	1,420	1,400	98.6%	1,420	1,420	98.6%

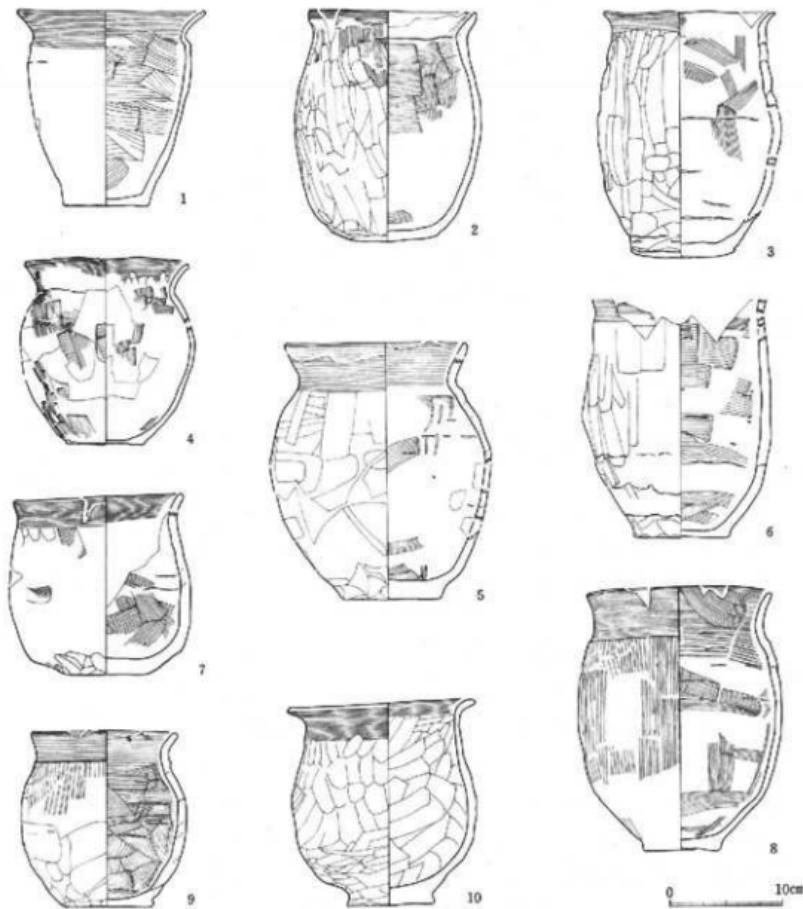
第12図 S E429井戸跡第4・5層 出土遺物



番号	出土地点	種別	目立った特徴	縦径	横径	厚さ	底面	内側	外側	表面	縫合	修理	参考文献
1	C-204 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-2					
2	C-205 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-3					
3	C-206 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-5					
4	C-207 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-7					
5	C-208 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-1					
6	C-209 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-8					
7	C-210 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-9					
8	C-211 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-10					
9	C-212 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-11					

番号	出土地点	種別	目立った特徴	縦径	横径	厚さ	底面	内側	外側	表面	縫合	修理	参考文献
10	C-204 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-1					
11	C-205 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-3					
12	C-206 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-5					
13	C-207 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-7					
14	C-208 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-9					
15	C-209 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-11					
16	C-210 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-13					
17	C-211 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-15					
18	C-212 上野町	壺	3.84cm 5kg ポリマー ハラサミ 木製柄	2.92	2.92	0.7	N	30-17					

第13図 S E429井戸跡第5層 出土遺物(6~11)



番号	出目場所	種別	形態	出土遺物	内 部 構 造			外 部 構 造			直 径 (mm)	高 度 (mm)	厚 度 (mm)	材 作	年 代
					横	縦	横	縦	横	縦					
1	C-345	土器部	壺	S E 429	5層	ヨコナギ		ヨコナギ	ヘラナギ	ヘラナギ	17.5	26.7	7.5	丸底実腹	52-3
2	C-344	土器部	壺	S E 429	5層	ヨコナギ	ヘラナギ	ヘラナギ	ヘラナギ	ヘラナギ	20.5	34.9	9.8	丸底実腹	52-7
3	C-340	土器部	壺	S E 429	5層	ヨコナギ	ヘラナギ	不規則形	ヨコナギ	ヘラナギ	21.9	35.3	9.2	%	52-8
4	C-358	土器部	壺	S E 429	5層	ヨコナギ	ヘラナギ	ヨコナギ	ヨコナギ	ヘラナギ	16.7	34.5	7.3	%	52-6
5	C-357	土器部	壺	S E 429	5層	ヨコナギ	ヘラナギ	不規則形	ヨコナギ	ヘラナギ	22.7	33.0	8.5	%	52-4
6	C-345	土器部	壺	S E 429	5層	ヨコナギ	ヘラナギ	ヨコナギ	ヘラナギ	ヘラナギ			8.3	%	52-3
7	C-346	土器部	壺	S E 429	5層	ヨコナギ	ヘラナギ	ヨコナギ	ヘラナギ	ヘラナギ	15.9		7.1	%	52-3
8	C-319	土器部	壺	S E 429	5層	ヨコナギ	ヘラナギ	ヨコナギ	ヘラナギ	ヘラナギ	33.5	38.5	7.6	丸底実腹	52-16
9	C-320	土器部	壺	S E 429	5層	ヨコナギ	ヘラナギ	ヨコナギ	ヨコナギ	ヘラナギ	15.6	22.8	8.0	丸底実腹	52-3
10	C-304	土器部	壺	S E 429	5層	ヨコナギ	チヂ	ヨコナギ	ヨコナギ	ヨコナギ	17.7	38.7	7.2	丸底実腹	52-11

第14図 S E 429井戸跡第5層 出土遺物 11~14

S K 387 土壙 土師器坏・高坏・壺片・須恵器蓋・高坏・壺・蓋片、平瓦片が出土している。

S K 388 土壙 土師器坏・高坏・壺片・須恵器壺片が出土している。

S K 389 土壙 土師器坏・高坏・壺・壺片・須恵器坏・高坏・壺片、平瓦（凸面格子叩き）

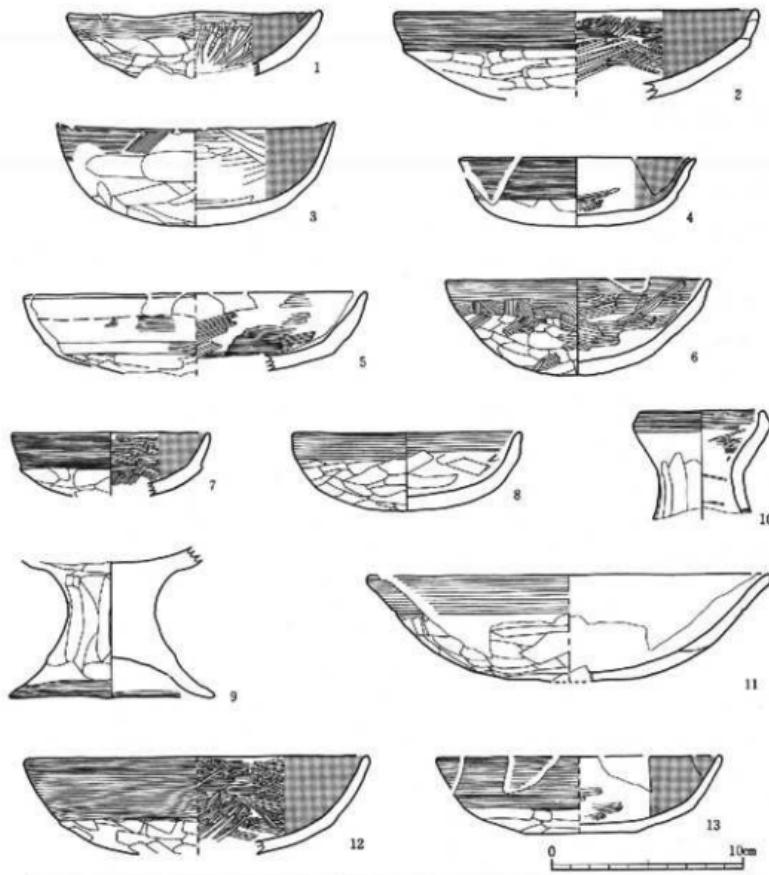
などが出土している。このうち堆積土第2層中から土師器C-423坏、C-458壺（第15図10）、須恵器E-188壺、E-189平瓶（第20図7）、第3層中からは土師器C-415・416・417（第15図12・13）・418・419坏（第16図1）が出土している。この他にも堆積土中から土師器C-412（第15図11）・413坏、C-303・411壺（第18図6・5）、カエリのある須恵器E-185蓋が出土している。C-418坏片とC-458壺の頭部下端には漆が付着し、C-423坏の外面とC-458壺の内外面には朱が付着している。またC-413坏は内面が黒色処理されず、ナデの施されるものである。

S K 391 土壙 土師器坏・壺片・須恵器蓋・壺・壺片、平瓦G-19・20・21（第22図2～4）、丸瓦F-27（第22図1）が出土している。平瓦G-19・20は、凸面に斜格子叩き目、凹面には桶巻き造りによる模付痕が見られる。平瓦G-21は凸面に正格子叩き目、凹面には壺状の凹凸が見られる。丸瓦F-27は、凸面に棒状の凹凸の著しい叩き目が施されている。また堆積土第3層から出土した土師器C-434坏（第16図2）は、平底で体部に段の形成されるものである。

S K 393 土壙 土師器坏・壺片・須恵器坏・壺片が出土している。このうち土師器C-445坏片は、内面が黒色処理されずナデが施されている。

S K 394 土壙 多量の土師器、須恵器片と平瓦片が出土している。堆積土第1層からは土師器C-306・307・308・309（第16図5～8）・426・435・436・437（第16図9～10）・450・454・455坏、須恵器E-213平瓶片、木製品が出土している。C-308坏は内外面黒色処理され、C-309坏は底部が平底風のものである。堆積土第2層中からは土師器C-294・299・311・436（第16図11～13・9）・439・446（第16図4）・451・452坏、C-312（第17図1）・315・457（第16図14）高坏が出土している。C-457高坏は3つの窓を有する脚部片である。また堆積土第3層からは土師器C-290（第17図4）・296・297（第16図3）・305・310坏（第17図2・3）、C-295・314（第17図5）高坏片、C-298鉢（第18図10）、須恵器E-175・176（第20図6）（壺片が出土している。C-298鉢は、鉛直方向に2対の孔が直交してあけられている。E-175・176壺片には、内面に漆が付着している。底面からはC-449・453坏が出土している。C-453坏は、内外面黒色処理された小形の坏である。これらの中でC-297・311・437・439・446・450・451・452・454・455坏は、内面が黒色処理されずナデの施されるものである。このうちC-297・446・451・455坏には墨痕が見られる。C-290・499坏、C-312・314高坏、C-298鉢は再酸化を受けている。

S K 395 土壙 土師器坏・高坏・壺片・須恵器坏・壺・壺・高台片が出土している。このう



番号	器物番号	種類	形態	大きさ	地質	層位	外観	内部	底面	壁面	縫合部	法面	高さ	幅	厚さ	
1	C-46	土器	II	S 140	埴輪土	埴輪土	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	3.3	13.4	不明	16	53-6
2	C-43	土器	II	S 130	埴輪土	埴輪土	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	3.0	19.2	2.0	16	53-11
3	C-364	土器	II	S 130	——	——	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	3.3	14.4	4.0	16	53-9
4	C-401	土器	II	S 130	埴輪土	埴輪土	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	3.8	12.3	——	16	53-8
5	C-408	土器	II	S 130	埴輪土	埴輪土	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	4.1	17.8	7.0	16	53-7
6	C-365	土器	II	S 140	埴輪土	埴輪土	ココナツ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	3.0	13.8	——	16	53-1
7	C-400	土器	II	S 130	埴輪土	埴輪土	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	3.4	10.2	4.0	16	54-10
8	C-365	土器	II	S 140	埴輪土	埴輪土	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	4.1	12.0	——	16	54-11
9	C-397	土器	II	S 140	埴輪土	埴輪土	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	3.0	16.8	——	16	55-2
10	C-402	土器	II	S 130	埴輪土	埴輪土	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	4.5	10.0	——	16	56-1
11	C-402	土器	II	S 130	埴輪土	埴輪土	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	4.5	23.2	4.0	16	56-1
12	C-403	土器	II	S 130	埴輪土	埴輪土	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	3.2	12.6	4.0	16	56-11
13	C-407	土器	II	S 130	埴輪土	埴輪土	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	ハラカズリ	4.0	15.0	4.0	16	56-12

第115図 第35次調査区出土遺物

ちC-424・428・429・430环片は、内面が黒色処理されずナデの施されるものである。

S K 396 土壤 土師器C-425环、甕片、須恵器E-190蓋、半瓦片が出土している。C-425环は内面が黒色処理され、ナデが施されるものである。

S K 398 土壤 土師器环・高环・甕片、須恵器环・蓋・壺・甕片が出土している。このうちC-469・470环片は内面が黒色処理されずナデの施されるものである。

S K 402 土壤 土製品と土師器片を少量出土している。

S K 403 土壤 土師器环・高环・甕片、須恵器蓋・壺・甕片が出土している。C-300・301・302环片は、内面が黒色処理されずナデが施されるものである。

S K 404 土壤 土師器环・高环・甕片、須恵器E-177・214蓋・甕片、盤片が出土している。

S K 405 土壤 土師器C-444环(第17図10)・环片・甕片、須恵器环・蓋・甕片が出土している。このうちC-444环は再酸化を受けている。

S K 407 土壤 土師器C-292环(第17図11)・环片・甕片、須恵器蓋・甕片が出土している。

S K 413 土壤 土師器环・高环・甕片、須恵器蓋・甕片が出土している。

S K 428 土壤 土師器C-417环(第15図13)・环片・甕片が出土している。

S K 442 土壤 土師器环・甕片、須恵器环・蓋・甕片が出土している。

S K 468 土壤 土師器环・甕片、須恵器蓋片・鉢などが出土している。このうち堆積土第2層中からは小形の土師器C-407(第17図7)が出土している。堆積土第4層中からは土師器C-408(第17図13)・410环、C-409甕、須恵器E-184鉢が出土している。

その他、S K 392・406・417・418土壤からは少量の土師器片が出土し、S K 401・415土壤からは少量の土師器片と須恵器片が出土している。また調査区の西側中央部で、S K 291・388・391・392・394・395土壤上面の精査時に多量の遺物が出土している。出土した遺物は、土師器C-284环、C-282・283・432(第18図9・7・4)・456甕、須恵器E-174蓋(第19図7)などの他に、土師器环・甕片、須恵器环・高台付环・蓋・盤・甕片、小玉石などがある。

S D 273 溝跡 土師器环・甕片、須恵器蓋片が出土している。

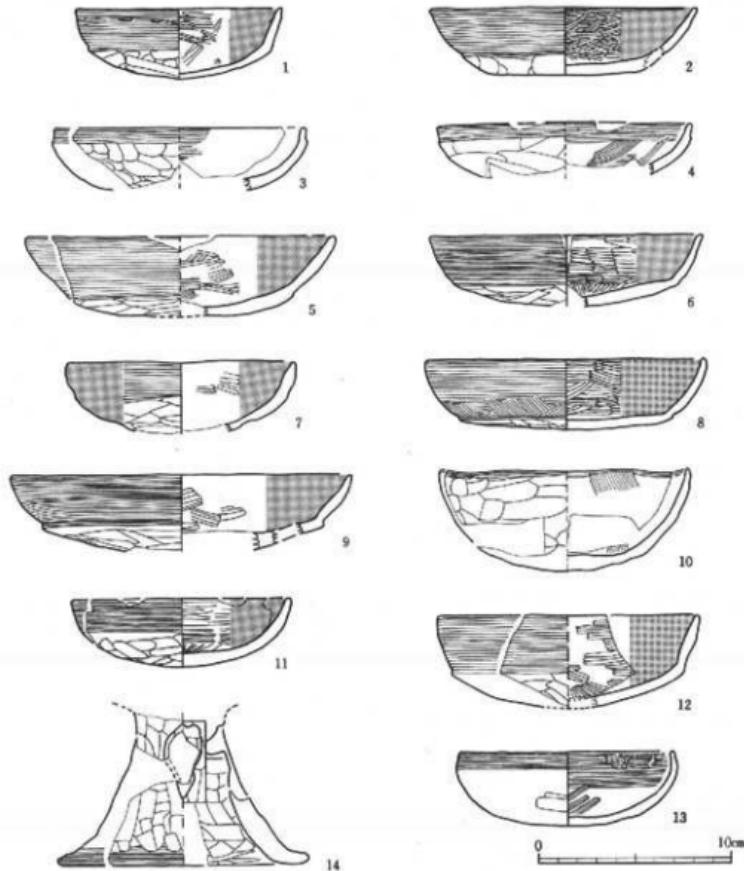
S D 385 溝跡 土師器环・高环・甕片、須恵器蓋・甕片が出土している。

ピット100 土師器环・甕片が少量出土している。このうち土師器C-447・462环片は、内面が黒色処理されずナデが施されるものである。

ピット115 土師器C-464环(第17図12)が出土している。

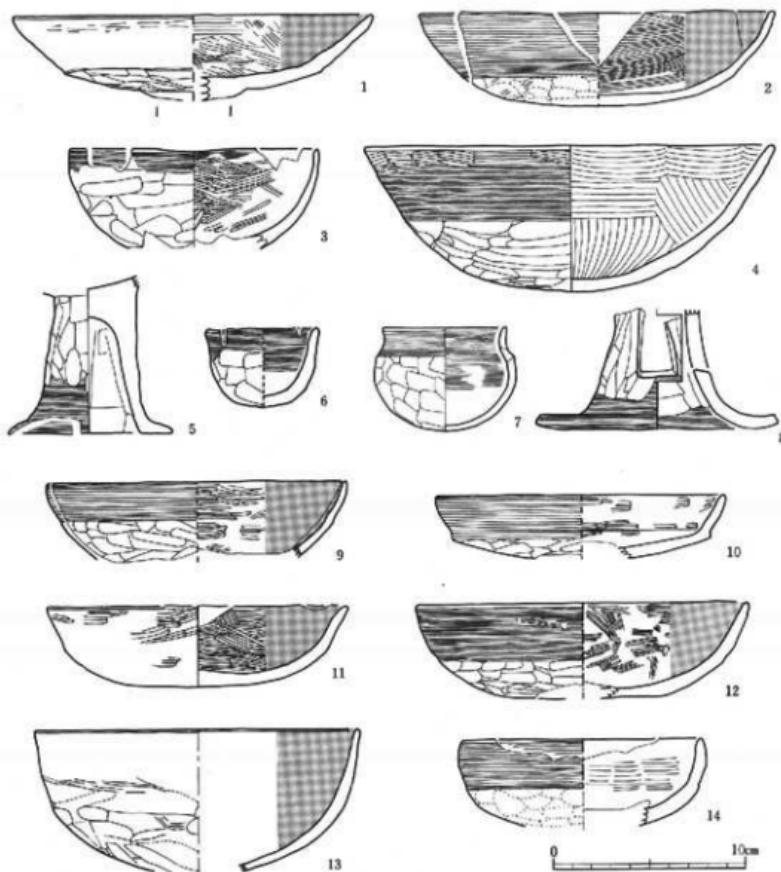
ピット116 土師器C-459环片・环片・甕片が少量出土している。

以上であるが、造構検出面上において土師器C-420・422・433・461(第17図14)环と須恵器E-197・209环(第20図3・4)、E-196高台付环(第20図5)、E-186・194・198・216蓋(第19図21・5・9・8)なども出土している。



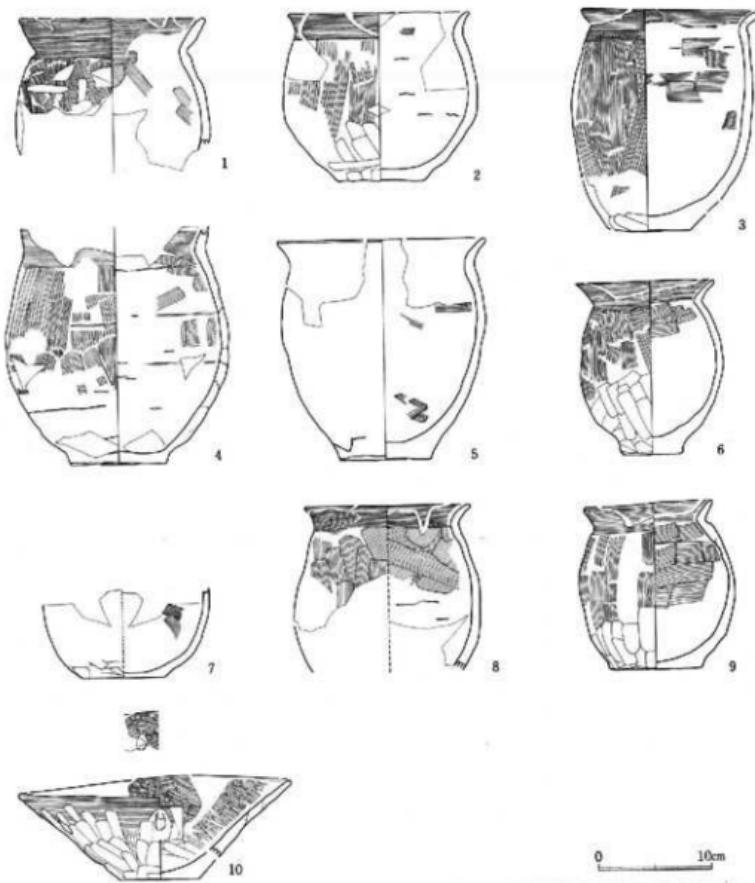
番号	種類	種	性別	出土遺物	外 面	裏 面	頭	胸	腹	内 面	出 處	周 長	幅 高	1mm	底 面	種 名	真實圖
1	C-387	土蜘蛛	♀	SK369	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
2	C-388	土蜘蛛	♀	SK370	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	3.5	13.8	8.0	33-5		
3	C-389	土蜘蛛	♀	SK371	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	13.4					
4	C-385	土蜘蛛	♀	SK367	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
5	C-386	土蜘蛛	♀	SK368	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
6	C-390	土蜘蛛	♀	SK372	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
7	C-391	土蜘蛛	♀	SK373	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
8	C-392	土蜘蛛	♀	SK374	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
9	C-393	土蜘蛛	♀	SK375	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
10	C-394	土蜘蛛	♀	SK376	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
11	C-395	土蜘蛛	♀	SK377	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
12	C-396	土蜘蛛	♀	SK378	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
13	C-397	土蜘蛛	♀	SK379	3脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
14					詳細図	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	10.5	5	33-10		
15	C-398	土蜘蛛	♂	SK380	2脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	3.6	11.4	5	37-3		
16	C-399	土蜘蛛	♂	SK381	2脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	7.00	13.2	5	37-5		
17	C-401	土蜘蛛	♂	SK382	2脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	2.62	11.0	5	37-4		
18	C-402	土蜘蛛	△M(頭部)	SK383	2脚 縫ナリ	ハラナズリ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	ヘラゴサカ	6.00	13.0	5	37-6		

第16回 第35次調査区出土遺物



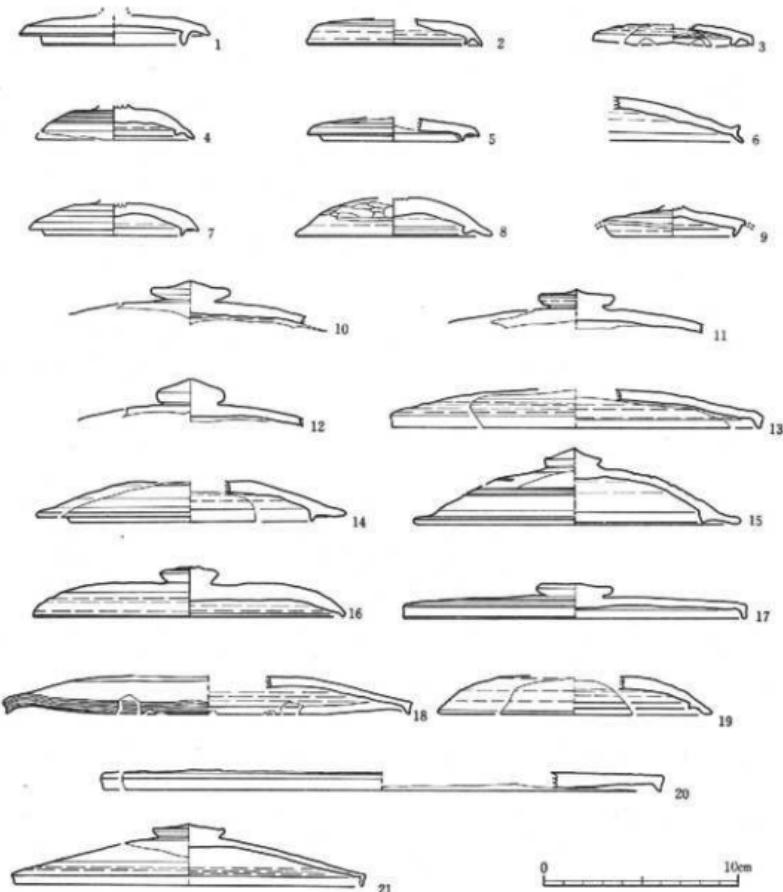
番号	品目	規格	外寸	内寸	調節	要	内寸		内寸		内寸		規格	規格
							幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ		
1	C-B2	200G	幅45	SK30N	3号	レバーハンドル	→	ハラクサリ	1.5号	1.5号	3.5	18.4	N	S-9
2	C-30	200G	幅45	SK30N	3号	ねじナット	→	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	5.0	18.7	N	S-10
3	C-B10	180G	幅45	SK30N	3号	ねじナット	→	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	7.5	13.0	N	S-11
4	C-260	180G	幅45	SK30N	3号	ねじナット	→	ハラクサリ	1.5号	1.5号	7.6	21.4	N	S-9
5	C-B4	180G	幅45	SK30N	3号	レバーハンドル	(下引)	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	7.5	18.8	8.4	規格外
6	C-65	200G	幅45	SK30N	3号	ねじナット	→	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	4.0	1.9	N	S-3
7	C-200	200G	幅45	SK30N	2号	ねじナット	→	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	5.5	1.5	N	S-7
8	C-250	200G	幅45	SK30N	2号	ねじナット	→	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	6.1	1.5	N	S-6
9	C-427	160G	幅45	SK30N	3号	ねじナット	→	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	3.6	15.4	N	S-4
10	C-444	200G	幅45	SK30N	2号	ねじナット	→	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	3.3	15.0	N	S-5
11	C-90	160G	幅45	SK30N	2号	ねじナット	→	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	4.4	15.5	N	S-9
12	C-964	195G	幅45	SK30N	2号	ねじナット	→	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	5.0	22.3	N	S-4
13	C-480	195G	幅45	SK30N	4号	ねじナット	→	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	7.4	15.8	N	S-1
14	C-46	195G	幅45	SK30N	2号	ねじナット	→	ハラクサリ	ハラクサリ	ハラクサリ	4.6	12.5	N	S-6

第17図 第35次調査区出土遺物



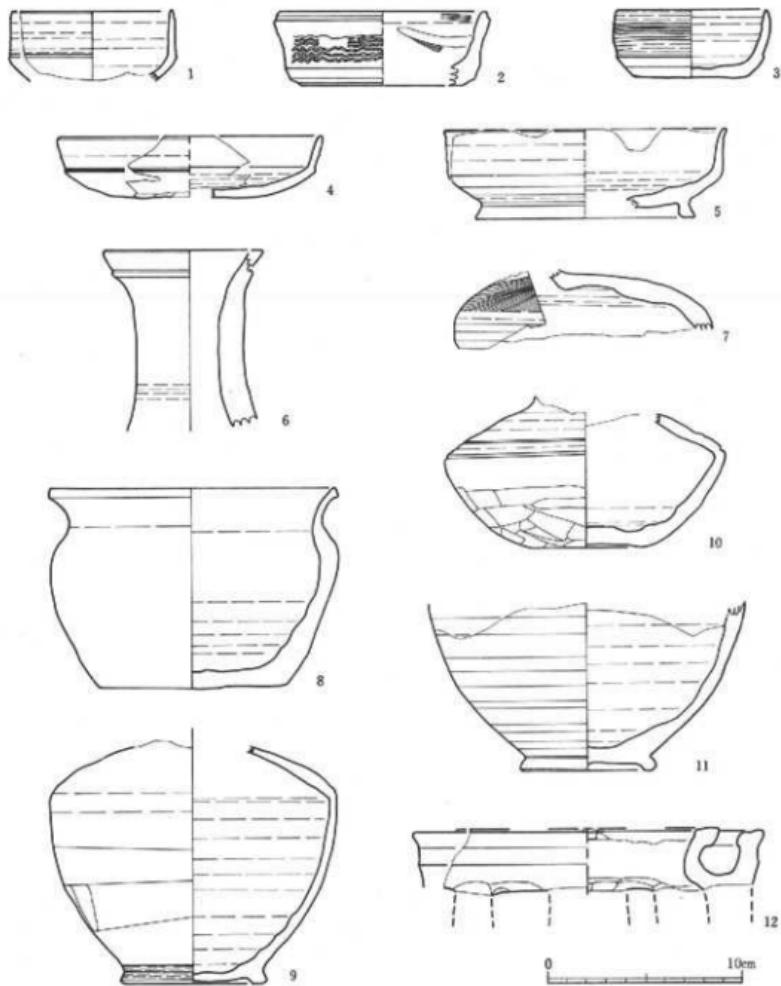
番号	形状	寸法	地質	性質	外 形	内 部	底 部	質	法	容 量	高 度	幅 合
1	土器	直筒	S 130	上層	ヨコナラ ハラナラ	ハラナラ	ヨコナラ	ヘラナラ	16.1	16.1	%	53-12
2	土器	直筒	S 142	粘土層	ヨコナラ ハラナラ	ハラナラ	ヨコナラ	ハラナラ	18.0	18.7	7.4	52-3
3	土器	直筒	S 144	粘土層	ヨコナラ ハラナラ	ハラナラ	ヨコナラ	ハラナラ	18.0	17.1	7.3	52-4
4	土器	直筒	S 148 34.91	粘土層	ヨコナラ ハラナラ	ハラナラ	ヨコナラ	ハラナラ	13.0	13.0	8.2	56-9
5	土器	直筒	S 150	粘土層	ヨコナラ ハラナラ	ハラナラ	ヨコナラ	ハラナラ	19.6	18.5	8.0	56-4
6	土器	直筒	S 150	粘土層	ヨコナラ ハラナラ	ハラナラ	ヨコナラ	ハラナラ	15.5	12.7	5.5	12.5形
7	土器	直筒	S 154 32.40	粘土層	ヨコナラ ハラナラ	ハラナラ	ヨコナラ	ハラナラ	6.0	6.0	7.2	%
8	土器	直筒	S 155	上層	ヨコナラ ハラナラ	ハラナラ	ヨコナラ	ハラナラ	15.5	15.5	7.4	56-5
9	土器	直筒	S 156 30.62	粘土層	ヨコナラ ハラナラ	ハラナラ	ヨコナラ	ハラナラ	14.6-	15.0	11.6	52-2
10	土器	直筒	S 158	下層	ヨコナラ ハラナラ	ハラナラ	ヨコナラ ハラナラ	ハラナラ	7.3	14.0	17.0	12.5形

第18回 第35次調査区出土遺物



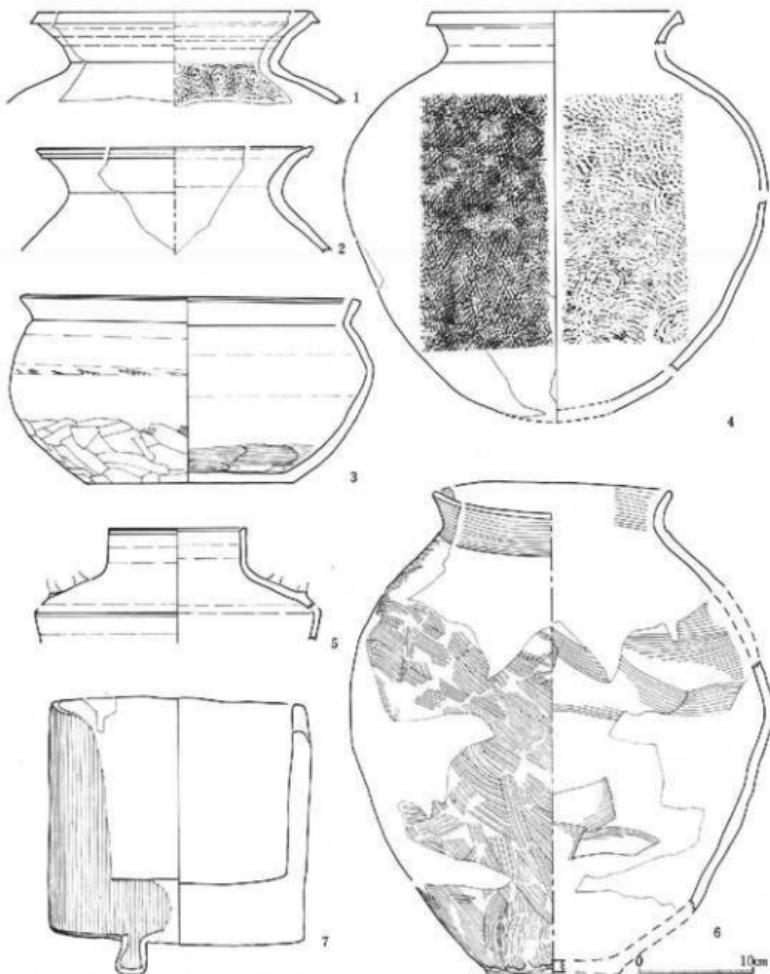
参考 標本番号	種別	寸法	出土地名	年 代	外 形 特 徴		内 部 構 造	材 質 等	正 式 名 称	存 在 地	写真 場所
					外 形 特 徴	内 部 構 造					
1	刀身	長さ23.5cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	1
2	刀身	長さ22.5cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	2
3	刀身	長さ19.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	3
4	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	4
5	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	5
6	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	6
7	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	7
8	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	8
9	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	9
10	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	10
11	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	11
12	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	12
13	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	13
14	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	14
15	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	15
16	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	16
17	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	17
18	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	18
19	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	19
20	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	20
21	刀身	長さ18.0cm	奈良県吉野郡	古墳時代	直線状	無	無	無	刀身	奈良	21

第19回 第35次調査区出土遺物

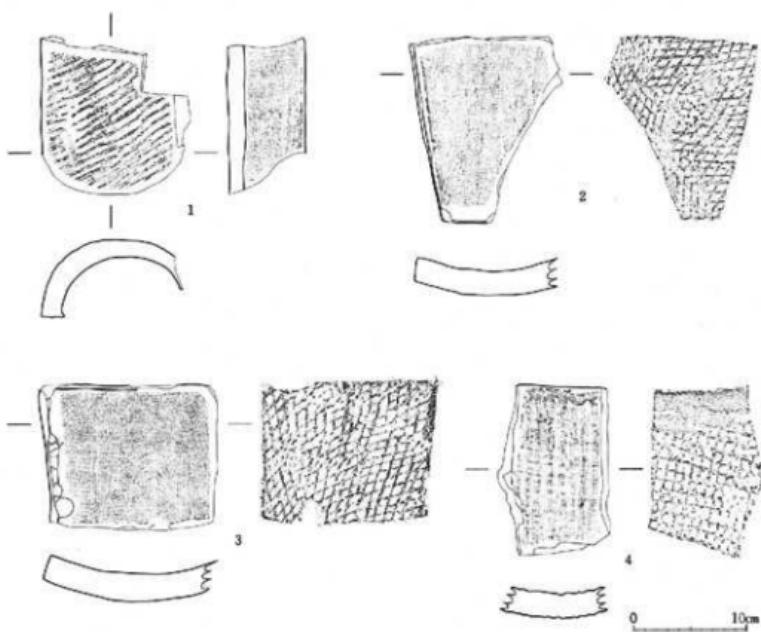


品目	種類	形	寸法	材質	特徴	備考
1	土器	小口縦縫	高さ10cm	粘土		
2	土器	縦縫	高さ8cm	粘土		
3	土器	縦縫	高さ8cm	粘土		
4	土器	縦縫	高さ8cm	粘土		
5	土器	縦縫	高さ8cm	粘土		
6	土器	縦縫	高さ8cm	粘土		
7	土器	縦縫	高さ8cm	粘土		
8	土器	縦縫	高さ8cm	粘土		
9	土器	縦縫	高さ8cm	粘土		
10	土器	縦縫	高さ8cm	粘土		
11	土器	縦縫	高さ8cm	粘土		
12	土器	縦縫	高さ8cm	粘土		

第20図 第35次調査区出土遺物



第21図 第35次調査区出土遺物



第22図 第35次調査区出土遺物

4. まとめ

発見された遺構は竪穴住居跡8軒、竪穴遺構1基、掘立柱建物跡19棟、木材列・柱列6列、溝跡6条、井戸跡3基、土壌34基、小柱穴・ピット約210である。これらの遺構は重複関係・方向・配置関係等から5つの段階に区分することができる。この5段階区分は昭和57年度の第24次調査（註1）と同様の結果である。

〔第1段階〕 S D 445 溝跡 溝跡1条のみであるが、検出された部分での全ての遺構に切られしており、出土遺物は全くなかったが、形状・規模等において S D 364（註2）類似性がみられることから、遺構の年代は特定できないが、第2段階に先行するということで、ここでは第1段階の遺構としておきたい。

〔第2段階〕 S I 441・444 窓穴住居跡 S I 441 は全容が不明なうえに、上部削平が著しく、検出面で床上面が露出している部分があったことから、出土遺物が極めて少ない。図化し得るものは床面から出土した土師器壺（C-473）と堆積土1層から出土した須恵器蓋（E-215）のみである。土師器はロクロ未使用で、外面ハケメ・ヘラケズリ調整、内面ヘラナデのものであり、須恵器は内面にカエリを持つ小形の蓋である。ここでは7世紀代のものとみておきたい。

S I 444 窓穴住居跡は土師器壺片・甕片が若干出土したのみで、年代判定ができないが、造構の重複関係からみれば、第1段階とした S D 445 溝跡が埋まってから造られており、7世紀後半代と考えられるⅠ期官衙（第3段階）の造構である S I 443 窓穴住居跡や、それに続いて造営されたⅡ期官衙（第4段階）の造構である S A 386 一本柱列に切られていることから、少なくとも7世紀中葉を降らない時期のものとみられる。

この2軒の住居跡は遺存状況が極めて悪いが、方向がN-43°-Eと一致しており、Ⅰ期官衙の造構群によって切られていることから、ほぼ同様の時期のものと考えられ、ここでは第1段階とした S D 445 溝跡の年代が特定できないが、古墳時代中期とした第1段階造構群の年代を上限とし、Ⅰ期官衙（第3段階）の造構群とみられる S I 443 に切られていることから、Ⅰ期官衙の造営開始年代と考えられる7世紀中葉を下限とする年代幅が考えられる。さらに S I 441 出土の須恵器蓋（E-215）は堆積土中ではあるが、極めて床面に近く、住居廃絶直後に入ったことが考えられる。この須恵器蓋は7世紀代の指標とされる内面にカエリを持っているものであることや、下限年代が7世紀中葉となることからみれば、7世紀前半代を中心とする年代のものとみて大過ないものと考えられる。

〔第3段階〕 真北線から30°前後東にふれた基準方向（以下30°基準とよぶ）による窓穴住居跡・建物跡・材木列・柱列。

直接的な造構の重複関係から2~4回の変遷がみられ、方向の差異により、N-21°-EからN-54°-Eまで、6つにグルーピングできる。

直接的には造構の重複関係は次のとおりである。





また、造構の方向により分類すれば次のとおりである。

N-21°-E	S 1411
N-30°-E	S A452, S 1400, 446, 447
N-32°-E	S B420, 421, 424, 425, 473, 279A+B+437, S A408, 423, 433, 437
N-33°-E	S B422, 432A+B, S 1412, 443
N-34°-E	S B439, 440
N-54°-E	S B426

となり、方向のわずかな差異が必ずしも造構の新旧関係を反映しているものではなく、S B 425 (32°) → S B 432 A+B (33°), S B 437 (32°) → S 1412 (33°), S B 420 + S A 423 (32°) → S B 422 (33°) という造構の重複関係がみられ、32°基準造構が33°基準造構により切られている部分もあるが、30°→32°, 33°→30°という重複部分もあり、方向の違いにより、造構群全体の変遷を捉えることはできない。また、S B 420・421・473の32°基準造構は3棟が同時に存在不可能であることから同方向でも3回の変遷が認められ、S 1 443とS 1 412, S B 422も33°で同方向を示すが、同時に建ち得ないものである。さらに第24次調査の結果とあわせて考えれば、同一時期と考えられる造構にも方向の差異がみられる(註3)。

これらのことから、30°~34°の中での方向の差異が、造構の変遷を考えるうえで、無視できない要素となっているものの、時期変遷を捉える決定要素にはなり得ない。

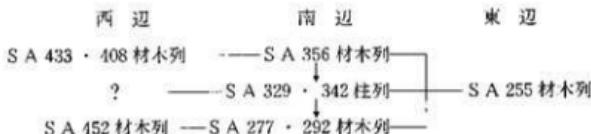
基準方向は主に30°~34°の中に集中する傾向がみられるが、21°を示すS 1 411 瞬穴造構、54°を示すS B 426 造物跡の2つの造構の方向が他のグループと大きく異なる。S 1 411は第3段階に属するS 1 412・433 住居跡を切っているが、後述する第4段階に属するとみられるS E 429 井戸跡やさらに所轄段落が不明なSK 442 土壙に切られていることから、ここでは第3段階としておきたい。S B 426 造物跡は所轄段落不明のSK 392 土壙を切っており、第4

段階とみられる S D 385 に切られていることから、第4段階までは時期的にみて降り得ないことから、第4段階以前の構造とみられる。S K 392 の年代が明らかでないことから、第1ないし第2段階のものとも考えられる。

この段階に属する堅穴住居跡は5軒あるが、住居の方向が建物跡と同様30°～33°基準方向を示しており、特に S I 412・443 は S B 420・422・437 建物跡と柱列に方向を揃えており、新旧関係はあるものの、建物跡と同様の企画的配置プランに則って造られていることが考えられ、全形規模をみても大型の長方形を呈する S I 433 (床面積58.8m²)、曲屋風のL字型を呈する S I 400 など、他にはみられない住居跡がある。これらの堅穴住居跡は堅穴の形態からみて、これまでの通例に従い住居跡と表記しているが、一般的な集落における住居跡とは明らかに異なり、配置関係等からみて、獨立柱建物跡と同時に共有空間の中で官衙を構成していたものとみられ、別・廄屋等の官衙内における雑舎と考えられるが、堅穴の性格については確たる検証をすることができなかった。ここでは住居跡よりやや小規模の方形プランを有し住居としての施設を持たない堅穴構造との混同を避けるため、便宜的に堅穴住居跡としておきたい。

これらの建物や堅穴住居は、柱方向を揃えるなどの規則性がみられ、1つの官衙ブロックを形成しているものの整然とした配置関係をとっていたか否かについては今次調査では結論を得ることができなかった。しかし、造構の在り方に共通性がみられるものがあり、一連の造構と考えられる。S B 488 A・B 門跡に接続する S A 408・433 材木列は第24次調査における S A 356 材木列(註4)と形状・規模において極めて類似しており、両者の角度が1°程ずれてはいるものの、S A 408 の南延長と S A 356 の西延長とが、ほぼ直角に交わって回廊施設を形成していたものと考えられる。

また、S B 488 門跡の西側に発見された S A 432 材木列は方向・形状・規模が S A 277・292 材木列とほぼ同様であることから、これも調査区外西側で直角に交わるものとみられる。第24次調査では S A 356 材木列 → S A 329・342 柱列 → S A 277・292 材木列の変遷が認められており、今次調査では S A 329・342 に相当する柱列が発見されなかつたが、これが S A 329・342 の布振りと同位置で完全に重複していることや、今回の検出部分が極めて部分的であることから、今後の調査で発見されることが十分考えられよう。柱列の存在の有無は別にしてもやや小規模な S A 408・433 が S A 452 より古いものであることは第24次調査の結果からも考えられる。



以上のようなことから、多少の方向の違いはあるものの、第24次調査の S A 255 を東辺、S A 356・277・292・329・342 を南辺、今次調査の S A 408・433・452 を西辺とする東西長 51～54m(170～180 尺)、南北町 60m(200 尺) 以上の材木列ないしは柱列で囲まれた小区画が想定されよう。区画内の建物配置やその性格については 2～4 回の変遷があることから、各小期の建物数・配置関係が判然としないうえに区画施設との相互関係が明確でないことなどからも不明な点が多いが、南北仮想中軸線上に S B 279 A・B、424・425・432 A・B 建物跡が並んでおり、南北棟建物が多い。西辺に門がつき、南辺中央には門がないことなどからみて、東を正面としていたことが考えられる。また、この小区画内には大形の柱を持つ倉の建物跡がなく、建物内部に柱を持たない官衙風建物跡が主体を占めていることは、この区画が役所の中心的施設ではないにしても、官衙ブロックとして院を構成していたものと考えられる。

第3段階に属する遺構での遺物出土量が極めて少なく、比較的まとまって出土したのは S I 412 段穴住居跡の土師器壺 3 点、高壺 1 点、甕 1 点、須恵器壺 1 点、蓋 2 点である。C-460 壺は体部外面に明瞭な段を持ち丸底で、口縁部はやや外傾して立ちあがり、段上ヨコナデ、段下ヘラケズリ、内面は黒色処理ヘラミガキで、内面に段や括れ等の明瞭な差別はできないもので、大まかな器形的、調整的な特徴からみれば、栗圓式とみられるが、口縁部が外反しないこと、内面の段ないし括れが明瞭でないことなど、従来いわれてきた栗圓式とは様相が異なる。しかし、栗圓式土器についてはタイプサイトである仙台市栗遺跡の調査により、I～III期の区分が可能であり、栗圓式の型式設定の際に抽出された諸特徴とは異なった様相を示す一群があることも指摘され（註5）、本遺跡出土の壺類は細かな違いはあるものの栗圓式期の新しい時期のものと類似性がみられる。

C-285 壺は丸底で、体部外面上半に棱を有し、口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリを施し、内面はナデ調整で黒色処理を施さないもので、胎土中に赤褐色粒子をわずかに含み、在地系の土器群と一線を画するものである。本遺跡出土の在地系外の土器群は明らかに畿内系とみられるもの（註6）を除いて総括的に関東系とよんでいるが、この壺もその一群に含まれるものであろう。しかし、関東系土器群も土器組成が明らかでなく、わずかに壺について在地系上器と区分しているにすぎず、年代・地域の固定も判然としないが、本遺跡の第2段階から第4段階にまで及んでおり、在地系土師器や須恵器の年代観から7世紀中葉から8世紀初頭に該当するものと考えられる。第2段階遺構出土の土器群については千葉県地方の鬼高式後葉の土器に類似性がみられ（註7）、第4段階遺構出土の土器群については近年宮城県内でも出土例が多く、特に志波姫町御駒堂遺跡では関東からの人々の移住に伴って、搬入もしくは製作された土器群の実態が明らかになっており（註8）、年代的にも7世紀末葉から8世紀初頭の「真間式系土器」とされる御駒堂第1郡土器と極めて近似している。これらのことから、この C-285 壺は真間系とみられる第4段階遺構群出土の壺より古く、鬼高式後葉の土器との類似性がみら

れる第2段階造構群出土の环より形態的にみても後出するものであり、ここでは7世紀後半代のものとみておきたい。

須恵器E-179环は体部下半に段を有し、平底で、体部外面下半は回転ヘラケズリ、底部は手持ちヘラケズリの小形の环であるが、県内では藏王町塩沢北遺跡1号住居跡出土（註9）、名取市清水遺跡A溝-1出土（註10）のものと類似しており、塩沢北遺跡では「8世紀初頭」としており、清水遺跡で第V群土器とし、「7世紀中・後葉」としている。形態的には塩沢北遺跡出土のものに近似しているが、後述する本遺跡第4段階（Ⅱ期官衙）の年代が7世紀末葉から8世紀初頭と考えられていることから、このE-179环を含むS I 412出土の土器群は7世紀末葉を降らないものであろう。

須恵器E-217・219蓋はツマミ部分が欠損しているが、内面にカエリを持つもので、須恵器型式編年表Ⅲ型式（註11）に該当する。Ⅲ型式は1～3の段階に細分されているが、カエリがしだいに小さくなっていく傾向がみられ、E-219はⅢ型式でも古い様相を呈しているがE-217は2・3段階との類似性がみられ、Ⅲ型式の実年代は7世紀前半から後半とされていることから、ここでは7世紀後半代とみておきたい。

以上、S I 412堅穴住居跡出土の在地系土師器・関東系土師器・須恵器について若干の検討を行ったが、須恵器等においてやや年代的なズレがあるが、おおむね7世紀中葉を上限とし、7世紀末葉を下限とする7世紀後半代とみて大過ないものと考えられる。

これらのことから、第3段階造構群は2～4回の変遷があり、各小期の細かな年代観は明らかではないが、7世紀後半代の造構群とみておきたい。この第3段階の造構群は1期官衙を構成するものと考えられており、この1期官衙は後述する第4段階造構群（Ⅱ期官衙）に先行して造営されたものであることは既に報告した通りである（註12）。

〔第4段階〕 S A 386一本柱列、S B 434・435 A・B建物跡、S D 385溝跡、S E 429井戸跡、S I 390堅穴住居跡

柱列・建物跡・住居跡の基準方向は真南北ないしは真東西方向で、井戸跡の井戸もほぼ真北方向を示している。

S A 386一本柱列と南側に平行するS D 385溝跡は、他の造構との重複関係からみて、ほぼ同一時期のものとみられ、S B 434 435 A・B建物跡がこの柱列の北側に位置していることやS D 385の南側には造構の密度が希薄であることなどから、北側を区画の内側としていたものと考えられる。この区画施設は掘立柱による堀とみられ、南側の溝との間隔4.9～5mは犬走りとしての可能性が考えられる。この堀跡は推定方四町外郭南辺の材木列（註13）から、計算値で326.65mとなり、3町（=321.33m）東西線との差は5.32mで、S D 385とほぼ一致する。のことから、この堀と溝による区画施設が綿密な計算のもとに造られたことが想定されよう。しかし、前述したようにこの施設が北側部分を区画するためのものとみていることか

ら、官衙の外郭施設とは直接的な関連性はみい出し難く、むしろ官衙内における内部の区画施設と考えたい。

また、この堀跡の北側に隣接して建てられたS B 431・435 A・B建物跡はS B 435 A→同B→434の順でほぼ同位置に附と棟通りを平行に建てられた東西棟で、堀との間隔は2.1~2.4mあり、極めて接近しているが、両者とも堀と共に存した可能性が高く、附は造り替えの痕跡がないことから單一期とみられるが、伴う建物は3回の変遷が認められる。

S E 429 井戸跡内は土師器甕がつめ込まれた様な状況を示し、総数100個体前後になるとみられ、他には土師器高杯片1点、須恵器鉢2個体・長颈壺2個体があるのみで、土師器甕が主体をしめており、このような上器の在り方は一般的な施業とは考え難い。土器は正立しているものや横だおしのものなど様々で、器形・大小等も極めてバラエティーに富んでいるが、ほぼ一時的に意図的に入れられたものとみられる。今回は細かな分類は行なえなかったが、器形では長胴形を呈するものと球形を呈するものが片寄りなくみられ、それぞれ大形・小形がある。また、頸部の段が不明瞭なもの、段がないものが多く、器面調整はハケメのものもあるが、ケズリを施すものが多く、ミガキの入るものもみられる。

7世紀代とされる栗圓式の甕が、ハケメ調整を主体としているという点から、これらの土器群は栗圓式土器と区別される。また、8世紀代とされる国分寺下層式の甕においては後半代になると体部球形のものが殆んどみられなくなることから、この上器群は8世紀前半代のものと考えられる。共伴する須恵器E-182鉢を体部の形態にやや違いがみられるが、陶邑K.M.226窯出土の鉢（註14）と類似している。K.M.226窯出土品は須恵器型式編年Ⅳ型式1段階に位置づけられている。Ⅳ型式は蓋のカエリが消失することを特徴としており、8世紀の前葉を開始年代とするほぼ100年間とし、第1段階の有続期間は30年を超えることはないとされている。このことからも8世紀前半代とした年代観は妥当なものと考えられる。

S I 390 穫穴住居跡は上部が殆んど削平され、床面も貼床が明確でないが、炭化物が層を成して堆積しており、これが床面直上の堆積層と考えられる。土器類はこの炭化層上面ないし、層中より出土しており、土器類の年代は住居の廃絶年代を少なからず反映しているものと考えられる。

土師器甕は丸底で、体部外面に棱を有し、上部ヨコナデ、下部ヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理を施しており、棱の位置が上半部にあるもの（C-443）、下半ににあるもの（C-438）の他、棱・段のみられないもの（C-301）も出土している。須恵器は蓋が比較的多く、殆んどが中形から大形のものである。内面にカエリのあるものとないものが共伴し、カエリのないものが主体をしめている。ツマミはやや扁平な宝珠形を呈している。内面にカエリのあるE-205・206蓋は須恵器型式編年Ⅲ期3段階のものと類似性がみられる。カエリのない蓋は端部がするどく下方に屈曲するもの（E-204・207・208・218）、ゆるやかに開くもの（E

—200）の2種がある。いづれもⅣ期以降のものであり、細分段階は不明であるが、Ⅲ期3段階の遺物と共に伴していることからみて、Ⅳ期の1段階に位置づけておきたい。また、E-187蓋は口縁部外面上方につば状のせり出しがみられ、ツマミ部分が欠損しているが、藤原宮東方官衙S B3226柱抜取り穴出土のものと類似している（註15）。この上器は「藤原宮期の特色をもち、この建物の廃絶時期を示す。」とされており、他の須恵器蓋類がおむね、7世紀末葉から8世紀前葉と考えられることと矛盾しない。また、藤原宮S B3226出土の多様な蓋類はS I 390出土の蓋類と極めて似かよった様相を示しており、組成のうえからも共通性が認められる。

S E 429、S I 390の土器群はいづれも遺構の廃絶に伴うものとみられるが、年代は7世紀末葉から8世紀前葉と考えられることから、第4段階の遺構群の年代もその時期とみておきたい。この第4段階遺構群は推定方四町の外郭を持つⅡ期官衙を構成するものである。

〔第5段階〕 S D 273 溝跡（註16）、S E 397 井戸跡

この段階の遺構は出土遺物が極めて少なく、年代決定の資料に欠けるが、古代にまで遡らないものであり、中世ないしはそれ以降と考えられる。

以上のように第35次調査により発見された遺構は大別すれば、5つの段階にわけられ、第1段階は年代不明（第24次調査で5世紀前後とした第1段階遺構と併行するか否か不明）、第2段階は7世紀前半を中心とする年代、第3段階は7世紀後半、第4段階は7世紀末葉から8世紀前葉、第5段階は中世ないしはそれ以上である。これらの5段階のうち第3段階がⅠ期官衙、第4段階がⅡ期官衙にあてることは前述した通りであるが、今次調査で、Ⅰ期官衙の遺構群がさらに北に続いており、官衙の範囲が北に拡がっていることが判明し、官衙ブロックの一端をつかむことができた。また、Ⅱ期官衙の外郭北辺は不明で、推定方四町内部の中心から北にかけては遺構が極めて少ないが、三町東西線より北側に堀で開まれた官衙区域が想定されるに至った。

IV 第36・39次発掘調査

第36・39次調査区は推定方二町寺域の南外側、瓦を多量に出土する諏訪神社の南東にある。

第36次調査は、仙台市福室字松堂1-11庄子忠雄氏より、郡山五丁目148-14において住宅新築のため、昭和58年1月4日付けで発掘届が提出されたので、昭和58年6月、敷地内の造構確認調査を実施した。敷地の北東角に一辺3mのほぼ方形の調査区を設定し、重機を用いて表土を排除したところ、標高8.200mで灰黄褐色粘土質シルトの地山(IV層)を検出した。この上面で黄褐色砂質シルトを堆積土とする東西方向の落ち込みを検出したが、造構とは認めがたく、自然地形と考えられる。また、調査区の北東角でピットを検出したが、年代を決定しうる資料はなかった。

第39次調査区は、第36次調査区の東20mの地点で、仙台市八木山香澄町25-2畠中実氏より、郡山五丁目149-2において住宅新築のため、昭和57年11月8日付けで発掘届が提出されたので、昭和58年9月、敷地内の造構確認調査を実施した。敷地の南西角に一辺4mのほぼ方形の調査区を設定し、重機を用いて表土を排除したところ、標高7.900mから8.200mにかけて南に緩やかに落ち込む、にぶい黄褐色砂質シルトの地山(III層)面を検出した。この上面で溝跡3条、ピット6を検出し、土師器甕・須恵器甕・壺、瓦を出土したが、時期は不明である。

これらの調査区は、郡山遺跡の推定範囲の南限にあたり、この南側は標高差にして1m程度段差があり、水田として利用されている。今年の調査結果と考え合わせると旧河道と推定され、耕作等による地山の損壊は著しくはないものの、官衙に関わる造構等の存在する可能性は低いと考えられる。



第23図 第36・39次調査区位置図

V 第37次発掘調査

仙台市土手内三丁目4-7 豊川種彦氏より、郡山二丁目37-25において住宅建築のため、昭和58年7月9日付けで発掘届が提出されたので、昭和58年7月、敷地内の遺構確認調査を実施した。

調査区は、推定方四町官衙域内、南辺より北に3町、推定西辺より東に約半町の位置にあたり、第35次発掘調査で検出した S A 386 一本柱列、S D 385 溝跡の西側延長線上である。

敷地の中央に東西3m、南北10mのトレンチを設定し、重機を用いて表土を排除し始めたところ、盛土の土量が著しく多く、敷地の制約もあって小面積の調査にとどまった。

旧水田耕作土の下、標高9,200mの黒色粘土質シルト層（Ⅲ層）上面、さらに20cm下のグラウシ化した灰色粘土質シルト層（Ⅳ層）上面で精査を行ったが、遺構・遺物を検出することはできなかった。

旧水田床土底面の標高は、第35次調査で検出した遺構の基底面よりも低く、大規模な土採りにより、遺構等は削平されているものと考えられる。



第24図 第37次調査区位置図

VI 第38次発掘調査

1. 調査経過

仙台市郡山五丁目8-13東北発電工業株式会社
仙台事業所長小川茂夫氏より、郡山五丁目151-3において倉庫増築のため、昭和58年1月11日付
けで発掘届が提出されたので、昭和58年8月、敷地内の遺構確認調査を実施した。

調査区は、推定方二町寺城内南地区で、基壇建物跡を検出した昭和56年度第12次調査区の南東60m、木筒を出土した第15次調査の南40mの位置にあたる。

敷地の北側に幅10m、長さ15mで東西方向の調査区を設定し、盛土・旧耕作土を重機で排除した。

IV層黄褐色シルト上面で遺構検出を行ったが、遺構を明瞭に検出できなかったので、V層褐色シルト（地山）上面で精査を行い、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、溝跡、ビットを検出した。

2. 発見遺構

発見された遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、土壙8基、溝跡5条、ビット108である。

S I 458 住居跡 一辺5mの方形のプランと考えられるが、南半は調査区外で、全形・規模は不明である。壁は残存高10~20cmで、壁に沿って幅15~50cm、深さ3~28cmの周溝が巡る。床面は貼床がほぼ全域にみられる。北西壁のやや北寄りにカマドを有し、長さ1.6m、幅25~30cm、深さ10cmの煙道がみられ、先端部の煙出しあは円形で直径25cm、深さ25cmのビット状を呈す。カマド周辺部の床面から多量の焼土を検出した。ビットは9個検出したが、主柱穴は不明である。煙道・カマドを通る中軸線は、N-39°-Wである。S K 453 土壙、S D 461 溝跡に切られている。

S I 462 住居跡 南辺長3.2m、西辺長2.5mの隅丸方形のプランと考えられるが、北東部は調査区外で、全形・規模は不明である。壁高は10~20cm、周溝・貼床は検出しなかった。東壁南寄りにカマドを有し、両側に袖石を配し、左袖外側から煙道にかけて巻き作り平瓦を据え立てている。右袖はS K 460 土壙に切られているが、残存する瓦の状況から左袖と同様の構造であったと考えられ、カマドの構築に瓦を転用材として利用している。また燃焼部からは天



第25図 第38次調査区位置図

井部に施設したと考えられる凝灰岩切石を出土した。煙道はカマド奥壁から立ち上がり、長さ1.3m、深さ10cm、先端部の煙出しが円形で直径30cm、深さ20cmのピット状を呈す。柱穴は全く検出しなかった。煙道・カマドを通る中軸線は、E-2°-Sである。S I 463 住居跡を切り、SK 460 土壙に切られている。

S I 463 住居跡 一辺約5mの隅丸方形のプランと考えられるが、西コーナーは調査区外である。壁高は10~20cm、壁に沿って幅10~30cm、深さ3~10cmの周溝が巡る。床面には貼床が全域にみられ、北東壁中央にカマドを有し、長さ1.8m、幅25~50cm、深さ15cmの煙道がみられ、先端部の煙出しが円形で直径40cm、深さ30cmのピット状を呈す。主柱穴は4個検出され、柱穴掘り方は不整円形で、直径60~80cm、底面からの深さは40~70cmである。煙道・カマドを通る中軸線は、E-33°-Nである。また、北西壁中央部付近の貼床の下部からは1×1.2m程の範囲で炭・焼土が分布し、旧カマドの存在も考えられる。S I 462 住居跡、SK 460・465 土壙、SD 457 溝跡に切られている。

S B 454 建物跡 東西3間以上(柱間寸法160~190cm)、南北1間以上(柱間寸法190cm)、東西柱列方向はE-30°-Sである。柱穴掘り方は一辺40~70cmの不整形で、深さ30~50cm、柱痕跡は直径20cm前後である。

S K 448 土壙 平面形は長径1.7×短径1.4m以上の不整円形、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色・暗褐色シルトで、底面及び北側上部の一部に黄褐色シルトが混入する。土師器の壺・甕片、須恵器、鉄滓などを出土している。

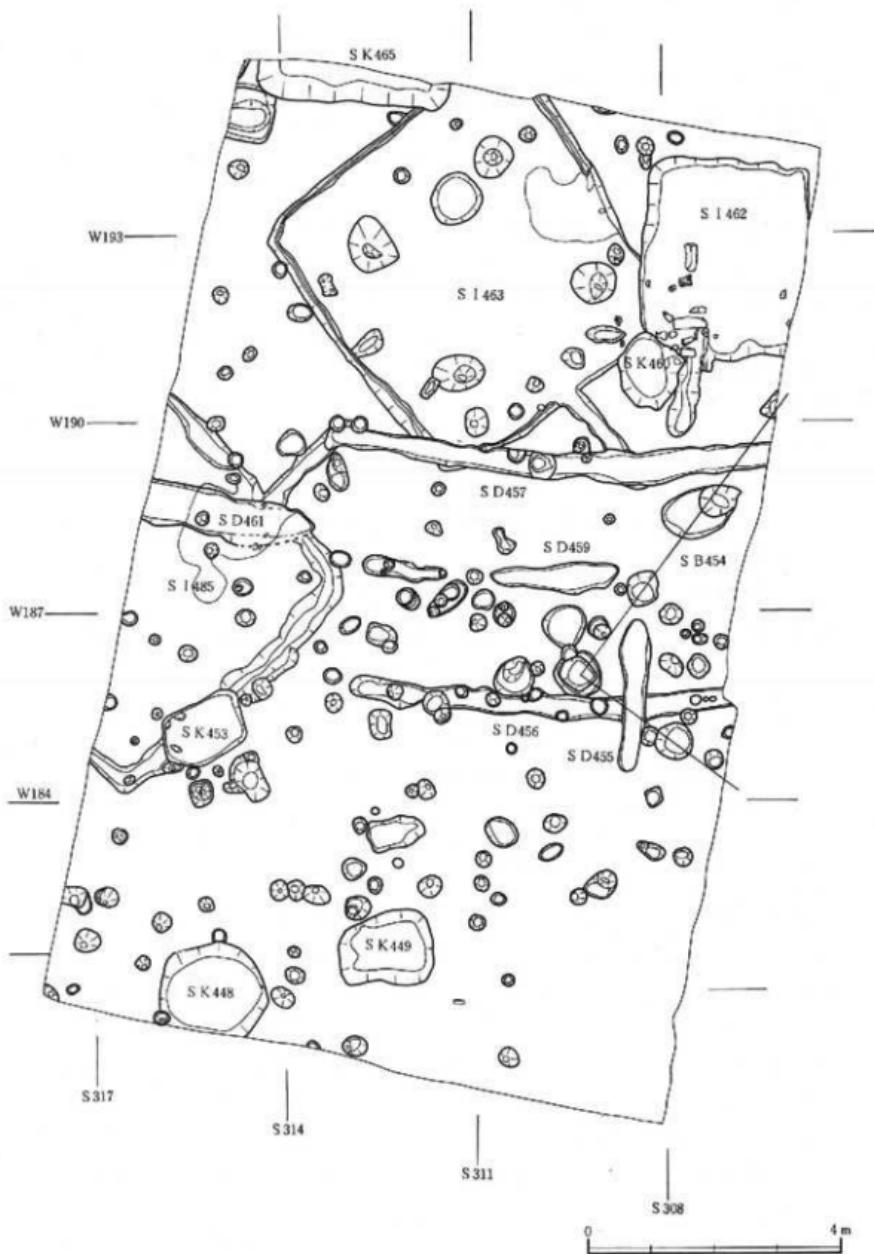
S K 449 土壙 平面形は長径1.5×短径1.3mの不整円形で、深さ約36cm、底面は平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は暗褐色・黒褐色シルトで、底面附近にブロック状の炭化物を含む。

S K 450 土壙 平面形は1辺0.5m程の不整形で、深さ約15cm、底面は平坦で壁はほぼ直立している。堆積土は黄褐色・褐色シルトである。

S K 451 土壙 平面形は長径0.6×短径0.8mの不整形、深さ約28cmである。底面はほぼ平坦で、壁は西辺で直立し東辺でゆるやかに立ち上がる。堆積土は黒褐色・褐色シルトである。

S K 453 土壙 平面形は1.3×0.9mの不整方形で、深さ約20cm、底面はほぼ平坦である。壁は直立気味に立ち上がり、火熱の影響で底面全域にかけて焼きしまりが見られる。壁面は厚さ3cm、褐色灰に固く焼きしまる。壁面は人為的に粘土を貼り廻したものと思われ、何等かの焼成造構とみられる。

S K 460 土壙 平面形は長径1.1×短径1mの不整形、底面はやや凹凸があり、深さ約18cm、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は赤黒色シルト・黒褐色粘土質シルト。全層にわたって、焼土、炭化物を含むが、殊に中層に多量の炭化物を含む。土師器甕片、鉄滓の細片、土製品を



第26回 第38次調査区全体図

出土している。S I 462 住居跡と S I 463 住居跡を切っている。

S K 464 土壙 調査区南西コーナー附近にかかり、全形・規模は不明である。底面はほぼ平坦、深さ約44cmである。壁は直立している。土師器、平瓦の細片、鉄滓を出土している。S K 465 上壤に切られている。

S K 465 土壙 調査区の南西角で検出したが、全形・規模は不明である。南北3.3m以上、東西0.7m以上で、深さ30~60cm、断面形は舟底形を呈している。堆積土は下層に褐灰色ないし灰黄褐色の粘土質シルト、土層には黒褐色シルトとぶい黄橙色シルトがブロック状に混入している。東辺方向はN-2°-Eである。S I 463 住居跡、S K 464 土壙を切っている。

S D 455 溝跡 上幅30~50cm、長さ2.4m以上、深さ0~16cm、方向はE-1°-N前後である。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は暗褐色・褐色シルトである。S D 456 溝跡とほぼ直交している。

S D 456 溝跡 上幅30~44cm、長さ5.9m以上、深さ約10cm、方向はN-0°-S前後、底面はほぼ平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は黒褐色・黄褐色粘土質シルトである。S D 455 溝跡に切られている。

S D 457 溝跡 上幅30~60cm、長さ7.1m以上で更に調査区北側に伸びる。深さ約6cm、方向はN-0°-S前後である。底面は平坦、壁はほぼ直立する。堆積土は褐色シルト・黒褐色粘土質シルトである。土師器、鉄滓を出土している。S I 463 住居跡と S I 458 住居跡を切っている。S D 459 溝跡と S D 456 溝跡にはほぼ平行する。

S D 459 溝跡 上幅20~50cm、長さは一部削平されているが3.4m以上で、深さ約8cm、方向はN-0°-S前後である。底面は平坦で壁は直立している。堆積土は黒褐色・暗褐色粘土質シルト・黄褐色シルトである。S D 457 溝跡と S D 456 溝跡に平行である。

S D 456・S D 457・S D 459の3本の溝跡はほぼ南北に平行で、各々の心々間隔は、S D 457とS D 458は約1.8m、S D 457とS D 456は約2.0mである。

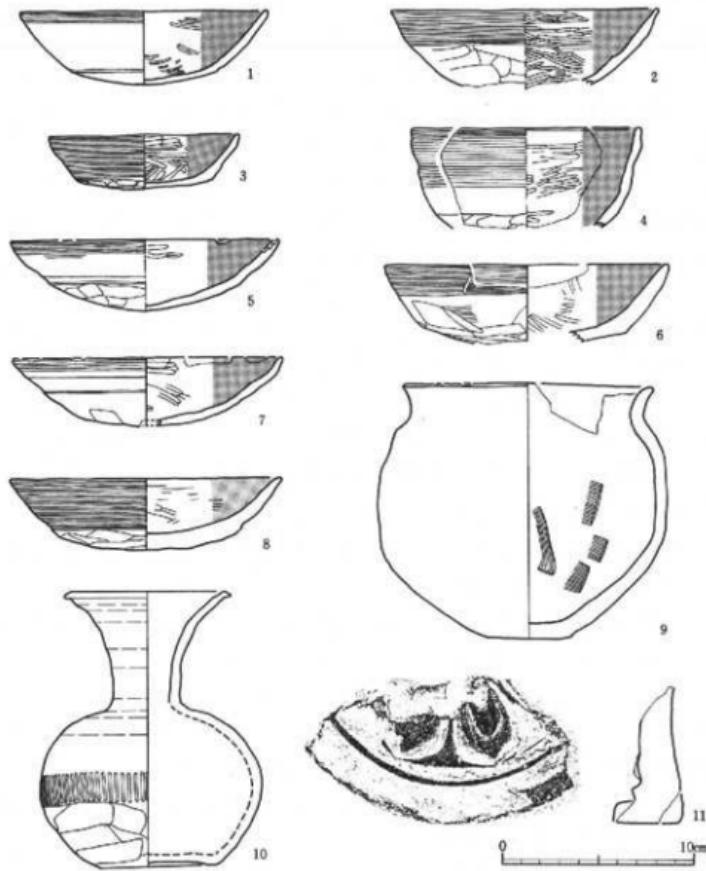
S D 461 溝跡 上幅70~74cm、長さ2.7m以上、深さ約30cm、方向はN-0°-S前後である。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は灰黄褐色・ぶい灰黄褐色シルト、酸化鉄をブロック状に含む。S I 458 住居跡を切っている。

3. 出土遺物

第38次調査による出土遺物は、土師器、須恵器、瓦、石製品、金属製品などである。S I 458・462・463 住居跡、S K 448 土壙からは比較的多くの遺物が出土した。

以下、遺構ごとに出土遺物を略述する。

S I 458 住居跡 土師器壺・甕、須恵器甕、鶴尾、鉄滓を出土した。カマド付近の床面および周溝堆積土から出土した七輪器C-402・403壺(第27図1・2)は、内面ヘラミガキ・黒



番号	測量系名	種類	目別	出土遺物	断面	外観測定			内観測定			底面形状	縦深	下限距離			
						II	III	IV	底面	底深	口縁面						
1	C-42	土器	H	S1448	ヨコナメ	—	—	—	ハラカヌリ型	—	ハラカヌリ	—	3.7	13.0	5	60-1	
2	C-43	土器	H	S1448 テ-7	ヨコナメ	ハラカヌリ	—	—	ハラカヌリ	ハラカヌリ	—	3.9	14.0	+	5	60-4	
3	C-43	土器	H	S1448 ハマツヒロ	ヨコナメ	ヨコナメ	ヨコナメ	—	ハラカヌリ	ハラカヌリ	—	3.8	10.0	—	5	60-3	
4	C-43	土器	H	S1448	ヨコナメ	ヨコナメ	ハラカヌリ	—	ハラカヌリ	ハラカヌリ	—	4.0	12.5	20%	5	60-	
5	C-39	土器	H	S1448 横穴	ヨコナメ	—	—	—	ハラカヌリ	—	ハラカヌリ	—	3.7	14.0	5	59-10	
6	C-39	土器	H	S1448	縦縫合	ヨコナメ	ハラカヌリ	—	ハラカヌリ	ハラカヌリ	—	4.1	15.0	40%	5	59-11	
7	C-39	土器	H	S1449	縦縫合	ヨコナメ	ハラカヌリ	—	ハラカヌリ	ハラカヌリ	—	3.6	14.2	40%	5	59-9	
8	C-40	土器	H	S1449	横縫合	ヨコナメ	ハラカヌリ	—	ハラカヌリ	ハラカヌリ	—	3.5	7.15	40%	5	59-2	
9	C-39	土器	H	S1449	縦縫合	ヨコナメ	ハラカヌリ	—	ヨコナメ	ハラカヌリ	—	13.4	13.0	4.4	5	59-12	
10	E-143	石器	B	S1449 カマド石器	ヨコナメ	—	—	—	ハラカヌリ	—	ハラカヌリ	—	19.5	8.8	6.5	5	60-5
11	F-26	土器	A,B	S1449	縦縫合	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	60-6

第27図 第38次調査区出土遺物

色処理、外面口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラケズリが施されている。鶴尾H-7は、カマド燃焼部付近から出土した3点の小破片である。部位のわかるものはなく、無文、灰白色で厚さ2～3cmを計る。昭和56年度第12次調査区出土の鶴尾H-1と胎土・焼成が類似している。

S I 462 住居跡 土師器壺・甕、須恵器蓋、瓦、刀子、鉄滓、小玉石を出土した。底面から出土した土師器C-401壺（第27図3）は、ほぼ完形で、内面ヘラミガキ・黒色処理、外面口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラケズリが施されている。カマド右袖外側から出土した須恵器E-183蓋（第27図10）は、口縁部をわずかに欠損しているがほぼ完形で、体部中央に棒状に叩き目が這り、体部下半にはヘラケズリが施されている。F-26軒丸瓦（第28図11）は、検出面から出土した瓦当1/4程の破片で、復元直徑19cm、弁幅3cmである。F-28丸瓦（第28図2）は、カマド内堆積土から出土した破片で、凸面にヘラ書きと思われる痕跡がみられる。G-17平瓦（第28図1）は、カマド左袖から煙道にかけて施設してあった転用材で、凸面は繩叩き日の後ヘラケズリ、凹面は模様が明瞭な桶巻作りで、一部ヘラケズリされている。鉄製品N-6刀子は、堆積土1層から出土したが、全体的に錆化が進み、現存長5.7cm、身幅2cmを計る。

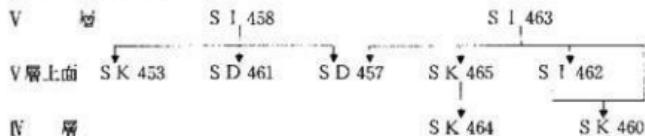
S I 463 住居跡 土師器壺・高壺・甕、須恵器蓋、鐵滓を出土している。土師器C-396甕（第27図9）は、床面から出土したが、磨滅が著しく、器面調整は不明である。土師器C-397・398・399・400壺（第27図7・6・5・4）は床面、柱穴および堆積土から出土した。いずれも内面ヘラミガキ・黒色処理、外面ヨコナデ・ヘラケズリを施している。

S K 448 土壌 土師器C-404壺（第27図8）は体部下半に段を有し、丸底で、内面黒色処理されている。土師器C-405壺の口縁部小片が出土している。

4. まとめ

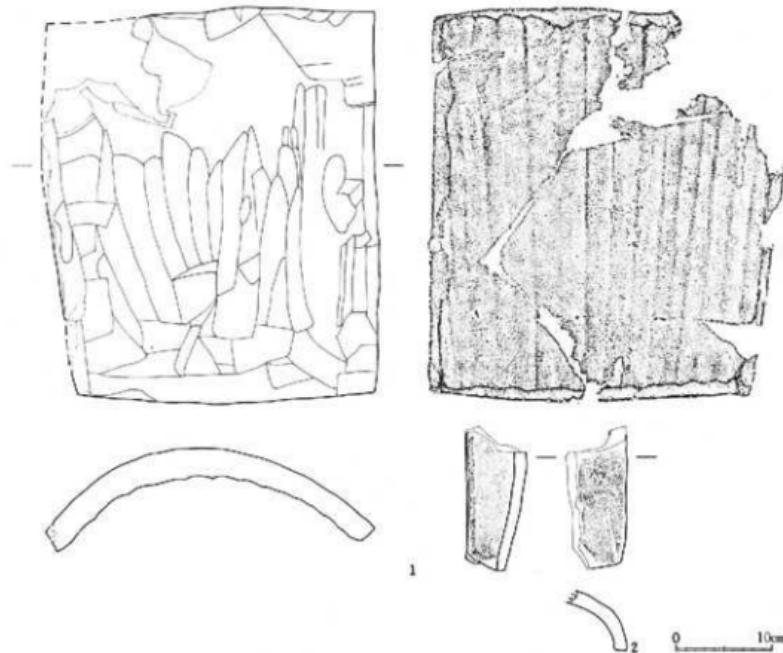
推定方二町寺域に隣接する調査は、東西長32mにも及ぶ基壇跡を発見した第12次調査や、多くの遺構を発見し、木簡や写経の際に使用したと考えられる『定本』を出土した第15次調査等がある。今回の調査区は、第15次調査区の南40m、推定寺域内南東部にあたり、寺院に関わる遺構等の存在が推測された個所である。

現況は東北電力株の所有地であるが、以前は畠地で、耕作上の下、地山（V層）上面で遺構を検出した。遺構の変遷は、



となる。S I 458とS I 463は同時性が検証できないが、規模・方向・出土遺物も類似しており、出土遺物からみてⅠ期古衙期に属する。またこの住居跡に続くS I 462は、瓦を転用材と

して利用しており、第15次調査区 S I 143 と類似性がみられ、官街遺構群の広がりが確認された、郡山遺跡最南の調査地点となった。



番号	空筒部分	横径	刃形	底土 遺構	MSL	内 面 構 造			外 面 構 造			通 量 (ml)	残 存 状 態	参考 文献	
						内 縦 幅	外 縦 幅	内 横 幅	外 横 幅	前 縫	後 縫	刃 縫			
1	口-17	丸	平丸	S I 432 5マリ	(内面) 布目	11.6	12.0	8.5	9.0	1.5	1.5	0.7	22.1	良	II-7
2	口-28	丸	丸丸	S I 432 5マリ	(内面) ヘラナア	11.6	12.0	8.5	9.0	1.5	1.5	0.7	36.6	良	II-8

第28図 第38次調査区出土遺物

VII 第40次発掘調査

仙台市郡山三丁目16-14、堀江登・貞子氏より、
郡山三丁目128-57において住宅新築のため、昭
和58年10月20日付で発掘届が提出されたので、昭
和58年10月、敷地内の遺構確認調査を実施した。

調査区は、推定方四町官衙城の中央、やや西寄
りにあたり、竪穴住居跡、掘立柱建物跡等の官衙
群の存在が予測された地点である。

敷地の南側に、東西5m、南北4mの調査区を
設定し、重機を用いて盛土、旧耕作土を排除した
ところ、標高9,200mでにぶい黄橙色砂質粘土の
地山(IV層)を検出した。この上面で調査区内を
北東方向に、褐色ないし明褐色の砂を堆積土とす
る落ち込みを検出したが、人為的な遺構とは認めがたく、旧河道の立ち上がりと考えられる。
出土遺物はなく、時期は不明である。

この調査区近辺においても、大量の土採りが行われた形跡がみられ、既に遺構等は削平され
ているものと思われる。



第29図 第40次調査区位置図

VII 第41次発掘調査

1. 調査経過

第41次調査は昭和56年度の第12次、第15次調査で明らかになった推定方二町寺域の東側に位置し、推定方四町宮衙城南東前面にあたる。また昨年度の第34次調査D区の東隣りである。第34次調査においては、竪穴住居跡、溝跡、土壙などが検出されたが、A～D区までのトレンチ間では遺構の検出状況に違いが見られた。南のA区では遺構の検出面が重層構造を示し、竪穴住居跡などが検出されている。それに対し北側のB～D区では遺構の検出面は單一面で、溝跡のみ検出された。このようなことから推定方四町宮衙城南面の中でも推定方二町寺域の北東部において、掘立柱建物跡や竪穴住居跡が存在しないのかどうかを明らかにするため20×26mの調査区を設定し発掘調査を実施した。

調査区の現況は標高8.8mの水田で、畠地のような天地返し等の搅乱はなく、現地表面より30cm下のⅡ層下面で遺構を検出した。尚、この調査は遺構の存在の有無を確認するのが目的であったため、遺構確認の他はSD 476溝跡の一部を掘り下げるにとどめた。

2. 発見遺構と出土遺物

発見された遺構は、溝跡5条、溝状遺構2条、土壙6基、ピットなどである。

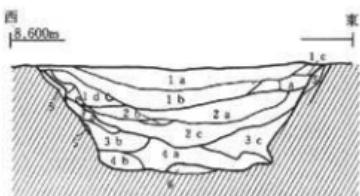
SD 476 溝跡 長さ26m以上、上幅1.5～2.5m、下幅1.4～1.6m、深さ0.7～1m、横断面形は逆台形を呈している。方向はN-0°～Eで、堆積土は4層に分けられる。出土遺物には、少量の土師器片、須恵器片がある。

SD 477 溝跡、SD 478 溝状遺構を切り、SD 479 溝跡に切られている。

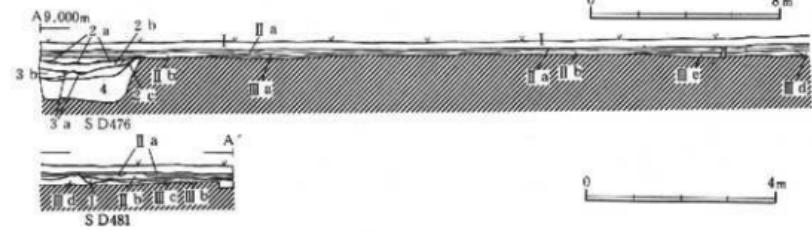
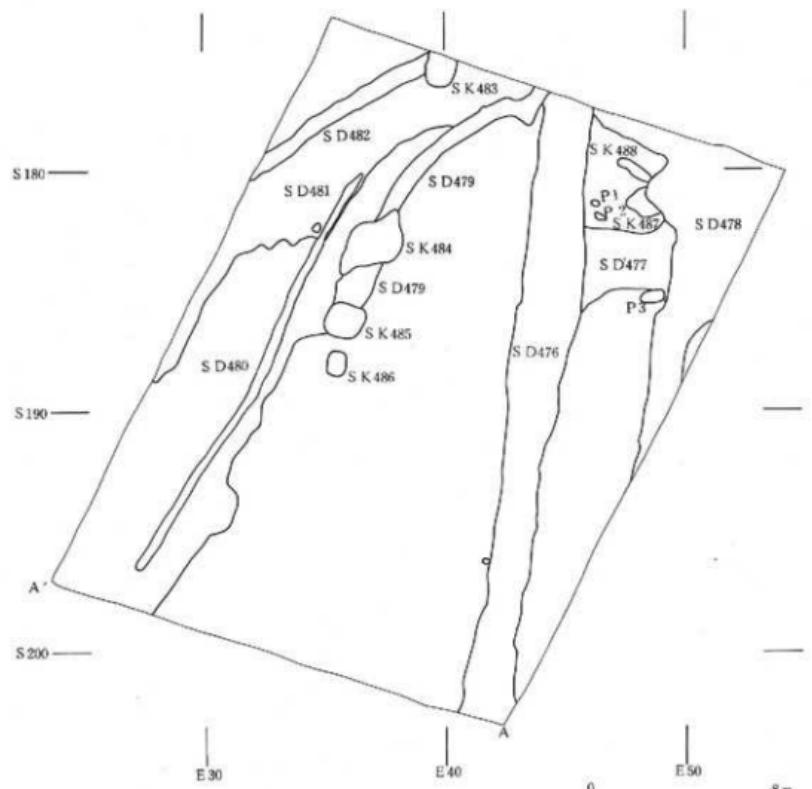
その他 SD 477、479、481、482 溝跡、478、480 溝状遺構、SK 483～488 土壙を検出している。



第30図 第41次調査区位置図



層	名	性質	厚さ	層	名	性質	厚さ
1	SD 476	泥質	0.5	1	SD 476	泥質	0.5
2	SD 476	泥質	0.5	2	SD 476	泥質	0.5
3	SD 476	泥質	0.5	3	SD 476	泥質	0.5
4	SD 476	泥質	0.5	4	SD 476	泥質	0.5
5	SD 476	泥質	0.5	5	SD 476	泥質	0.5
6	SD 476	泥質	0.5	6	SD 476	泥質	0.5
7	SD 476	泥質	0.5	7	SD 476	泥質	0.5
8	SD 476	泥質	0.5	8	SD 476	泥質	0.5
9	SD 476	泥質	0.5	9	SD 476	泥質	0.5
10	SD 476	泥質	0.5	10	SD 476	泥質	0.5
11	SD 476	泥質	0.5	11	SD 476	泥質	0.5
12	SD 476	泥質	0.5	12	SD 476	泥質	0.5
13	SD 476	泥質	0.5	13	SD 476	泥質	0.5
14	SD 476	泥質	0.5	14	SD 476	泥質	0.5
15	SD 476	泥質	0.5	15	SD 476	泥質	0.5
16	SD 476	泥質	0.5	16	SD 476	泥質	0.5
17	SD 476	泥質	0.5	17	SD 476	泥質	0.5
18	SD 476	泥質	0.5	18	SD 476	泥質	0.5
19	SD 476	泥質	0.5	19	SD 476	泥質	0.5
20	SD 476	泥質	0.5	20	SD 476	泥質	0.5
21	SD 476	泥質	0.5	21	SD 476	泥質	0.5
22	SD 476	泥質	0.5	22	SD 476	泥質	0.5
23	SD 476	泥質	0.5	23	SD 476	泥質	0.5
24	SD 476	泥質	0.5	24	SD 476	泥質	0.5
25	SD 476	泥質	0.5	25	SD 476	泥質	0.5
26	SD 476	泥質	0.5	26	SD 476	泥質	0.5
27	SD 476	泥質	0.5	27	SD 476	泥質	0.5
28	SD 476	泥質	0.5	28	SD 476	泥質	0.5
29	SD 476	泥質	0.5	29	SD 476	泥質	0.5
30	SD 476	泥質	0.5	30	SD 476	泥質	0.5
31	SD 476	泥質	0.5	31	SD 476	泥質	0.5
32	SD 476	泥質	0.5	32	SD 476	泥質	0.5
33	SD 476	泥質	0.5	33	SD 476	泥質	0.5
34	SD 476	泥質	0.5	34	SD 476	泥質	0.5
35	SD 476	泥質	0.5	35	SD 476	泥質	0.5
36	SD 476	泥質	0.5	36	SD 476	泥質	0.5
37	SD 476	泥質	0.5	37	SD 476	泥質	0.5
38	SD 476	泥質	0.5	38	SD 476	泥質	0.5
39	SD 476	泥質	0.5	39	SD 476	泥質	0.5
40	SD 476	泥質	0.5	40	SD 476	泥質	0.5
41	SD 476	泥質	0.5	41	SD 476	泥質	0.5
42	SD 476	泥質	0.5	42	SD 476	泥質	0.5
43	SD 476	泥質	0.5	43	SD 476	泥質	0.5
44	SD 476	泥質	0.5	44	SD 476	泥質	0.5
45	SD 476	泥質	0.5	45	SD 476	泥質	0.5
46	SD 476	泥質	0.5	46	SD 476	泥質	0.5
47	SD 476	泥質	0.5	47	SD 476	泥質	0.5
48	SD 476	泥質	0.5	48	SD 476	泥質	0.5
49	SD 476	泥質	0.5	49	SD 476	泥質	0.5
50	SD 476	泥質	0.5	50	SD 476	泥質	0.5
51	SD 476	泥質	0.5	51	SD 476	泥質	0.5
52	SD 476	泥質	0.5	52	SD 476	泥質	0.5
53	SD 476	泥質	0.5	53	SD 476	泥質	0.5
54	SD 476	泥質	0.5	54	SD 476	泥質	0.5
55	SD 476	泥質	0.5	55	SD 476	泥質	0.5
56	SD 476	泥質	0.5	56	SD 476	泥質	0.5
57	SD 476	泥質	0.5	57	SD 476	泥質	0.5
58	SD 476	泥質	0.5	58	SD 476	泥質	0.5
59	SD 476	泥質	0.5	59	SD 476	泥質	0.5
60	SD 476	泥質	0.5	60	SD 476	泥質	0.5
61	SD 476	泥質	0.5	61	SD 476	泥質	0.5
62	SD 476	泥質	0.5	62	SD 476	泥質	0.5
63	SD 476	泥質	0.5	63	SD 476	泥質	0.5
64	SD 476	泥質	0.5	64	SD 476	泥質	0.5
65	SD 476	泥質	0.5	65	SD 476	泥質	0.5
66	SD 476	泥質	0.5	66	SD 476	泥質	0.5
67	SD 476	泥質	0.5	67	SD 476	泥質	0.5
68	SD 476	泥質	0.5	68	SD 476	泥質	0.5
69	SD 476	泥質	0.5	69	SD 476	泥質	0.5
70	SD 476	泥質	0.5	70	SD 476	泥質	0.5
71	SD 476	泥質	0.5	71	SD 476	泥質	0.5
72	SD 476	泥質	0.5	72	SD 476	泥質	0.5
73	SD 476	泥質	0.5	73	SD 476	泥質	0.5
74	SD 476	泥質	0.5	74	SD 476	泥質	0.5
75	SD 476	泥質	0.5	75	SD 476	泥質	0.5
76	SD 476	泥質	0.5	76	SD 476	泥質	0.5
77	SD 476	泥質	0.5	77	SD 476	泥質	0.5
78	SD 476	泥質	0.5	78	SD 476	泥質	0.5
79	SD 476	泥質	0.5	79	SD 476	泥質	0.5
80	SD 476	泥質	0.5	80	SD 476	泥質	0.5
81	SD 476	泥質	0.5	81	SD 476	泥質	0.5
82	SD 476	泥質	0.5	82	SD 476	泥質	0.5
83	SD 476	泥質	0.5	83	SD 476	泥質	0.5
84	SD 476	泥質	0.5	84	SD 476	泥質	0.5
85	SD 476	泥質	0.5	85	SD 476	泥質	0.5
86	SD 476	泥質	0.5	86	SD 476	泥質	0.5
87	SD 476	泥質	0.5	87	SD 476	泥質	0.5
88	SD 476	泥質	0.5	88	SD 476	泥質	0.5
89	SD 476	泥質	0.5	89	SD 476	泥質	0.5
90	SD 476	泥質	0.5	90	SD 476	泥質	0.5
91	SD 476	泥質	0.5	91	SD 476	泥質	0.5
92	SD 476	泥質	0.5	92	SD 476	泥質	0.5
93	SD 476	泥質	0.5	93	SD 476	泥質	0.5
94	SD 476	泥質	0.5	94	SD 476	泥質	0.5
95	SD 476	泥質	0.5	95	SD 476	泥質	0.5
96	SD 476	泥質	0.5	96	SD 476	泥質	0.5
97	SD 476	泥質	0.5	97	SD 476	泥質	0.5
98	SD 476	泥質	0.5	98	SD 476	泥質	0.5
99	SD 476	泥質	0.5	99	SD 476	泥質	0.5
100	SD 476	泥質	0.5	100	SD 476	泥質	0.5
101	SD 476	泥質	0.5	101	SD 476	泥質	0.5
102	SD 476	泥質	0.5	102	SD 476	泥質	0.5
103	SD 476	泥質	0.5	103	SD 476	泥質	0.5
104	SD 476	泥質	0.5	104	SD 476	泥質	0.5
105	SD 476	泥質	0.5	105	SD 476	泥質	0.5
106	SD 476	泥質	0.5	106	SD 476	泥質	0.5
107	SD 476	泥質	0.5	107	SD 476	泥質	0.5
108	SD 476	泥質	0.5	108	SD 476	泥質	0.5
109	SD 476	泥質	0.5	109	SD 476	泥質	0.5
110	SD 476	泥質	0.5	110	SD 476	泥質	0.5
111	SD 476	泥質	0.5	111	SD 476	泥質	0.5
112	SD 476	泥質	0.5	112	SD 476	泥質	0.5
113	SD 476	泥質	0.5	113	SD 476	泥質	0.5
114	SD 476	泥質	0.5	114	SD 476	泥質	0.5
115	SD 476	泥質	0.5	115	SD 476	泥質	0.5
116	SD 476	泥質	0.5	116	SD 476	泥質	0.5
117	SD 476	泥質	0.5	117	SD 476	泥質	0.5
118	SD 476	泥質	0.5	118	SD 476	泥質	0.5
119	SD 476	泥質	0.5	119	SD 476	泥質	0.5
120	SD 476	泥質	0.5	120	SD 476	泥質	0.5
121	SD 476	泥質	0.5	121	SD 476	泥質	0.5
122	SD 476	泥質	0.5	122	SD 476	泥質	0.5
123	SD 476	泥質	0.5	123	SD 476	泥質	0.5
124	SD 476	泥質	0.5	124	SD 476	泥質	0.5
125	SD 476	泥質	0.5	125	SD 476	泥質	0.5
126	SD 476	泥質	0.5	126	SD 476	泥質	0.5
127	SD 476	泥質	0.5	127	SD 476	泥質	0.5
128	SD 476	泥質	0.5	128	SD 476	泥質	0.5
129	SD 476	泥質	0.5	129	SD 476	泥質	0.5
130	SD 476	泥質	0.5	130	SD 476	泥質	0.5
131	SD 476	泥質	0.5	131	SD 476	泥質	0.5
132	SD 476	泥質	0.5	132	SD 476	泥質	0.5
133	SD 476	泥質	0.5	133	SD 476	泥質	0.5
134	SD 476	泥質	0.5	134	SD 476	泥質	0.5
135	SD 476	泥質	0.5	135	SD 476	泥質	0.5
136	SD 476	泥質	0.5	136	SD 476	泥質	0.5
137	SD 476	泥質	0.5	137	SD 476	泥質	0.5
138	SD 476	泥質	0.5	138	SD 476	泥質	0.5
139	SD 476	泥質	0.5	139	SD 476	泥質	0.5
140	SD 476	泥質	0.5	140	SD 476	泥質	0.5
141	SD 476	泥質	0.5	141	SD 476	泥質	0.5
142	SD 476	泥質	0.5	142	SD 476	泥質	0.5
143	SD 476	泥質	0.5	143	SD 476	泥質	0.5
144	SD 476	泥質	0.5	144	SD 476	泥質	0.5
145	SD 476	泥質	0.5	145	SD 476	泥質	0.5
146	SD 476	泥質	0.5	146	SD 476	泥質	0.5
147	SD 476	泥質	0.5	147	SD 476	泥質	0.5
148	SD 476	泥質	0.5	148	SD 476	泥質	0.5
149	SD 476	泥質	0.5	149	SD 476	泥質	0.5
150	SD 476	泥質	0.5	150	SD 476	泥質	0.5
151	SD 476	泥質	0.5	151	SD 476	泥質	0.5
152	SD 476	泥質	0.5	152	SD 476	泥質	0.5
153	SD 476	泥質	0.5	153	SD 476	泥質	0.5
154	SD 476	泥質	0.5	154	SD 476	泥質	0.5
155	SD 476	泥質	0.5	155	SD 476	泥質	0.5
156	SD 476	泥質	0.5	156	SD 476	泥質	0.5
157	SD 476	泥質	0.5	157	SD 476	泥質	0.5
158	SD 476	泥質	0.5	158	SD 476	泥質	0.5
159	SD 476	泥質					



第32回 第41次調査区全体図

るが、遺構確認のみにとどめたため遺構の詳細や年代等については不明である。

3. ま と め

第41次調査区は、推定方三町寺域の東側、推定方四町官衙域の南側に位置し、昭和57年度の第34次調査D区の東隣りである。調査の結果、第34次調査B～D区とほぼ同じ様に水田下30cmほどで遺構を確認した。これらの遺構のうちSD476溝跡は、方向がN-0°～Eで真北線に沿っており、堆積土中から少量ではあるが土師器、須恵器片を出土しそれ以降の遺物を全く含まないことから、官衙と時期を同じくする古代の遺構と考えられる。ただしこのSD476溝跡が地割の区画溝や道路の側溝部分となるなどについては、周辺部における調査成果の蓄積を待って検討したい。

またこの調査区からは、掘立柱建物跡や堅穴住居跡が検出されなかった。のことから第34次調査B～D区と合わせて推定方四町官衙域の南面東半部においては、官衙域内や推定方三町寺域あるいはその周辺の一部とは、遺構のあり方に違いが見られる。これは官衙且湖の段階での官衙域内あるいは寺城以外の使われ方がどうであったのかという問題を提起するものであるが、現状では官衙域あるいは寺城以外における調査箇所が少ないため、今後の課題としておきたい。

IV 第42次発掘調査

1. 調査経過

仙台市郡山二丁目11-17、菊地彦三郎氏より郡山六丁目212-2において、宅地造成工事に伴った擁壁工事が行われることになったため、昭和57年12月発掘届が提出された。造成予定地は推定方四町官衙域の外郭南辺上に位置し、官衙域の外郭となる S A33材木列と S D35溝跡の検出されることが予想された。そのため擁壁工事の行われる箇所に 1×28m のトレッセを南北方向に設定し調査を行った。現況は畠地となっており、耕作土を除去し現地表下50cmほどの所で、S A33材木列と S D35溝跡を検出した。尚、S A33材木列は材木の遺存状況も良好であったため、擁壁工事の工法の変更を関係者と協議し、材木が地中に現状のまま保存されるよう指導した。

2. 発見遺構・出土遺物

発見された遺構は、材木列1列、溝跡1条などである。

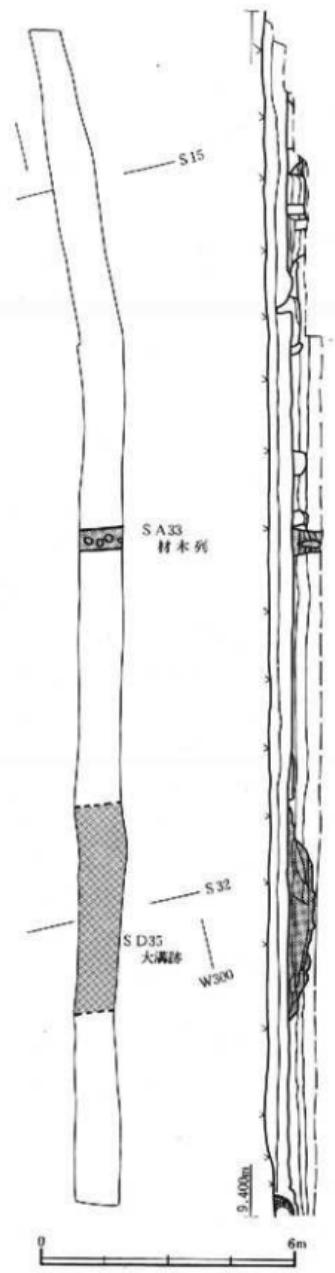
S A33材木列 第4次、7次調査区で検出した材木列と同一のもので、材木を4本検出した。材木の直径は15~25cm、心材間隔は25cmほどで掘り方のほぼ中央に並んでいる。掘り方は、検出面で幅72cm、深さ75cm以上の布掘りで、横断面形は逆台形で壁は直立気味に立ち上がる。堆積土は、大別して4層に分けられるが、その中から出土遺物等はなかった。

S D35溝跡 幅470cm~495cm、深さ60cmほどで、横断面形は扁平逆台形で壁はゆるやかに立ち上がる。溝跡の中心から材木列の中心までは870cmほどである。堆積土は、大別して5層に分けられ、最上面に灰白色火山灰が少量含まれてゐる。出土遺物は、堆積土第1層から土師器壺、甕、須恵器壺、甕の細片、第2層からC-474壺（第35図2）などがある。

また断面観察により、柱穴掘り方と、土壤、ピットなどの存在が考へられるが、その箇所が擁壁工事による削平を受けないため断面による確認にのみとどめた。よってそれらの遺構の詳細等については明らかにできなかった。出土遺物は、第51層から須恵器壺、甕片、土師器甕片、第71層から須恵器壺、甕片、E-221壺（第35図1）、第81層から土師器甕片、基本層位第1d層から土師器甕片などである。



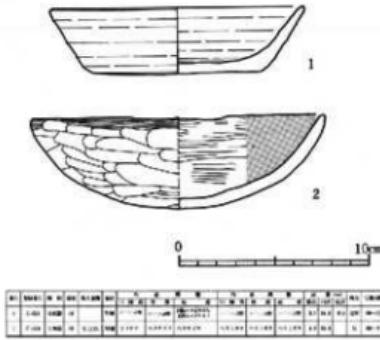
第33図 第42次調査区位置図



第34回 第42次調査区全体図

3. まとめ

第42次調査区は、推定方四町官衙域外郭南辺上に位置し、調査の結果、外郭のあり方が材木列、大溝で区画されるというこれまでの成果と同様のものであった。また、出土遺物については、昭和55年度の第7次調査区におけるS D35溝跡堆積土中から、内面が黒色処理されず、ナデ調整が施される土器類が出土しているが、本調査区内からは発見することはできなかった。



第35図 第42次調査区出土遺物

X 総括

今年度は昭和57年度第24次調査に引き続き、推定方四町Ⅱ期官術の中核部分の建物配置を明らかにするため、第35次調査を主に実施した。また、このⅡ期官術と同時共存したと考えられる推定方二町寺城東側地区の造構確認調査を第34次調査に引き続き、さらにその東側において実施した。さらにその他、住宅建築等に伴う小規模な事前調査を4ヶ所において計画していたが年度途中にさらに住宅建築に伴う届出が2件提出され、Ⅱ期官術域内では3ヶ所（第37・40・42次）、寺城内では1ヶ所（第38次）、推定寺城外南側で2ヶ所（第36・39次）の発掘調査を実施したが、第38次調査以外は調査面積が非常に狭く、造構の性格等についてまで言及するに至らなかった。

1. Ⅰ期官術の調査

Ⅰ期官術を構成する造構は第35・38次調査において発見された。特に第35次調査においては57年度第24次調査と関連する造構群が発見され、Ⅱ期官術造構との重複関係が明らかに確認され、Ⅰ期・Ⅱ期の新旧関係が明確になった。

第24次調査西区で発見の材木列・柱列・建物跡と方向を描える一連の造構群があり、材木列・柱列で囲まれた小区画の存在が考えられる。この小区画は東西51m(170尺)～54m(180尺)、南北60m(200尺)以上の南北に長い長方形区画を有し、南辺では3回の変遷が認められる。第24次調査区の結果とあわせ既に古い順からA・B・C期とするとA期は小規模な柵で、南辺に1間×1間の方形建物跡が柵を跨ぐ位置に2棟並んでおり、西辺には通り間尺9尺程度の四脚門が1棟付設されている。B期は一本柱列であるが、現段階では南辺でのみ明らかである。C期はB期と同位置に造り替えられたやや大きな柵で、南辺東寄りに北側に張り出す門が1棟付設されている。この小区画は以上の様に南辺で3期、西辺で2期（B期不明）の変遷がみられるが、東辺では小規模な柵が単期でみられる。区画施設の方向は各期・各辺、多少の違いがみられ、全体としてはやや重んでいたものと考えられる。

内部の建物群も2～4回の変遷がみられ、殆どの跡物跡・住居跡がほぼ方向や棟筋を描えるなどして南北方向をとっているが、N $30^{\circ} \sim 34^{\circ}$ Eの細かな違いがみられる。この方向のわずかな差異が必ずしも造構の変遷を反映しておらず、各小期の建物配置関係は明らかにすることことができなかった。

この区画内の建物跡は1棟を除いては建物内部に柱を持たない官術建物跡で、区画外南東部で発見された建物跡が殆ど総柱による介の建物跡であるのとは対照的である。また、区画内の総柱建物跡（第24次S B 287）も柱が細く、区画外の総柱建物跡と明らかに区別される。これらのことからもこの小区画が官術ブロックを形成していたものとみておきたい。

また、この区画内では建物跡と方向を揃えて並ぶ竪穴住居跡が5軒発見されており、建物跡と同様、官衙を構成していたものと考えられるが、その性格について今明瞭かにすることはできなかった。さらに推定寺域内での第38次調査でも同方向の住居跡が2軒発見されており、これもⅠ期官衙に関連する住居跡と考えられ、寺院遺構群の下層にⅠ期官衙遺構群が存在することが明らかであり、Ⅰ期官衙の広がりが南北方向で620m以上に及んでいることから確認された。

2. Ⅱ期官衙の調査

第35次調査において建物跡・一本柱列・竪穴住居跡・井戸跡等の遺構が発見された。一本柱列は廻とみられ、これは外郭南辺より北に三町の東西線とほぼ一致し、さらにこの廻の北側には東西線の建物跡が建て替えを含めて3棟発見された他、廻の北側には井戸跡が1基発見された。この廻は外部の区割と同様、3町線という計算された位置にあたることから、外郭の構築とほぼ同時に造られたものと考えられる。しかし、この廻は建物跡や溝との関係から北側を内側として区画している可能性が高いことから、官衙がさらに北側に広がっていることが考えられる。

第42次調査は外郭南辺にかかるもので、昭和55年度に実施した第4次調査区と第7次調査区の間に位置している。推定線上で外郭材木列と外郭大溝が発見された。

3. 推定方二町寺域の調査

寺域内および周辺の調査は3ヶ所において実施した。寺域内南東地区で行なった第38次調査では竪穴住居跡が3軒発見されたが、2軒はⅠ期官衙に関連するものと考えられるることは前述した通りであるが、1軒はこれら2軒の住居跡より新しいもので、第35次調査の第4段階に相当するとみられる。第4段階はⅡ期官衙を構成する遺構群であるが、寺院はこのⅡ期官衙と同時期に造営されたものと考えられており、この第4段階併行の住居跡もカマドに瓦を転用していることなどから、寺院に関連する住居跡とも考えられる。しかし、この第38次調査区は推定寺域内でも南東に位置し、中根御藍からはややはざれている。これら寺域内に位置する竪穴住居跡が寺域の中ではあるが、直接寺院に関連するものか、寺院廃絶後に作られたものであるのか不明であり、今後の検討課題としておきたい。

推定寺域外南側の調査では調査面積が狭く、遺構・遺物の発見は殆んどなかったが、遺構検出面である黄褐色土が安定して続いていることから、寺域が南にのびることも十分考えられる。

註

- 註1 仙台市文化財調査報告書第46集「郡山遺跡Ⅱ」仙台市教育委員会 1983 P. 9～P. 53
- 註2 註1と同 第24・31次発掘調査
- 註3 第21次調査において発見された S A 329・342一本柱列、S A 277・292材木列はN-30°-E、S A 356材木列はN-33°-E、S A 253材木列はN-34°-Eを示しているが、東西方向に延びる30°、33°基準造構と南北方向に延びる34°基準造構とが共存している可能性が極めて高い。
- 註4 S A 356材木列を含め、布振りによる棚・塀等の遺構は断面観察により、これまでの報告の中で、材の痕跡が立ちあがり地上に頭を出していたと考えられるものを棚木列、地下に埋設されたものも含め、地上につき出でていたか否か検証できなかったものを材木列、材痕跡の下部が尖っており、打ち込まれたものは杭列、として仮に区別していたが、用語の不統一・混乱をまねく恐れがあることや、柵としての遺構がいわゆる「城柵」の軍事的性格のみをあらわしているのではなく、官術であっても区画施設として柵をめぐらしていることがあることから、区画施設の構造が直ちに遺跡の性格を反映しているか否かについて棚木列・材木列・杭列としていたものを「材木を並べて造った区画施設」の総称として「材木列」と言い換えることとした。
- 註5 仙台市文化財調査報告書第43集「栗遺跡」仙台市教育委員会 1982
- 註6 註1と同。P. 39第17図7 P. 53
- 註7 千葉県地方の7・8世紀における鬼高式・真間式土器と比較検討した。比較については千葉県地方のものと郡山遺跡出土のものをならべ、相互観察を行った。比較資料を出土した遺跡は印旛郡栄町向台遺跡、同大畑遺跡で、両遺跡は竪角寺古墳群に隣接し、大畑遺跡は調査により都街路と推定され、向台遺跡は同時期の住居跡の他、官衙で使用されたことが考えられる土器の施薬場が発見され、多量の在地（千葉地方）の土器と共に畿内の土師器・唐三彩・綠釉などがあつた。1点のみであるが、東北地方の内燃土師器环片が発見されている。また、ほぼ同様の検討結果を日本考古学研究所で佐倉市大崎台遺跡の出土資料との対比検討でも得ることができた。これらの比較検討の際、千葉県文化財センターの石田広美氏・郷崎英司氏、日本考古学研究所の柿沼修平氏から資料の提示と教示を受けた。記して感謝したい。
- 註8 「御駒堂遺跡」宮城県文化財調査報告書第83集「東北自動車道遺跡調査報告書VI」P. 307～584 宮城県教育委員会 1982. 3
- 註9 「3. 塩沢北遺跡」宮城県文化財調査報告書第69集「東北自動車道遺跡調査報告書III」P. 279～347 宮城県教育委員会 1980. 3
- 註10 「(1)清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集「東北新幹線関係遺跡調査報告書V」P. 3～540 宮城県教育委員会
- 註11 中村 浩「和泉陶邑窯の研究」P. 109～247 拍書房 1981. 11
- 註12 註1と同

註13 註4と同

註14 大阪府文化財調査報告書第28輯「陶邑」本文編P. 240~270 図録編図版第81~25 大阪文化財センター 1976. 3

註15 「飛鳥・藤原宮発掘調査概報12」P. 24~28 (P. 28出土土器実測図3) 奈良国立文化財研究所 1982. 4

註16 「郡山遺跡Ⅲ」P. 48~53、第24次調査のまとめの中で、第4段階としていたが、刊行後再度検討したところ、第5段階のS E 429等の井戸跡より新しい溝跡であることが、確認されたことから、第5段階と訂正する。

参考文献

仙台市文化財調査報告書第23集「年報1」「郡山遺跡調査概報」仙台市教育委員会 1980. 3

◆ ◆ 第29集「郡山遺跡Ⅰ」仙台市教育委員会 1981. 3

◆ ◆ 第38集「郡山遺跡Ⅱ」 ◆ 1982. 3

◆ ◆ 第46集「郡山遺跡Ⅲ」 ◆ 1983. 3

宮城県 ◆ 第72集「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」宮城県教育委員会 1980. 3

「船塚遺跡」 志波姫町教育委員会 1978

田沼 昭三「陶邑古窯跡群」 平安学園考古学クラブ 1966

大阪府文化財調査報告書第28~31輯「陶邑Ⅰ~Ⅳ」 1976~1979

「千葉県文化財センター年報」No. 7・8 (財) 千葉県文化財センター 1981・82

「房総における鬼高廻の研究」『日本考古学研究所集報』 日本考古学研究所 1982

氏家 和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 1957

◆ 「陸奥國分寺跡出土の丸底甕をめぐって」『山形県の考古と歴史』 1967

田辺 昭三「須恵器大成」 角川書店 1981

調査成果の普及と関連活動

1. 広報・普及・協力活動

月 日	行 事 の 名 称	担当職員	主 催
6. 3	仙台市立八木松小学校郷土クラブ見学会	木村	
7. 1	*	木村	
7. 13	東京大学文学部国史学研究室見学会	木村	
8. 1	仙台市親子文化財教室	菅原・木村	仙台市
8. 23	国学院大学文学部古代史研究室見学会	木村	
8. 26	第35次調査報道発表	早坂・木村	
8. 28	* 現地説明会	長島・木村・菅原	
1. 28・29	第10回城幅官衙遺跡検討会	長島・木村	

仙台市立博物館 文化財ビデオ撮影 10月13・14日

東日本放送「おはようみやぎ」 10月30日

2. 調査成果執筆

「仙台市・郡山遺跡」『考古学ジャーナル』No.224 ニュー・サイエンス社 1883. 11

木村・長島

3. 調査指導委員会の開催

8月10日 第10回調査指導委員会 第35次調査の中間報告

4. 郡山遺跡検討会の開催

11月7日 第1回 郡山遺跡検討会

3月27日 第2回 *

写 真 図 版



図版1 郡山遺跡航空写真



図版2 第35次調査区
遠景(北上空より)



図版3 第35次調査区
全景(南より)



図版4 第35次調査区
全景(北より)



図版 5 第35次調査区
全景(北西より)



図版 6 第35次調査区
全景(北より)



図版7 第35次調査区
S B 425・432A・B
建物跡(北西より)



図版8 第35次調査区
S B 424建物跡
(南東より)



図版9 第35次調査区
S B 437建物跡
(南より)



図版10 第35次調査区
S B 424・425・432A・B 建物跡(南西より)



図版11 第35次調査区
S B 425・432A・B, 424建物跡(北東より)



図版12 第35次調査区
S B 420・422建物跡(南西より)

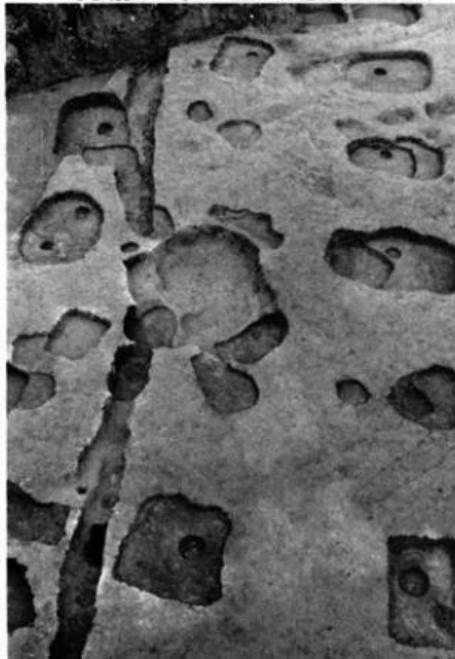


図版13 第35次調査区
S B 422・420建物跡(北東より)



図版14 第35次調査区
北西部遺構群全景

図版15 第35次調査区
S B 438A・B, S B 439・440建物跡 (南西より)



図版16 第35次調査区
S A 408・433材木列, S B 438A・B 門跡 (南より)





図版17 第35次調査区
S B 386一本柱列、S D 385溝跡(西より)



図版18 第35次調査区
S D 445溝跡(西より)

図版19 第35次調査区
S 1390住居跡(南より)



図版20 第35次調査区
S 1400住居跡(北西より)



図版21 第35次調査区
S 1412住居跡(北西より)





図版22 第35次調査区
S-1412・443住居跡、
S-411竪穴造構
S-E429井戸跡(北より)



図版23 第35次調査区
S-1443住居跡(北西より)



図版24 第35次調査区
S-1444住居跡(南西より)

図版25 第35次調査区
S I 441住居跡(北より)



図版26 第35次調査区
S K 404土壤遺物出土状況
(北より)



図版27 第35次調査区
S K 394土壤遺物出土状況
(北より)





図版28 第35次調査区
S E 429井戸跡断面



図版29 第35次調査区
S E 429井戸跡,
4層遺物出土状況

図版30 第35次調査区
S E 429井戸跡



図版31 第35次調査区
S E 429井戸跡掘り方断面図



図版32 第35次調査区
S E 429井戸跡
S K 442土壙
S I 441竪穴遺構





図版33 第35次調査区
S E 429井戸跡井戸枠南側

図版34 第35次調査区
S E 429井戸跡井戸枠東側



図版35 第35次調査区
S E 397 井戸跡



図版36 第38次調査区
全景(南より)



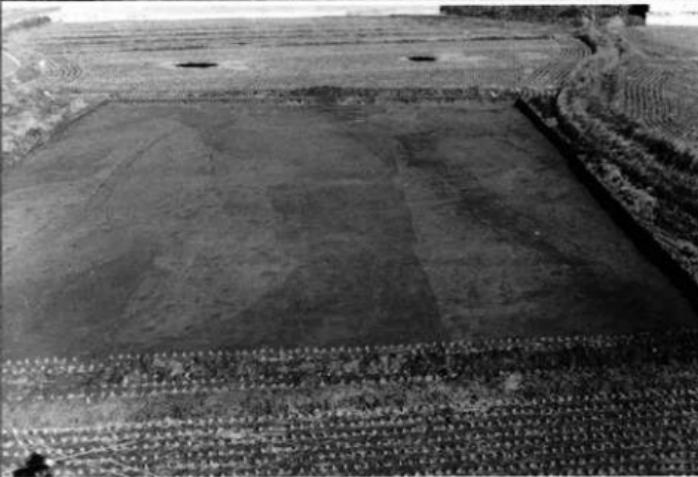
図版37 第38次調査区
S I 462住居跡(南より)



図版38 第38次調査区
S I 462住居跡カマド



図版39 第38次調査区
S K 465土壤断面



図版40 第41次調査区
全景 景



図版41 第41次調査区
S D 476溝跡断面

図版42 第36次調査区
全 景



図版43 第39次調査区
全 景



図版44 第40次調査区
全 景

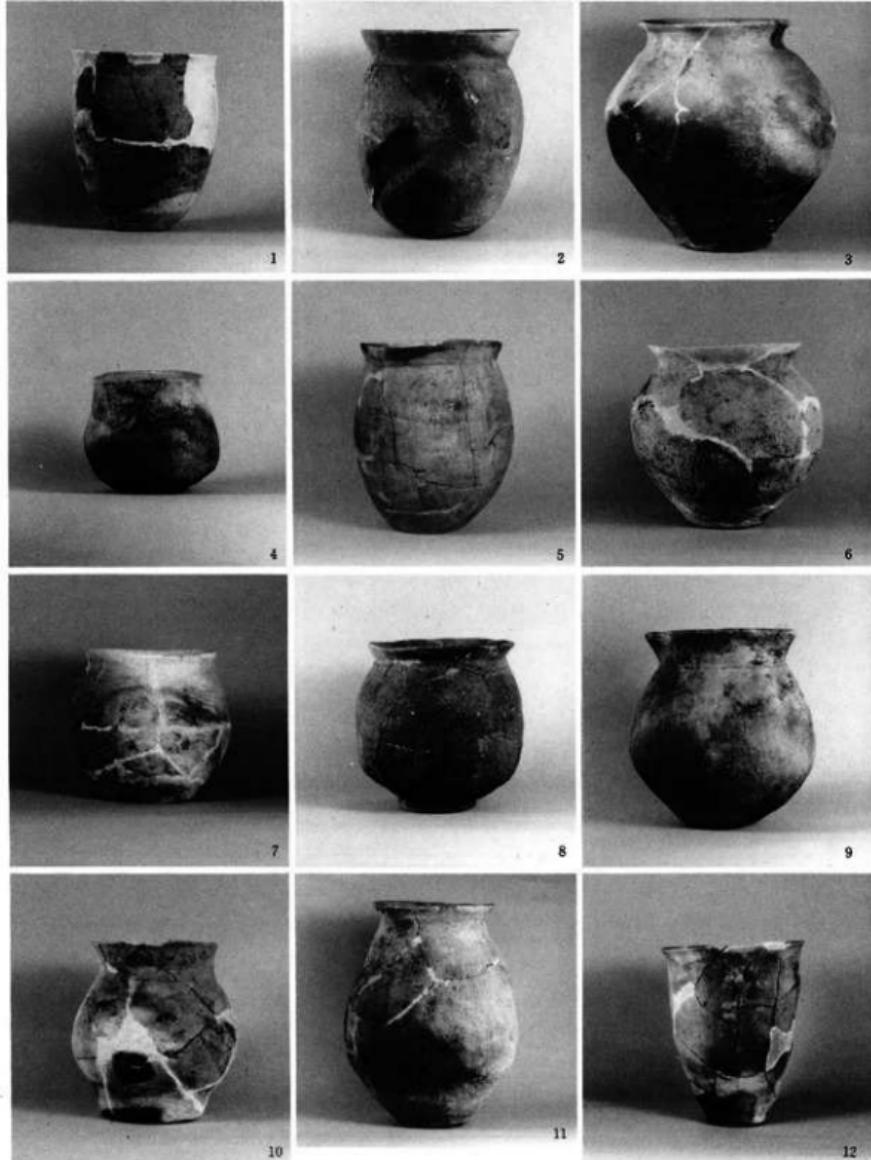




図版45 第42次調査区 全景(北より)



図版46 第42次調査区
外郭南辺材木列



1. C-334 上唇沿縫 S E429 3層 (第11図7)	7. C-316 土師壺縫 S E429 3層 (第11図4)
2. C-354 *	8. C-355 *
3. C-327 *	9. C-320 *
4. C-349 *	10. C-342 *
5. C-328 *	11. C-341 *
6. C-390 *	12. C-340 *

(第11図9) (第11図8)
 (第11図10) (第11図3)
 (第11図1) (第11図5)
 (第11図2) (第11図18)
 (第11図6) (第11図15)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



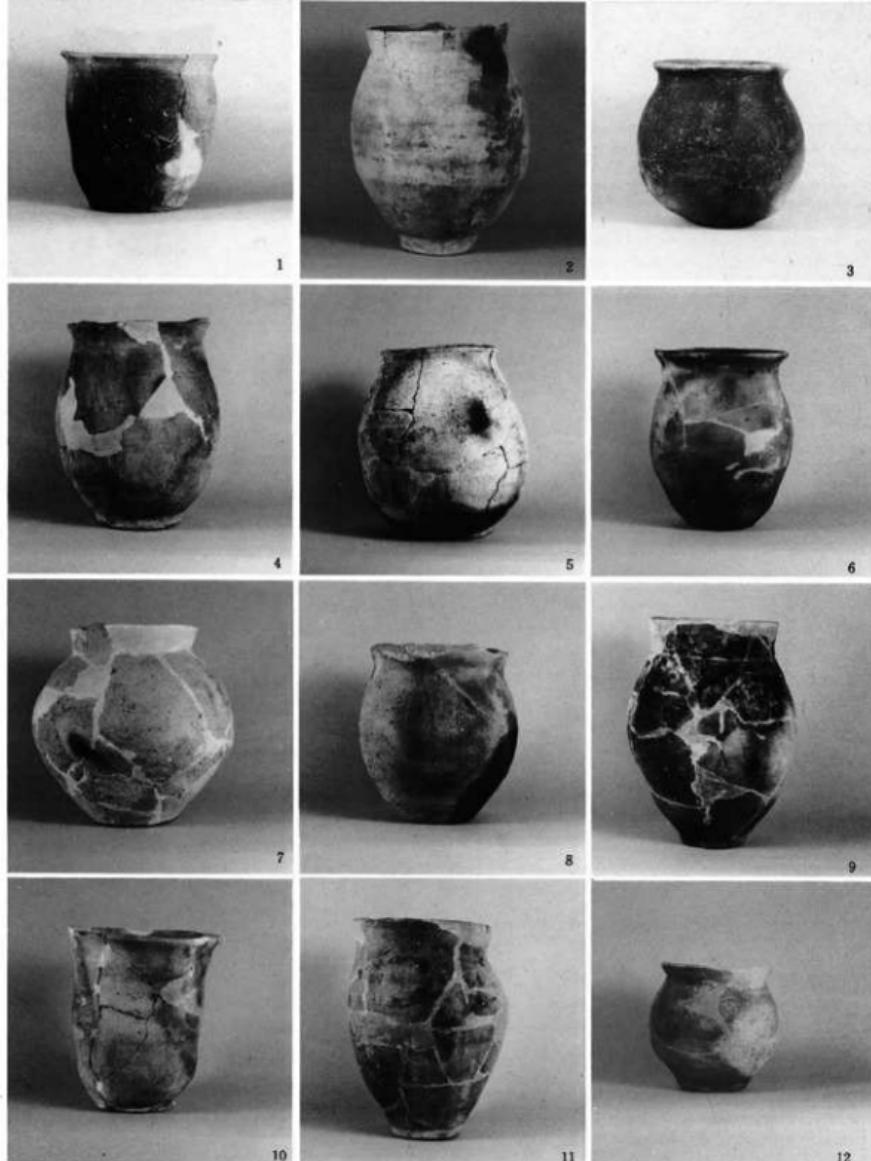
11



12

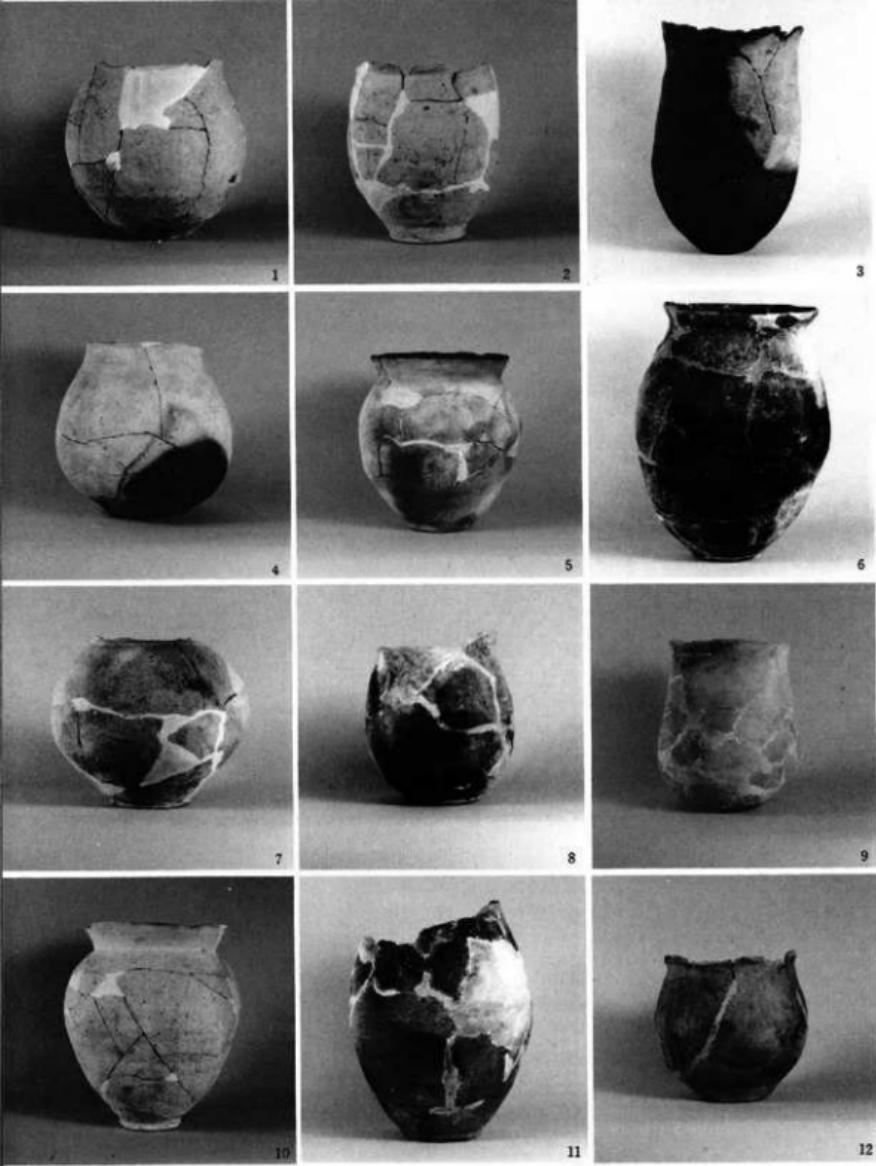
1. C-337 土師器甕 S E 429 4 扉 (第11図17)
 2. C-331 * * * (第11図11)
 3. C-323 * * * (第11図16)
 4. C-321 * * * (第11図14)
 5. C-318 * * * (第11図12)
 6. C-366 * * * (第11図13)

7. C-363 土師器甕 S E 429 4 扉 (第12図1)
 8. C-383 * * * (第12図2)
 9. C-387 * * * (第12図3)
 10. C-375 * * * (第12図4)
 11. C-322 * * * (第12図4)
 12. C-385 * * * (第12図4)



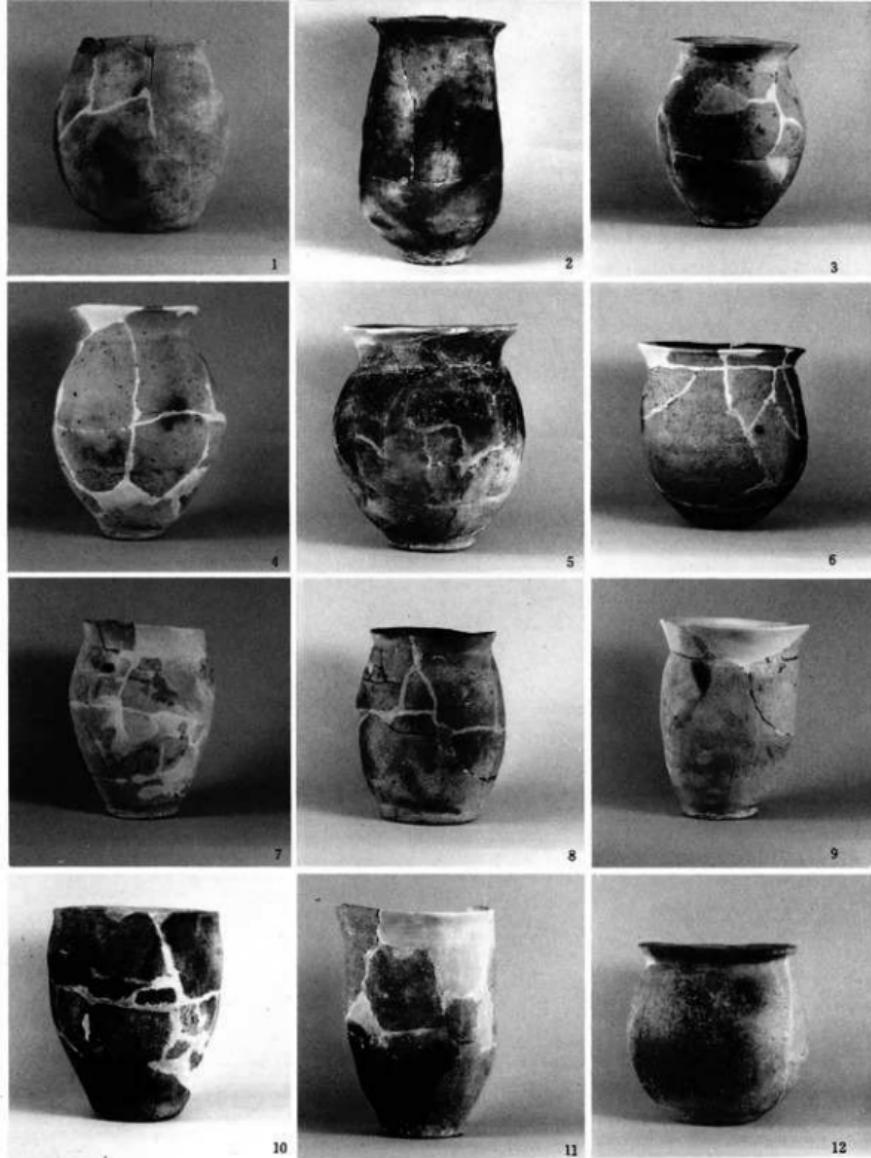
- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 1. C-317 土師器壺 S E 429 5層 (第12図5) | 7. C-386 土師器壺 S E 429 5層 (第12図8) |
| 2. C-338 * | 8. C-335 * |
| 3. C-343 * | 9. C-361 * |
| 4. C-376 * | 10. C-388 * |
| 5. C-372 * | 11. C-392 * |
| 6. C-360 * | 12. C-319 * |
- (*) indicates presence in the corresponding figure.

図版49 第35次調査区 S E 429 井戸跡出土遺物



- | | | | |
|--|------------|---|--|
| 1. C-382 土師器
2. C-394
3. C-353
4. C-325
5. C-330
6. C-395 | S E 429 5層 | 7. C-369 土師器
8. C-378
9. C-352
10. C-362
11. C-333
12. C-384 | S E 429 5層 (第13回3)
(第13回5)
(第13回6)
(第13回8)
(第13回9) |
| * * * | | | |
| (第12回16)
(第12回18)
(第13回2)
(第12回17) | | | |

図版50 第35次調査区 S E 429 井戸跡出土遺物



1. C-357 土師器壺 S E 429 5号 (第13図4)	7. C-354 土師器壺 S E 429 5号 (第13図4)
2. C-326 *	8. C-356 *
3. C-380 *	9. C-346 *
4. C-365 *	10. C-373 *
5. C-351 *	11. C-391 *
6. C-336 *	12. C-359 *

(第13図7) (第13図10) (第13図9) (第13図15) (第13図12) (第13図11) (第13図13) (第13図16) (第13図17) (第13図18)



1. C-332 土師器壺 S E429 5層

2. C-345 * * * (第14図1)

3. C-348 * * * (第14図7)

4. C-367 * * * (第14図5)

5. C-368 * * * (第14図6)

6. C-358 * * * (第14図4)

7. C-344 土師器壺 S E429 5層 (第14図2)

8. C-350 * * * (第14図3)

9. C-329 * * * (第14図9)

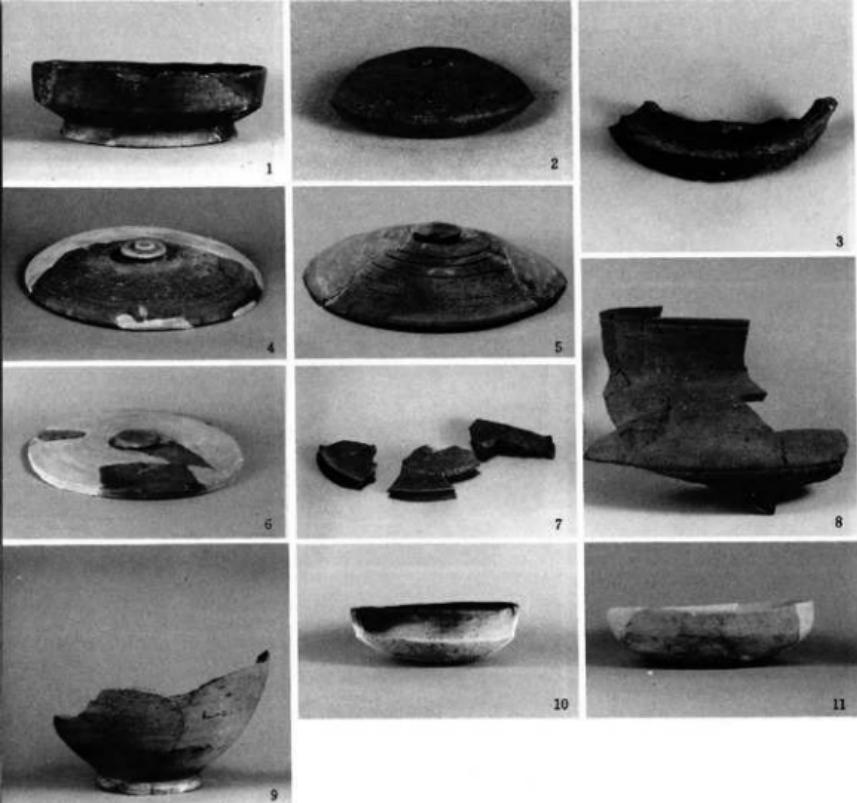
10. C-379 * * * (第14図8)

11. C-324 * * * (第14図10)



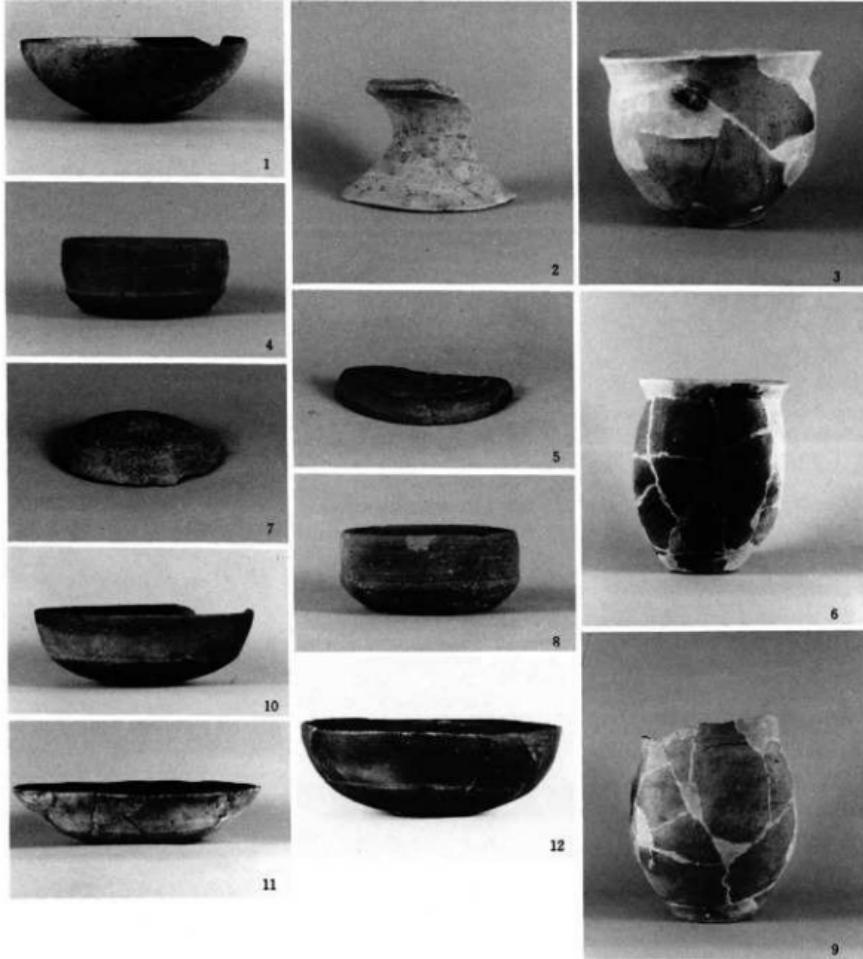
- | | | | |
|----------------|-----------------|---------|----------|
| 1. E-178 須恵器鉢 | S E429 3層 | (第20図8) | |
| 2. E-180 * | 壺 * | 5層 | (第21図3) |
| 3. E-182 * | 鉢 * | 5層 | (第21図4) |
| 4. E-181 * | 壺 * | * | (第20図10) |
| 5. L-5 木製品種 | * | * | (第21図7) |
| 6. C-465 土師器環 | S A386 · S 1443 | (第15図1) | |
| 7. C-438 * | S 1390 炭化物上層 | (第15図5) | |
| 8. C-441 * | * | 3層 | (第15図4) |
| 9. C-304 * | * | 1層 | (第15図3) |
| 10. E-197 須恵器環 | * | 炭化物上面 | (第20図2) |
| 11. C-443 土師器環 | * | 椚出面 | (第15図2) |
| 12. C-440 * | 甕 * | 炭化物上面 | (第18図1) |

図版53 第35次調査区 出土遺物

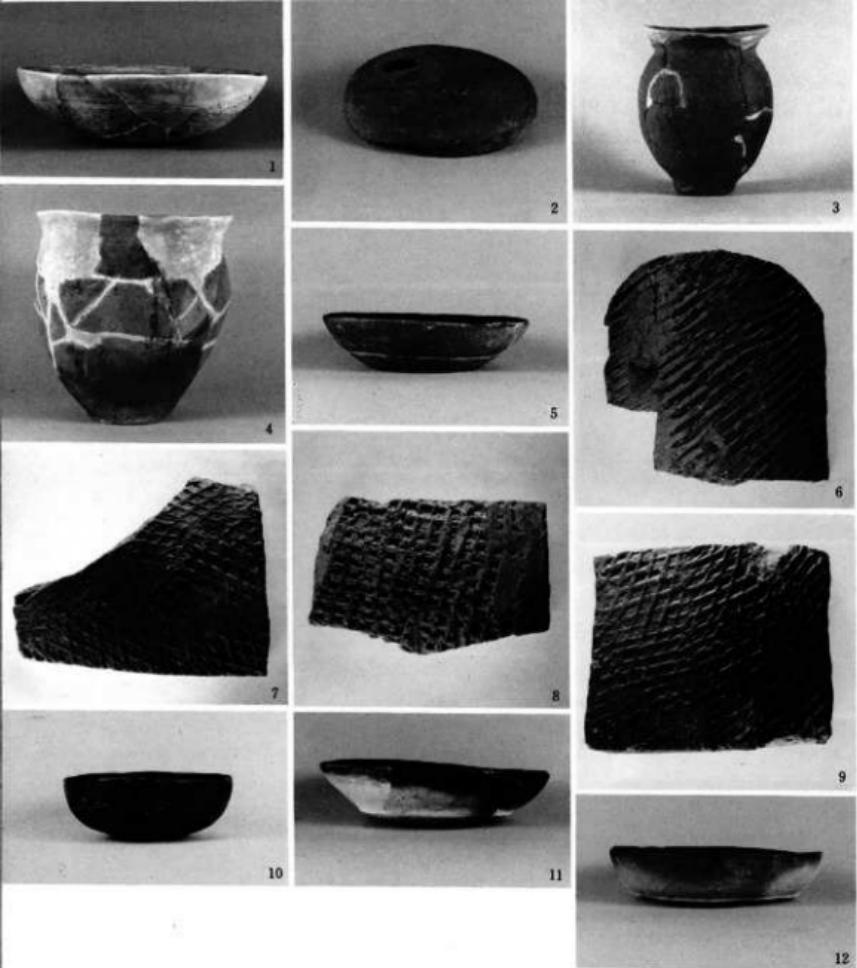


- | | | | | |
|-----------|---------|---------|-------|----------|
| 1. E-196 | 須恵器高台付杯 | S I 390 | 炭化物上面 | (第20図5) |
| 2. E-198 | 須恵器蓋 | * | * | (第19図9) |
| 3. E-195 | * | * | * | (第20図12) |
| 4. E-200 | * | * | * | (第19図16) |
| 5. E-206 | * | * | * | (第19図15) |
| 6. E-218 | * | * | 1層 | (第19図17) |
| 7. E-187 | * | * | 検出面 | (第19図6) |
| 8. E-212 | 須恵器蓋 | * | * | (第21図5) |
| 9. E-210 | 須恵器長頻壺 | * | 炭化物上面 | (第20図11) |
| 10. C-460 | 土師器壺 | S I 412 | カマド | (第15図7) |
| 11. C-285 | * | * | * | (第15図8) |

図版54 第35次調査区 出土遺物

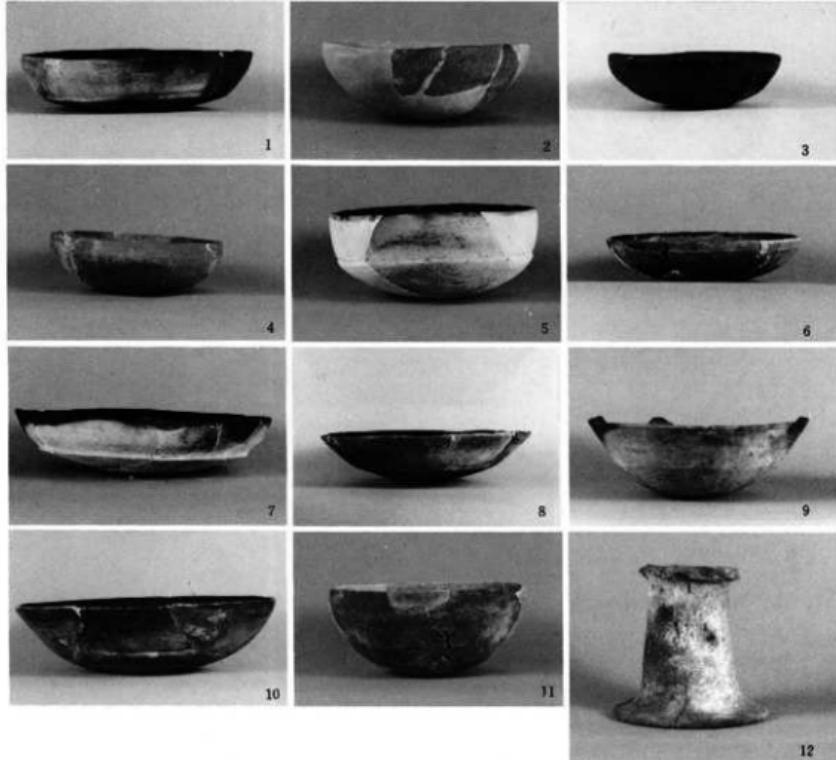


1. C-286 土師器環	S 1412	(第15図6)
2. C-287 . 高环	+	(第15図9)
3. C-288 . 瓶	+	(第18図2)
4. E-179 須恵器环	*	圓溝 (第20図3)
5. E-217 . 瓶	*	P 1 (第19図2)
6. C-473 土師器甕	S 1441	床面 (第18図3)
7. E-215 須恵器甕	*	1層 (第19図4)
8. E-220 . 环	S B435-W1 S3	(第20図1)
9. C-432 土師器甕	S K388-394-391	(第18図4)
10. C-419 . 环	S K389	3層 (第16図1)
11. C-416 . 瓶	*	*
12. C-417 . 瓶	*	*



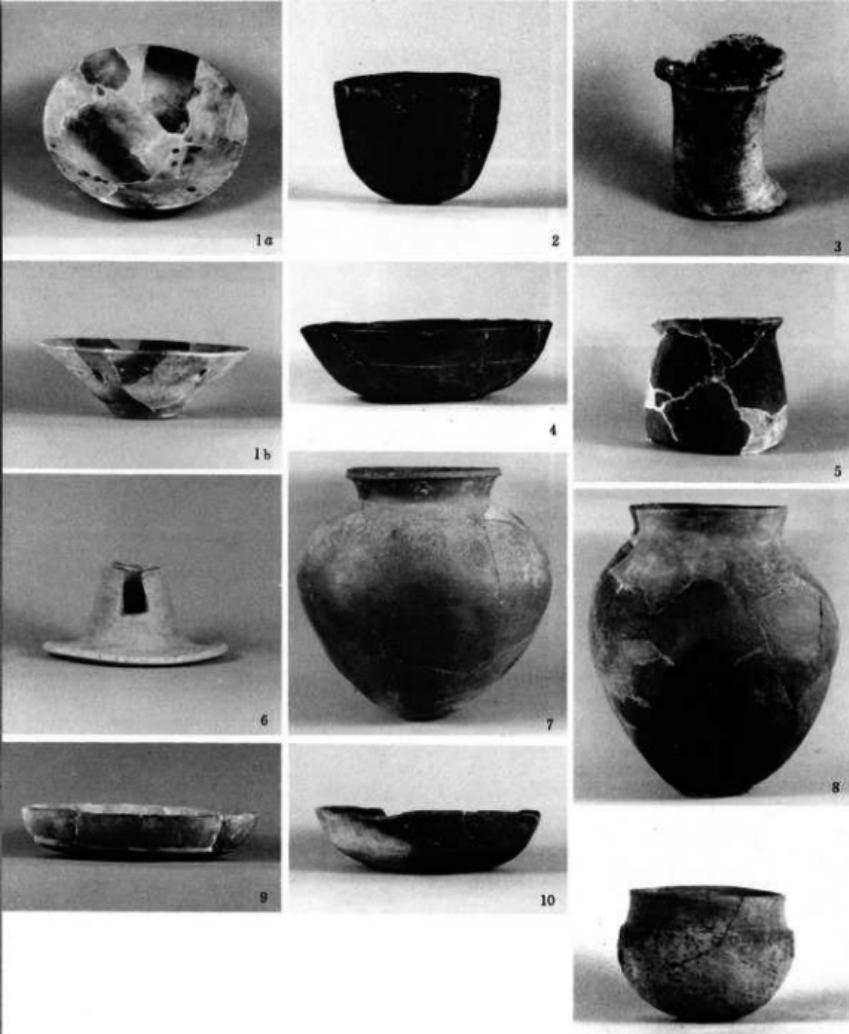
- | | |
|--------------------------|----------|
| 1. C-412 土師器环 S K389 | (第15図11) |
| 2. E-189 須恵器平瓶 + 2層 | (第20図7) |
| 3. C-303 土師器甕 + | (第18図6) |
| 4. C-411 + + | (第18図5) |
| 5. C-434 + 环 S K391 3層 | (第16図2) |
| 6. F-27 瓦 + 2層 | (第22図1) |
| 7. G-19 + + + | (第22図2) |
| 8. G-21 + + + | (第22図4) |
| 9. G-20 + + + | (第22図3) |
| 10. C-308 土師器环 S K394 1層 | (第16図7) |
| 11. C-306 + + + | (第16図5) |
| 12. C-309 + + + | (第16図8) |

图版56 第35次調查区 出土遺物



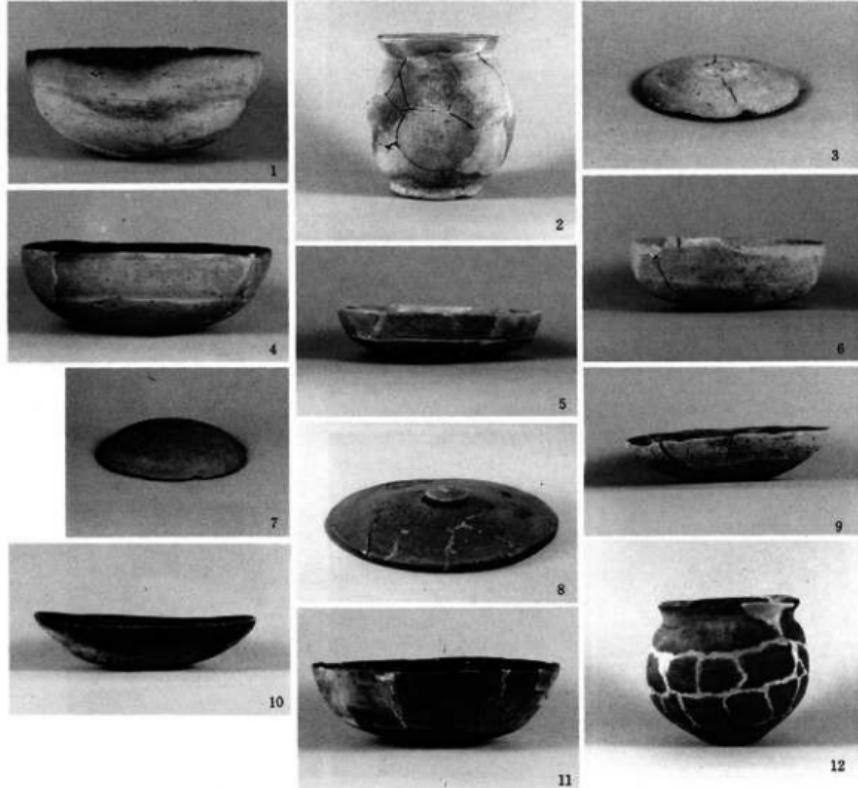
- | | | | | |
|-----------|------|----------|----|----------|
| 1. C-307 | 土師器環 | S K394 | 1層 | (第16図6) |
| 2. C-437 | * | * | * | (第16図10) |
| 3. C-299 | * | * | 2層 | (第16図11) |
| 4. C-311 | * | * | * | (第16図13) |
| 5. C-294 | * | * | * | (第16図12) |
| 6. C-446 | * | * | * | (第16図4) |
| 7. C-436 | * | * | * | (第16図9) |
| 8. C-312 | * | * | * | (第17図1) |
| 9. C-290 | * | * | 3層 | (第17図4) |
| 10. C-305 | * | * | * | (第17図2) |
| 11. C-310 | * | S K390 | * | (第17図3) |
| 12. C-314 | * | 高環S K394 | * | (第17図5) |

図版57 第35次調査区 出土遺物



- | | | | | |
|-----------|-------|--------|------|----------|
| 1a. C-298 | 土師器鉢 | S K394 | 3層 | (第18図10) |
| 1b. | * | * | * | (第18図10) |
| 2. C-453 | 環 | * | 床面下層 | (第17図6) |
| 3. E-176 | 須恵器高環 | * | 3層 | (第20図6) |
| 4. C-427 | 土師召环 | S K395 | 上層 | (第17図9) |
| 5. C-421 | 甕 | * | | (第18図8) |
| 6. C-293 | 高环 | S K401 | 下層P | (第17図8) |
| 7. E-214 | 須恵器甕 | S K404 | | (第21図4) |
| 8. C-472 | 土師召甕 | * | | (第21図6) |
| 9. C-444 | 環 | S K405 | | (第17図10) |
| 10. C-292 | * | S K407 | | (第17図11) |
| 11. C-407 | * | S K468 | 2層 | (第17図7) |

図版58 第35次調査区 出土遺物



- | | | | |
|-----------|------|------------|--------------|
| 1. C-408 | 土師器环 | S K 468 | 4 層 (第17図13) |
| 2. C-282 | * | 西 S K | (第18図9) |
| 3. E-174 | 須恵器蓋 | * | (第19図7) |
| 4. C-464 | 土師器环 | P 115 | (第17図12) |
| 5. E-209 | 須恵器环 | 検出面 | (第20図4) |
| 6. C-461 | 土師器环 | * | (第17図14) |
| 7. E-216 | 須恵器蓋 | * | (第19図8) |
| 8. E-186 | * | * | |
| 9. C-397 | 土師器环 | 38次 S 1463 | 床面 (第27図7) |
| 10. C-399 | * | * | (第27図5) |
| 11. C-398 | * | * | (第27図6) |
| 12. C-396 | * | 甕 | 床面上 (第27図9) |

国版59 第35・36次調査区 出土遺物



1



2



3



4



5



6



7 a



7 b



8



9



10

1. C-402 土師器環 38次 S K448 (第27図1)
 2. C-404 * * * (第27図8)
 3. C-401 * * S I 462 カマド (第27図3)
 4. C-403 * * S I 458 P 7 (第27図2)
 5. E-183 須恵器長頸壺 38次 S I 462 カマド (第27図10)
 6. F-26 軒丸瓦 * * (第27図11)
 7 a G-17 瓦 * * カマド (第28図1)
 7 b * * * * (第28図1)
 8. F-28 * * カマド (第28図2)
 9. C-474 土師器環 42次 S D 35 2 d 層 (第35図2)
 10. E-221 須恵器壺 * 71層 (第35図1)

図版60 第38・39次調査区 出土遺物

職 員 錄

仙台市文化財調査報告書刊行目録

社会教育課

課長 永野昌一
幹事 早坂春一

文化財管理係

係長 大沢隆夫
事務官 岩沢克輔
山口宏

文化財調査係

係長 佐藤隆
研究員 渡辺忠彦

主事 田中則和
佐藤裕

主事 結城慎一
成瀬茂

教諭 菅原和夫
青沼民

主事 柳沢みどり
木村浩二

主事 篠原信彦
佐藤洋

金森安孝
佐藤甲二

古間恭平
工藤哲司

渡部弘美
教諭 渡辺誠

主事 三浜光朗
斎藤野彦

長島栄一
荒井精

派遣職員 高橋勝也

- 第1集 天然記念物盛岡下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
 第2集 仙台城（昭和42年3月）
 第3集 仙台市燕沢寺心寺横沢穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
 第5集 仙台市南小泉法祖跡占塙調査報告書（昭和47年8月）
 第6集 仙台市荒巣五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
 第7集 仙台市富沢町西白石発掘調査報告書（昭和49年3月）
 第8集 仙台市向山東岩山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
 第9集 仙台市根岸町宗寺跡横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
 第10集 仙台市中山町久安久東跡発掘調査概報（昭和51年3月）
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
 史跡遠見塚古墳環境整備第2次予備調査概報（昭和52年3月）
 小泉遺跡一範囲認調査報告書（昭和53年3月）
 栗原跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
 北尾敷遺跡（昭和54年3月）
 研江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
 仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和53年3月）
 網ヶ峯（昭和55年3月）
 半報1（昭和55年3月）
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
 第25集 三神塚跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
 第27集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
 第28集 半報2（昭和56年3月）
 第29集 都山遺跡I・昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
 第30集 山田上ノ田遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
 第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告II（昭和56年3月）
 第32集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
 第33集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
 第35集 小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
 第36集 北前道跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
 第37集 仙台平野の遺跡群I・昭和56年度発掘調査報告書（昭和57年3月）
 第38集 郡山遺跡II・昭和56年度発掘調査報告書（昭和57年3月）
 第39集 真沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
 第40集 仙台市高須鉄道関係遺跡調査概報I（昭和57年3月）
 第41集 年報3（昭和57年3月）
 郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査（昭和57年3月）
 第42集 草薙跡（昭和57年8月）
 第43集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
 第44集 荒城・茂庭住宅用地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第45集 郡山遺跡III・昭和57年度発掘調査概要（昭和58年3月）
 第46集 仙台平野の遺跡群II・昭和57年度発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第47集 仙台平野の遺跡群III・昭和57年度発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
 第49集 仙台市文化財分布調査報告I（昭和58年3月）
 第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第51集 仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
 第52集 小泉遺跡一都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
 第53集 中田畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）

- 第54集 神明社跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第55集 南小舟遺跡－青葉女子学園移転新校工事地内調査報告（昭和58年3月）
第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年3月）
第57集 年報4（昭和58年3月）
第58集 今泉城跡（昭和58年3月）
第59集 下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）
第60集 南小泉遺跡－倉岸建築に伴う緊急発掘調査報告書一（昭和58年3月）
第61集 山川遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）
第62集 燕沢遺跡（昭和59年3月）
第63集 史跡陸奥国分寺跡－昭和58年度環境監査子備調査概報一（昭和59年3月）
第64集 郡山遺跡Ⅳ－昭和58年度発掘調査概報一（昭和59年3月）

仙台市文化財調査報告書第64集

昭和58年度

郡山遺跡Ⅳ

昭和58年度発掘調査概報

昭和59年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市宮町3-7-1

印刷 物 東北プリント
仙台市立町24-24 TEL 63-1166
